

移行期における中国地域社会の文化と風俗の変容

—— 内陸農村の社会関係資本のあり方からとらえる ——

まえがき

文学作品のなかで地域社会¹についての描写はしばしば純朴な民風、牧歌的な風景、長閑な生活などのキーワードが使われている。だが、現在現実の中国の地域社会はどのような状況に置かれているだろうか。風俗画のような長閑さなどありはしないだろう。改革開放以来の数十年間、特に近年ではGDP崇拝がますます盛んになってきて、地域社会における文化、道徳、価値観、そして人々のつながり、村人同士の信頼関係などの事情を把握すればするほど、地域社会に対する文学的な幻想は消えることになるだろう。

確かに近年中国では、地域社会を含め全体の経済が急速に発展してきた。しかしながら、一方ではこのような高度成長は我々にどのような影響をもたらしてくるだろうか。イギリスの社会学者アンソニー・ギデンスが『近代とはいかなる時代か？モダニティの帰結』ではモダニティの危険性を繰り返して強調してきた。ギデンスはモダニティをコントロール不可の猛獣と譬え、人々を帰れぬ道に導いてしまう恐れがある、という論点は忘れがたい。現代中国において、ある意味では急速な発展と転換はモダニティのマイナス的な結果を人々の前に呈示させていると言えよう。

以上の社会背景の下、筆者はいくつかの村に焦点をあて、綿密な調査を行ってきた。これらの調査対象地は全国津々浦々に散在しているごく普通の村である。惜しむらくはこれらの村は都市化に取り残され、知らず知らずのうちに、社会の発展の‘荷物’になっているような雰囲気漂うようになった。いつの間にか調査対象地の農村は社会底辺の代名詞にもなってきた。もはや農村地帯はただ経済発展の廉価労働力を提供する場所に過ぎず、語弊を恐れずに言えば、使い捨てられた人達の養老の場所に過ぎない。（たとえ医療と看護などのサービスが十分提供できない現実であっても）。これらの事態は一体いつから起こり始めたのか、そのプロセスの中でどのような原因が隠れているだろうか。これは中国

¹本来「地域社会」は都市化が進み、都市と農村の区分が自明ではなくなりつつある中で、都市と農村という枠を超えた「地域社会」という概念が生まれた。本稿では「地域社会」と「農村社会」を細かく分けずに、同じ意味を指す。

の地域社会に関心のある人が考えなければならない問題と思われる。

学術研究はやはり現実社会への思いやりが必要だと思う。そのため一つの考えをずっと心に秘めていた。それはいつか故郷に帰って本腰を入れて故郷のことを全面的に調査し、そして、近年故郷で起きていた様々な変容を社会学の視点から捉えていきたい。自分の目で故郷の現況を観察し、変化しつつある中国地域社会に生活している人々のエートス、考え方、行動ロジック、対人関係、そして人々が生活している地域社会全体を社会関係資本のあり方から観察できればと思ったのである。

これまでの考えによれば、一般民衆の生活は社会全体にとって断片的なもので、ちりあくたに等しい存在だと思われがちである。しかしながら、私見では、個々人の平凡な暮らし、全く名の知られていない個人や、家族の生活こそ、社会全体の歴史と現在を語る上で不可欠の材料と思う。郭于華²は、個々人の歴史記憶はその時代の広大な叙述史の有機体の一部分であり、たとえ断片的、零細的な記憶でも非常に重大な意義を持っており、まさに滔滔たる大河の一滴のごときであると述べ、そして、ある意味では民間で語られている物語こそが一般的な教科書よりも歴史と社会の事実に近いかもしれないとさえ指摘している。

また、ミルズは具体的な状況における個人の悩みは社会構造との間になんらかの形で繋がっていると述べた。例えば、社会問題を研究する際に、もし全体の経済構造と秩序が崩壊したのであれば、社会における失業問題は個人で解決できる問題ではなくなること、さらに仮に戦争がグローバル化しつつある現代国家間の不均衡な発展の内在的な属性であれば、個人はこの戦争による困窮状態を避けられないことを理解しなければならないと述べている³。ミルズの主張を言い換えれば、個人の運命、地域社会の発展軌跡は社会全体の巨大な歴史構造、社会構造と密接に関わっているということである。この観点を理解していれば、今日中国の地域社会における様々な変容について、歴史を踏まえながら社会構造の角度から捉えなければならないという主張も理解できよう。

中国地域社会における様々な変容のメカニズムの一端を解明するために、筆者は 2012 年 12 月から 2016 年 5 月までの間、調査地に数回足を伸ばし、同市（村）出身者というインサイダーの立場から延べ四ヶ月間フィールドワークを実施し、村人の日常生活から出発して調査を行ってきた。調査期間中、村人と一緒に食事したり会談したりして、村人の性

² 郭 (2011) p. 3

³ 米尔斯 (ライト・ミルズ) (1996) pp. 31-43

別、年齢、学歴、職業、収入、住居環境、婚姻関係、世帯構成、移動手段、宗教信仰、対人関係、親族関係などの基本属性を社会人類学の方法で調査した。そして、調査で得た情報やデータを基に、移行期における中国の地域社会の文化（教育を含め）、娯楽（賭博事情）、義理と儀式の変容を重点に考察し、ひたすら経済を優先に発展させてきた現代中国の地域社会におけるこのような変容を社会関係資本のあり方からアプローチし、そして背景に潜んでいる原因に触れることに挑戦してみた。本稿がその成果と認められ、同時にこの成果を生かして中国社会全体への思考を導き出すことに寄与できればと願っている。

目 次

まえがき	1
目 次	3
序 章 課題と方法	7
第1節 テーマの概要と社会背景	7
第2節 社会関係資本の定義と機能	10
第1項 社会関係資本の概念整理	11
第2項 本稿での定義	14
第3項 社会関係資本の機能	14
第3節 先行研究	17
第1項 地域社会の文化に関して	18
第2項 地域社会における賭博に関する先行研究	24
第3項 義理と儀式の異変に関する先行研究	28
第4項 地域社会と社会関係資本に関する先行研究	33
第4節 調査概要と調査地の概況	37
第1項 調査に関する基本情報	37
第2項 調査地概況	38
第3項 調査地の選定と自分のポジションについて	40
第5節 本稿の研究方法	45
第1章 地域社会における文化・行事と社会関係資本	47
第1節 文化と地域社会における伝統文化	47
第1項 文化の定義	47
第2項 地域社会における文化と機能	48
第3項 文化と社会関係資本の関係	50
第2節 事例調査	51
第1項 A村における調査	51
第2項 B村の教育事情	62

第3項 B村の宗教信仰に関する事情	69
第4項 C村における調査	74
第3節 考察	79
第4節 小 結	81
第2章 地域社会における娯楽文化—賭博蔓延に関する事情	83
第1節 賭博の定義	83
第2節 調査地の賭博現状と特徴	85
第1項 賭博の広範化と職業化	85
第2項 賭博の経営化	87
第3項 女性の賭博進出	87
第4項 賭博の場所と方式	88
第5項 賭博会社の進出	91
第3節 賭博参加者の心理と社会要因分析	92
第1項 参加者の心理・動機分析	92
第2項 賭博蔓延の社会要因分析	96
第4節 賭博の社会関係資本への影響	99
第1項 地域社会の信頼関係への影響	100
第2項 家庭関係への影響	101
第3項 近所関係への影響	103
第5節 小 結	103
第3章 地域社会における風俗—義理と儀式の変容	106
第1節 義理の社会基礎	106
第1項 定義と基本概念	106
第2項 調査地における儀式の異化事例	107
第3項 考察	111
第2節 祝儀目的の‘整酒風’に関する実地調査	114
第1項 ‘整酒風’の事例	125

第2項 事例分析	125
第3節 地域社会の日常義理---‘帮工’事情	126
第1項 ‘帮工’の構成と組織	126
第2項 葬式における強請	128
第4節 小 結	129
終 章 総 括	132
終わりに	136
謝 辞	137
資料・参考文献	139
付録1 アンケート「当今农村社会的文化、生活、娱乐、习俗的相关調査」	145
付録2 アンケート調査結果統計表	148
付録3 調査協力者の情報	150

序章 課題と方法

第1節 テーマの概要と社会背景

キーワード : 大時代 移行期⁴ 社会関係資本 断裂社会

現代の中国社会をマクロ的な視点からみれば、2008年北京オリンピックを成功裏に終え、その後2010年上海万国博覧会など様々な成果を収め、著しい発展を成し遂げ、世界の注目を集めた。このような中国全体の急速な経済発展により、都市部だけではなく、農村社会においても消費者物価指数⁵が確実に増加し、目に見える物質的な側面は以前より豊かになった。しかしながら、裏面を見るなら、近年では後を絶たない官僚の汚職と腐敗⁶、教育の劣化と荒廃、社会保障制度の立ち遅れ、医療制度の不備、食品安全の脅威などさまざまな目を覆う問題が分野と地域を問わず頻繁に起こっている。

ミクロレベルから捉えるならば、ちょうど身近に格好な例がある。数年前、筆者の村では道路建設が計画された。錯綜する利益関係が絡んでいたため、村人は数年も議論を続けた。結局計画に留まっているだけで、なかなか捗らなかった。2014年の師走に転機を迎え、長年の係争にケリがつき、ようやく道路が完成された。この例が示しているように、中国では地方の道路建設は一見簡単なことと思われがちだが、地域社会の人々にとっては様々な困難を乗り越えて実現された大きな出来事である。このような事例は広大な中国では数限りない現象である。本稿で取り上げられた地域は近年では大きな変化が起こっていた。特に改革開放後、市場化は徐々に伝統社会の構造を変え、社会規範と価値体系も大きく揺さぶられ、地域社会の社会資本が流出していて、近所関係が希薄化し、地域社会の凝集力も次第に解体しつつある。このような急速に発展してきた中国の全体を大きな背景として、地域社会における一見小さな事情を考察し、移行期における地域社会での限られた

⁴ 中国社会の移行期が始まる時間について学术界に異なる見方が存在する。社会学者と歴史学者の一般的な認識として、中国社会の移行は1840年から1949年までの起動と低速発展段階を経て、1949年から1978年までの中速発展段階へ、さらに1978年から今日までの加速発展段階に分けられてきた。(鄭杭生 1996)

⁵ 英語ではConsumer Price Index、略称:CPI 消費者が実際に購入する段階での、商品の小売価格(物価)の変動を表す指数。

⁶ 例えば中央政治局常務委員周永康、中央政治局委員、重慶市党委書記薄熙来、中国共産党中央書記処書記令計画そして元国家中央軍事委員会の副主席徐才厚、郭伯雄の巨額な収賄などは典型的な例である。中央紀律委員会のホームページ公開データによると、2012年から2016年のまでの間、省(部)級以上の幹部摘発者は196人もいる。

資源の争奪、公共事業における協力困難、極端的な利己主義の蔓延など、様々なかたちで浮き彫りになった社会問題の深層的原因を考えてみたい。所謂‘大時代’⁷において何故これらの問題が起こったのだろうか。これらの現象と変容は社会的ないし文化的な視点からどう解釈すべきか、一体どのような原因がこのような現状をもたらしたのだろうか、という問いが浮かび上がる。

近年では「小悦悦事件」をはじめ⁸、転倒したお年寄りに手を貸さないという現象がしばしばニュースになり、中国は今や「信頼」を喪失する危機に直面していると言われはじめた。社会全体の雰囲気は人々が他人に無関心になり、公における道徳心が薄れていることが根底にあると専門家は指摘しているが、しかしながら、専門家のこのような指摘は果たして現象の裏に潜んでいる実質を捕えているのだろうか。日本ではよく「絆」という言葉が口にされる。政治領域では数年前日本の民主党は‘縦に結びつく権利社会ではなく、横につながり合う「きずな」の社会を作りたい’という項目をマニフェストで唱えた。このような「絆」という、人と人が信頼の上に築いた良好な関係こそ社会をつくる基盤であるという事実こそ、現在の中国社会が反省しなければならないポイントではなかろうか。この「絆」という言葉が筆者の研究のヒントになり、後に中国の地域社会における様々な現象を分析する際、社会関係資本⁹という視点から考えることを示唆してくれた。

ここ数年、春節が過ぎた後、ネットでは‘回郷記’¹⁰という農村社会の実態を反映する日記らしきものが流行るようになった。この‘回郷記’と中国農村問題研究者于建嵘の湖南省百村調査¹¹などによると、現在中国の地域社会は重い病気を患っているという。その

⁷ ‘大時代’とは、生でなければ死であるという時代であり、転換期に差し迫り、様々な面において激変している時代である。この用語を最初に使い始めたのは魯迅である。軍閥闘争などの大混乱に陥った民国時代を生きた魯迅は、「中国は今正に‘大時代’を生きている」と述べている。また社会秩序というよりむしろ人の精神状態、心情の安寧が乱れていることを指している。‘大時代’の定義について、許（2011）p. 132 もまた「‘大時代’は魯迅の言葉を引用した言い方である。このような時代は中国の歴史それほど多くない。秦はその一つであり、それから春秋戦国時代、魏、晋、その後は清末と民国などの時代である。」と述べている。総じて言えば‘大時代’は‘時代転換期’とも言える。日本語の‘移行期’と言い換えることもできるが、それでは静止的な捉え方になってしまい、渦中の動態・有様を理解するには遠のいてしまう。本稿の時代背景のベースになるのは、この‘大時代’‘移行期’にある中国である。

⁸2011年10月13日、山東省出身の2才の女の子（愛称は「小悦悦」）は広東省佛山市のある巷で車にひかれて倒れた。救助されるまで18人が無視して通行した事件である。

⁹ ソーシャル・キャピタルや社会関係資本などの呼び方があるが、本稿では両方とも意味的に区別なく使用する。具体的な定義は第1章の第1節の第3項を参照されたい。

¹⁰ 農村出身の大学生または都市部で仕事をしている農村出身者は春節に故郷へ帰って春節を過ごす。帰省の間に農村社会で見聞したことを記録して、SNSなどを通じてネットに載せる日記のことである。

¹¹ 2013年4月から中国の農村社会研究者于建嵘によって発足したプロジェクトである。2016年1月から連載の形でネットに調査報告を公開している。（中国版のツイッターであるウィーチャットで東書房という公式サイトでも掲載している）

‘病症’は金銭至上主義の蔓延と極端にはしった消費主義による地域社会の政治倫理、道徳秩序の破壊である。筆者が調査を行っていた時にも、いくつかのキーワードをよく耳にした。「發財」、「搞钱」（金儲け）、「享福」（左団扇の生活）「房子」（マンション）、「车子」（車）、「路子」（調査地の方言でコネのこと）などが頻繁に会談に現れていた。例えば、調査地では「甬管什么方式，能搞到钱就是有本事」（手段が何であるかはあまり重要ではない、金儲けの上手な人は能力のある人である）という流行り文句をよく耳にした。以上挙げたキーワードを通して、地域社会の人々の価値観と人生観を全面的ではないながら、その一端を窺うことができるであろう。

今日の中国地域社会における様々な変容と異化¹²現象は、単に道徳喪失という単純なレベルを超え、宗教信仰の欠如や政府不作為（消極的に政を執る）を主張する言説の台頭、管理監督の不当をめぐる議論の高まりとしても現れ、複雑な様相を呈しているが、筆者の調査地と同じ湖北省にある別の県を調査した阿古¹³の説明によると、調査対象地三つの村には典型的な特徴がある。それは地域社会の紐帯が弱く、村の幹部は面倒な問題に巻き込まれることを厭い、積極的に地域と関わろうとしないため、公共事業を組織するのが困難であるということである。若者の多くは都市へ出稼ぎに出ていき、空洞化が進んでいる。一言でいえば、「社会関係資本」（social capital）が発達せずに、いわゆる「コミュニティーガバナンス」が殆ど機能していない、ということである。

これらの社会問題、しいて言えばその背景の社会病理について、中国の社会学者孫立平¹⁴は中国にとって最も大きなリスクは社会の動乱ではなく、社会の「潰敗」であると鋭く指摘した。社会の「潰敗」とは、社会という生命体の細胞が壊死し、機能しなくなるということである。比喩的な言い方で言えば、社会の動乱は健康な体が怪我をただけであり、まだ自己回復が可能であるが、社会の「潰敗」は体の細胞に異変と壊死などの問題が発生し、もはや為す術がない状態に近いのである。近年の中国では、国家権力が暴走していて、大政府の下、各種のNGO、NPOのような社会組織¹⁵を育むことが難しく、地域社

¹²本来なら、何が自然状態であるか、何が異化また変型したこであるか、そして何が正常な状態であるかを認定するのが難しい。なぜかという、いわゆる伝統と正常は常に時代の発展と共に変動しているからである。たとえば、昔中国の結婚式では籠または馬、ロバで嫁を迎えていたが、現在はほとんど車で迎えるようになった。本稿での「異化」はこのような変化を指すのではなく、中国社会で一般的に共有されている儒家思想の基本的な人倫道徳に悖ること、たとえば親不孝などの行為を指す。

¹³ 阿古（2009）

¹⁴ 孫（2009）

¹⁵ 自然環境問題などのようなNGO、NPOはまだ良いが、近年敏感とされる組織団体がかなり弾圧を受けている。

会が徐々にシチリア化¹⁶し、公平と正義が大いに侵害されている状態である。孫の指摘した社会の「潰敗」は、ある意味で言えば、社会における人々の信頼、規範、ネットワークを含める社会関係資本が稀薄になり、機能しなくなることでありとも理解できよう。

以上の視点は中国の都市部に偏っている研究であると思われ、やはり中国社会の深層を理解するためには、都市部より約9億人が暮らしている地域社会に重点を置くべきと思われる。中国への理解は大きく言えば、アメリカの人類学者レッドフィールドが提唱した「大伝統」と「小伝統」¹⁷と二つの側面から捉えなければならない。士紳階層を代表する大伝統の文献文化に対し、小伝統は人類学でフィールド調査を通じて見た実生活のことを指している。前者は社会のエリートの社会史、文化史、思想史などであるのに対し、後者は地域社会に根付いている文化習慣のことである。本稿では筆者の出身地を含め、三つの調査地で観察した現状を踏まえ、フィールドワークとエスノグラフィーの手法で得た情報やデータを基に、中国の地域社会が抱えている重大な現実問題を対象としながら、理論的な枠組みを構築することを試みる。中国地域社会における村民間の絆、または人間関係のネットワークの現状を手掛かりに、調査地の伝統文化の衰退、娯楽の欠如と賭博の蔓延、義理に関する儀式と祝儀の損得勘定化（「整酒風」¹⁸）などの現象を考察し、地域社会におけるこれらの現象を社会関係資本のあり方から捉えていきたい。

第2節 社会関係資本の定義と機能

社会関係資本は、社会的ネットワーク（人々のつながり）、信頼、互酬性の規範を意味する。社会関係資本理論は欧米社会学者によって提起され、これまで主に先進国の個人主義の下での社会関係資本について論じられてきたのである。近年、中国でも経済学や政治学、

¹⁶ 中国社会学者鄭也夫が『信任論』では、マフィア勢力の強いイタリア半島シチリア島で、人々が法律で問題を解決するよりマフィアに頼って解決を求める現象がよく見られることを例として挙げた。そして、シチリアでは信頼構築が困難であることとマフィア勢力の盛行はどう関わっているかを論証し、シチリアで現れている現象は社会関係資本の中で重要な要素である‘信頼’が欠けていることは最も大きな原因であり、社会の「不信任的代価」（信頼欠損の代価）であると指摘した。その後、孫立平をはじめ多くの学者は「西西里化」（シチリア化）という言葉を使うようになった。基本的な意味は、社会規則と最低限の信頼関係が欠乏している社会において、マフィア（暴力団）などの組織と地方政府が相互浸透し、持ちつ持たれつの関係になり、暴力に基づいている奇形な社会秩序のことを指している。

¹⁷ ロ伯特・芮德菲尔德(2013) アメリカの人類学者レッドフィールドが、一つの文明の中の伝統を「大伝統」と「小伝統」とに分け、知識人・エリートなどで保持されていく都市の伝統を「大伝統」、そしてそれが村落のレベルに浸透する過程で変形・再解釈されたものを「小伝統」と提唱した。

¹⁸ 冠婚葬祭など正当な理由以外に、こじつけても何らかの‘めでたい’ことに託けて、ご祝儀を目当てに宴を設ける現象。利害を計算して、勘定が先に立つ風俗である。本稿の第3章でフィールドでの調査に基づいて詳細を叙述する。

そして公共政策の広範な分野で、社会関係資本は共通用語として研究者、政策制定者、市民の間に広く普及している。また、地域社会とコミュニティの建設などの領域でも広く応用されている。異なる社会では異なる社会規範と価値観を有しているため、異なる社会背景の社会関係資本が形成してきた。ある意味で社会関係資本は社会属性があつて、異なる文化背景と直接関係していると言えよう。

第1項 社会関係資本の概念整理

社会関係資本という概念は、英語の social capital から訳されたものである。その曖昧さを克服するために多くの論者によって多様に定義づけられてきている。米国の教育家で社会改革者のL・ジャドスン・ハニファンは、自分の故郷であるアパラチア地方の貧しい州、ウェスト・ヴァージニアに戻って、州の農村学校で働き始めた。その後ハニファンは自分の担当する地域社会が抱える深刻な社会・経済・政治問題を解決するには、地域住民の間の連帯のネットワークを強化する以外に方法はない、と判断するに至った。ハニファンは古くからあった田舎の隣人同士の触れ合いや市民的交流の習慣が廃れてしまったことに気づいた。「徐々にこうした習慣がほとんど完全に放棄され、人々の近所づきあいは薄れていった。地域ぐるみの社会生活は、家族の孤独と地域社会の停滞とに道を譲った」¹⁹。一九一六年、民主主義と社会の発展を支えるためには、地域社会との関わり合いを再活性化することが重要だと力説した文章の中で、「社会関係資本」という表現を用いた。

経済学でいう資本 capital は、天賦の経済資源である土地と労働と並ぶ生産要素として、生産された生産手段ないし過去の生産活動が生み出した生産物のストックをいう。「社会関係資本」の場合、通常の不動産とか、現金の意味ではなく、世の中でこれら有形の物質を人々の日常の生活で最も意義あらしめるようなものである。ハニファンは社会関係資本がもたらす私的、公的な利点について次のように指摘した。「地域社会は、そのすべての構成員が協力することによって恩恵を受けるはずであり、一方個人は、様々な交流・関わりのなかに、隣人たちの助け、同情、仲間意識が持つ利点はずである。・・・ある特定の地域社会の住民たちが互いに懇意になり、娯楽、社会的交流、個人的な楽しみのために時折寄り集まる習慣を形成するようになれば、この社会関係資本を熟達した指導者の導き

¹⁹ L. J. Hinifan (1920) pp. 9-10

によって、地域社会の生活状態の全体的な向上を目指す方向に向かわせることが簡単に可能となるだろう」²⁰。

『哲学する民主主義』を著したアメリカの学者パットナムは社会関係資本について「協調的な行動を容易にすることにより社会の効率を改善しうる信頼・規範・ネットワークなどの社会的仕組みの特徴」と定義した。その後の『孤独なボウリング』では社会関係資本について次のように述べている。「社会関係資本が指し示しているのは個人間のつながり、すなわち社会的ネットワーク、およびそこから生じる互酬性と信頼性の規範である。この点において、社会関係資本は「市民の美德」と呼ばれてきたものと密接に関係している²¹」。パットナムの主張によれば、社会関係資本は集団内または集団間の協力を容易にさせる規範・価値観・理解の共有を伴ったネットワークで、個人の資産ではなく、社会やコミュニティに帰属するものである。そして、社会関係資本は三つの面から捉えられる。まず社会関係資本は、人々の互いの信頼と、互恵的な協力関係から成り立っている。次に社会関係資本の主な特徴は、友人、家庭、コミュニティなどの間に繋がっている社会的なネットワークである。こうして社会関係資本は、社会構造と社会ネットワークの特性であり、物事の推進に大いに役立っている。パットナムの社会関係資本理論は広く認識されている。

それに対し、フランスの社会学者ピエール・ブルデューは「ソーシャル・キャピタルは、多少とも制度化された関係の永続的ネットワーク、お互いに知り合いであり、認め合うネットワーク関係の所有、つまりあるグループのメンバーであることと関係する、現実及び潜在的なリソースの集合である。これはおのおののメンバーに集合的に所有された資本、多様な意味を持つ信用を付与する一種の信任状にあたるものを提供するものである²²」と述べ、社会関係資本の中に埋め込まれているネットワーク自体は、個々人が所有すると主張している。この定義に際してブルデューは次のようにもいう。「所与の主体によって所有された社会関係資本の量は、当該主体が効果的に活用できる連結のネットワークの規模に依存する。それとともに、当該主体が繋がっている人々が各々自分の権限のもとに所有する資本（経済的、文化的、象徴的）の量に、依存する」²³。このように、経済資本や文化資本に還元できない、いわば社会ネットワークとそこに埋め込まれ他の形態の資本の関数のようなものとして、社会関係資本が導入される。だが、経済資本や文化資本から完全に

²⁰ L. J. Hinifan (1916) p. 130

²¹ パットナム(2006) 柴内康文訳 p.14

²² ナン・リン (2008) p. 28

²³ Bourdieu (1997)p. 51

独立ではない。個人の保有する文化資本や経済資本が高いほど社会関係資本が増大するし、社会関係資本が豊かであるほど文化資本や経済資本も高められるという。すなわち、社会関係資本は他の二つの資本形態に対して増幅器の役割を果たしている。

アメリカの学者コールマンは、社会関係資本を「個人の協調行動を起こさせる社会構造や制度」と定義している。彼によると、社会関係資本は、人々がお互いの関係を維持するために行う投資行動の有無により増加または減価されるものであるという点で、物的資本や人的資本と同様に資本であるという。たとえば、小規模で同質性が高く閉鎖性も高い社会的ネットワークのある地域コミュニティでは、人々が相互信頼を形成しているために、ことこまかに相手の信頼性を判断する必要がなく取引コストが少なく済む。そのために更に協調行動が促進され、知識や技能という各個人にとっての人的資本の蓄積が促進されるという²⁴。コールマンとパットナムの差異は、前者の社会関係資本は個人に帰属するものであり、小規模のネットワーク内における協調行動から得られる個人の潜在的な利益が議論の焦点であるのに対して、後者は社会関係資本を個人の行動を説明する概念ではなく、「市民社会度」(civiness)という社会の有り様の尺度と捉えられている。

菅谷²⁵によると、社会的ネットワーク論を提唱しているナン・リン(Nan Lin)は、「社会構造に埋められており、目的行為のためにアクセスされ、または動員可能である資源」と社会関係資本を定義し、社会的ネットワークに投資を行って、特定の構造を構築すると、ある種の経済的なリターンが得られると考えている。したがって、社会的ネットワークを社会関係資本のコア概念と考え、信頼や規範はその結果と見なしている。更にナン・リンは社会関係資本が三つの面を含んでいると指摘した。それは第一に、社会関係資本は社会的ネットワークと社会関係に根付いており、社会関係を抜きにして社会関係資本を語る事ができない。第二に、社会関係資本は価値が上昇するもので、この上昇は貨幣、財産の面だけではなく、人力資本としての声望、名誉、信頼なども含まれている。第三に、社会関係資本は社会の様々な関係に嵌められている資本であると同時に、人々が各種の利益を獲得するための投資でもある²⁶。

中国の研究者鄭伝貴は「社会関係資本はある特定の共同体に存在しているネットワークである。このネットワークの基本的な特徴は信頼、互酬、規範と協力に基づいていること

²⁴ コールマン (1988) pp. 95-120(英文文献)

²⁵ 菅谷・金山 (2007) P. 11

²⁶ 馬 (2012)

である。社会関係資本は一種の公共資源であり、人々の持続的な持ちつ持たれつにおいて生まれているものである²⁷⁾と指摘した。中国では、とりわけ農村社会において、血縁、親縁、地縁関係によって形成されたネットワークは社会関係資本の典型的な特徴である。

第2項 本稿での定義

以上述べたように、社会関係資本の定義はさまざま、社会学・政治学・経済学などの分野で多少異なる意味で使われているが、基本的な指向においては一致している。即ち、社会関係資本は物的資本、人的資本と同じように資本の一種であり、信頼、規範、ネットワークの三つの基本要素を含め、行為行動者に便利を提供しているものである。本稿では稲葉が纏めた定義を借り、社会関係資本を「社会における信頼・規範・ネットワーク」が含まれていて、他者に対する信頼、「持ちつ持たれつ」「お互い様」といった互酬性の規範意識、共通の目的に向かって協調行動を導くもの、また人やグループ間の絆であるネットワーク²⁸⁾と定義する。これによると、社会関係資本は、人と人のきずなや信頼、互酬性の規範といった非物質的な現象であり、社会関係資本を活用することで個人が何らかの得をするというだけでなく、社会関係資本が涵養されている社会では、私たちの直面する社会的ジレンマの解決がなされ、さらに民主主義や経済の発展がもたらされると考えることができよう²⁹⁾。

第3項 社会関係資本の機能

社会関係資本の定義をレビューしてきたように、信頼、規範、ネットワークといった社会関係資本の三要素は人的資源であり、かつ無形資産である。社会関係資本は社会の各領域では、たとえば「社会関係資本と地域コミュニティ」、「社会関係資本と社会問題」「社

²⁷⁾ 鄭 (2006) pp. 127-131

²⁸⁾ 稲葉 (2015) p. 27

²⁹⁾ 社会関係資本と市民的協同、民主主義について、政治学者のガブリエール・アーモンドとシドニー・ヴァーバは、一九六三年出版の『現代市民の政治文化』において、自発的結社・団体への加入の仕方・程度が、一国のソーシャル・キャピタルに影響を及ぼすというトクヴィルの認識を検証しようとした。アーモンドとヴァーバが比較検証した英国、米国、イタリア、西独、メキシコ五カ国のうち、市民文化に近いのは英国と米国であった。それにたいしてイタリアは、「比較的救い難い政治的疎外、社会的孤立、不信」と特徴とし、市民と政治をつなぐ市民的有力感や市民的協同能力は低い、とされた。また、社会関係資本と集合行為の問題について、オルソンが一九六五年の著書『集合行為』において、集合行為問題の基本理論を明らかにした。

会関係資本がマクロ経済に果たす影響」など広範にわたって機能していることが様々な研究³⁰で証明された。稲葉は社会関係資本が何の役に立つのかについて、「社会関係資本は、我々の日常生活のあらゆる面に影響している。その分野は、①企業を中心とした経済活動、②地域社会の安定、③国民の福祉・健康、④教育、⑤政府の効率、などにわたっている。④教育と⑤政府の効率はともに、社会関係資本の結果であると同時に、社会関係資本を築く要因でもある³¹」と述べた。

そのプラス面について、まず社会関係資本は地域の安定に大きな影響力を持つことが挙げられる。社会関係資本の効果としてしばしば挙げられるのは、地域コミュニティの一体感の醸成と犯罪の抑止である。パットナムは『孤独なボウリング』の中で、社会関係資本が豊かな地域コミュニティほど犯罪と暴力にさらされるリスクが小さく、安定していると指摘した。日本でも、複数の研究が社会関係資本と犯罪率との関係を指摘している。稲葉は「泥棒が多いと友人が増えるが、知人が減る。ただ、泥棒の多い地域内に限ってみると一般的信頼の高い人ほど知人数が多い。一方、泥棒の少ない地域では、一般的に信頼の水準に関係なく知人数は一定であるから、犯罪の多い地域ほど、一般的信頼の役割が犯罪抑止に重要であるという。これは、犯罪が多い地域では、人はよく知らない他者とのつながりを放棄し、仲間内だけのつきあいに限定するようになることが予測されるためである³²」と分析した。

パットナムによれば、社会的交流の稠密なネットワークは、「自分は今、あなたのために一肌脱ぐけど、お返しはしないよ、親切にしておけば、いずれそのうち、あなたの世話になったり、回りまわって他の人たちの世話になるはずだから」といった、広範な互惠的關係についての揺るぎない規範の形成を助長するように見受けられる。別の言い方をすれば、社会的交流は、集合行為につきものの様々なジレンマを解消し、交流がなかったならば人々が互いに信頼し合って行動しそうにないような状況でも、人々に互いに信頼しあって行動するように促すのである。経済的・政治的な取引が社会的交流の稠密なネットワークのなかに定着している場合には、人を便宜主義や背任行為へと駆り立てる動機は薄らぐ。広範な相互互惠という特色を備えている社会は、人を信用しない社会よりも効率的であるが、それは貨幣を媒介とする取引の方がバーター取引より効率的なのと同じ理由によ

³⁰ 上田 (2010) p. 15

³¹ 稲葉 (2015) p. 41

³² 稲葉 (2015) p. 51

る。相互信頼は、社会生活の潤滑剤である。あらゆる交換をその都度決済する必要がなければ、我々は非常に多くのことを達成できるはずである。このように、社会関係資本は、私的な財であると同時に公共財でもありうる。多くの場合、社会関係資本の恩恵の一部は実際の費用負担者の直接的な利益につながるが、恩恵の一部は傍観者を利用することになる³³という。

社会関係資本と民主主義の関係について、パットナムは「市民社会の変化に関する理論は、十九世紀に社会学が独自の学問領域として発足して以来、社会学の核心部分を占めてきた。おそらく、最も支配的だったのは、社会の近代化、工業化、都市化に伴って地域社会の絆が衰退してきた、とする見方だったと思われる。工業化は、生産関係を変え、人々に田舎を離れて都市に移住したいというインセンティブを与える。そうした動きが、さらに、代わりに新しい環境に見合った新しい形態の連帯や社会組織の衰退をもたらす。近代化が地域社会を弱体化させるとするテーゼは、多くの意味でデュルケム、テンニエス、ウェーバー、ジンメル等々の社会学の古典的創設者たちの著作の核心部分を成していた。社会的道徳観と社会的繋がりの変化が、民主主義の機能にとって意味を持つとの前提に立って、そうした変化を検討するという、我々が直面する特定の課題を最初に取り上げたのは、米国社会の偉大な観察者であるアレクシス・ド・トクヴィルだった。一八三〇年代の著作の中でトクヴィルは、自分の母国のフランスにおける一七八九年の革命に続いて、貴族的共同体志向的な社会が、民主的、産業主義的社会へとどのようにして道を譲ろうとしたのかを記した。個人主義的な民主主義は、二つの異なる形態をとりうる、とトクヴィルは示唆している。第一は、上位のパトロンたちおよび下位の下僕たちを結ぶ貴族社会の絆から新たに解放された、政治的に平等な市民が、自分たちの自己利益だけにかまけ、その結果、少数の支配者たち制約を受けることなく容易に権力を掌握し集中化する、原子論的な専制政治である。第二に民主的形態としてありうるのは、リベラルで、分権的、参加的な形態である。トクヴィルが米国で見たような、市民社会の公共心に富む道徳観と組織は、民主的な平等につきものの遠心力に対する歯止めととして機能する」³⁴と指摘した。

また、アメリカの研究では、教育程度が高いほど、社会全般への信頼、いわゆる一般的信頼が高く、ネットワークも大きい。したがって、教育は社会関係資本を育むという推論

³³ パットナム(2013)p. 5-6

³⁴ パットナム(2013)p. 11-12

が成り立つと言えよう。逆に言えば、‘孟母三遷’³⁵の例や「朱に交われば赤くなる」という言葉からも分かるように、社会関係資本が教育に影響を与えている。この点について、稲葉は「家庭内の社会関係資本は学業成績、退学抑制、大学進学率などに影響を与える。また、学級内の社会関係資本には学業成績と退学抑制の効果がある。学校内の社会関係資本は、教師間での信頼構築が専門家コミュニティの形成などを通じて間接的に学業成績に影響する。保護者と教師間の社会関係資本、なかでも親の学校参加は退学抑制や大学進学率と関連している³⁶」と社会関係資本と教育の関係について述べた。

さらに、社会関係資本は政府の効率とも関係があるとされている。パットナムは『哲学する民主主義』の中で、イタリアの州政府間の効率の違いは社会関係資本の違いに起因するとした。イタリアでは、市民共同体としての成熟度が高いほど州政府のパフォーマンスは良好で、逆に、市民共同体としての成熟度が低いほど州政府のパフォーマンスは劣る。稲葉³⁷は社会関係資本と政府の効率は互いに影響し合っていると、その因果関係の経路について、次のように述べている。「市民活動が活発で共同体意識が旺盛な地域では、行政側は市民の協力を得やすく、政府も情報公開を含め行政の透明性を高めて、市民参加をさらに得やすくしようと努力する。つまり、市民からの行政側へのモニタリングも効き、地方政府の首長が独善で行政を行うことはできない。行政を担当する側もおのずと効率性を意識せざるをえない・・・（中略）信頼と互酬性の規範のある地域は、官民の協調が行われやすく、行政コストの低減につながる」と。

もう一つ最後に挙げれば、社会関係資本の概念あるいは指標は、都市部の市民社会、民主主義分析に有効であるだけでなく、地域社会の研究と分析、開発と再建にも有意義な視点・指標を提供してくれるであろう。

第3節 先行研究

長年、中国地域社会に関する研究が国内外で盛んに行われている。とりわけ地域社会の経済、環境保護、出稼ぎ農民工、社会保障、過疎化、留守児童などの問題が広範囲にわた

³⁵ 孟子の母が子の教育のために三度住まいを変えた物語である。幼い頃の孟子は墓地のそばに住んでいたときは葬式ごっこをやり、市場のそばに移り住むと商売ごっこをし、学校の近くに寄り住むと学生の真似事をして遊ぶようになった。

³⁶ 稲葉（2015）p. 57

³⁷ 稲葉（2015）p. 62

って数多く取り上げられてきた。地域社会を研究する対象について言えば、最も多く注目されている対象は政府に認定された「模範村」（お手本になるムラ）である。国内外の研究はこれらのいわゆる「模範村」対象に主としてモノグラフ的な研究で取り組んでいる³⁸。研究成果として地域の伝統行事、価値観の変遷に関する論文も少なくないが、中国地域社会を社会全体の枠組みに入れて、社会関係資本の視点からとらえる研究は惜しむらくはそれほど見当たらない。以下、先行研究の到達点と残された課題についてレビューしておく。

第1項 地域社会の文化に関して

地域社会における文化の現状について、董磊明が「近年農村社会の住民が物質的に豊かになるに伴い、今まで束縛された環境から脱出し、解放感をひたすら求めているうち、極端な利己主義者になってしまう現象に危機感を禁じえない³⁹」と指摘し、社会全体の富、婚姻、労働、人間関係などに対する価値観及び倫理観が混乱状態に陥っていることにも言及した。賀雪峰が「本体の価値観と社会価値観が両方欠けている状況の下、人々は道徳と宗教信仰の力で私欲を制御することができなくなり、長い目で物事を見ることも少なくなり、前途と未来のない道徳喪失の社会になる恐れがある。中国社会は既にこのような状態に陥っている⁴⁰」と指摘している。

地域社会の文化衰退について、汪錚は歴史の脈絡から中国の地域社会における秩序の変遷経緯を整理した。汪は「何世紀も前から、中国の社会は地域社会（コミュニティ）を基盤としていた。人々は第一に家族を尊重し、次に氏族、さらに村、地域を重んじていた。儒教の教えによって社会には厳密な階層があった。社会は法による支配ではなく、家族の儀礼や地域の掟などをベースにした高度な地方自治によって統治されていた。集団主義的な相互依存と家族の結束が中国文化の中では社会をまとめる接着剤となり、何千年にもわたって日常生活を律し、地域社会に秩序をもたらしてきたのだ。ところが19世紀の二回のアヘン戦争によって、封建王朝の臣民は世界に目を向けるようになった。結果から見れば列強の武力が中国をグローバル化させたのだ。伝統的な農耕社会は徐々に衰退し始

³⁸ 中日の研究者に限って言えば、瀬川昌久（1991）聶莉莉（1992）石田浩（1996）陸学芸（1994）などがある。そのほか湖南省において百村調査を行っている于建嵘がある。また、村民自治に関しては、徐勇（1997）、張厚安・徐勇・項継権（2000）などが現地調査の資料を元に成果を挙げている。

³⁹ 李、趙、葉（2008）p. 25

⁴⁰ 李、趙、葉（2008）p. 50

め、地域住民が農村暮らしから脱出し、都市部へ富と安全を求めに移動したのである。人口変動の波に打たれ、家族、氏族、村、そして地域社会の構成に亀裂が生じ、後に崩壊の段階に進んできた⁴¹⁾と述べている。汪は歴史社会学の視点から捉え、地域社会の解体に伴って、文化も生活実態も変容してきたと指摘したが、文化と生活の変容が逆にその地域の社会関係資本にどのような影響を与えているのかの具体相についてはあまり触れなかった。

陸学芸は20世紀中国の社会構造の変化について、以下のように述べている⁴²⁾。「1911年辛亥革命以前、皇権の支配力は県までだった。中央政府が県に行政長官‘県令’を任命し、県以下の郷は‘郷紳’という村に在住するエリート層によって管理される政治体制だった。中華民国までは‘郷村自治’という基本的な精神の下で、封建時代の統治方法を踏襲した。しかしながら、1949年新中国が成立後、県以下に区と郷を設置した。そして、1954年『中華人民共和国憲法』が公布され、憲法に則って郷鎮政府が県の下で政権組織と認定され、郷鎮人民委員会を設置した。その後1958年人民公社を作り、「政社合一」⁴³⁾という体制を取った。行政は公社委員会によって執り行われ、「三級所有、隊為基礎」⁴⁴⁾という体制の下、公社の下に生産隊を設け、大隊の下に生産小隊を設置した。つまり、公社、大隊、小隊は集団経済組織でありながら、行政組織でもあった。全国5億あまりの農民をすべて人民公社に編入させた。1983年に人民公社体制を廃止、公社を郷鎮人民政府に変え、生産大隊を村民委員会に改編し、生産隊を村民小組に改編した。その後2006年農業税の廃止によって地域社会の管理が緩くなり、元々衰退しつつある伝統行事が一層退廃した」と、陸は各段階の社会構造に触れながら当時の伝統行事と文化の状況について分析した。

また、李小曇は地域社会の文化建設と社会構造の関係について詳しく論述している。李は「新中国が成立して以来、農村地域の発展と建設は一度も‘建設される’という受身の意識から脱出したためしがない。1949年以降およそ20年の間、「合作化」⁴⁵⁾運動は‘農

⁴¹⁾ 汪 (2014) p.64

⁴²⁾ 陸 (2002) p.26

⁴³⁾ 一郷一社の規模を基本単位とし、末端行政機関であると同時に集団所有制の下に、工業、農業、商業等の経済活動のみならず、教育、文化さらには軍事の機能を営んだ。すなわち、従来の権力機構（郷人民政府と郷人民代表大会）を「合作社」と一体化した組織のことを指している。

⁴⁴⁾ 1958年11月28日『人民公社の若干の問題に関する決議』では、人民公社の統一指導に基づく、分級管理の制度を規定した。分級管理とは、公社の管理機構は、一般に公社管理委員会、管理区（または生産大隊）、生産隊の三級に分割され、生産隊は組織労働の基本単位である。

⁴⁵⁾ 中国の1953年から農業の社会主義化を目的とする農業生産互助合作運動のことである

業は大寨に学べ’ というスローガンのもと地域社会を改造した。これは典型的なトップダウン式の建設である。その後文化大革命が終わるまで「一大二公」⁴⁶「一平二調」⁴⁷などのイデオロギーと方針の影響を受け、地域社会の伝統的な文化がほぼ全面的に壊された。前世紀の八十年代になってから、世帯別生産請負制⁴⁸が実施され、閉鎖的な地域社会は徐々に都市化の影響を受け、経済的な面では成果を収め、伝統文化も文化大革命時代より少し復興してきた。だが、その後再び衰退に転じて以来、事態は一向に改善されていない。地域社会の伝統文化の立て直しは上が決めた政策で押し進められるというトップダウン式では地域差の問題はとうてい解決できない。地域社会の住民を動員し、地域住民の主導性を発揮しなければならない⁴⁹」と主張している。李は、地域住民の自主性こそ、地域の文化と生活を活発化させる最も重要な要素である、との認識を示しているが、人々の地方管理と地方自治などの公共事業に参加する意欲と能力が衰退している現状と原因について言及しなかった。

近年政府主導の「新農村建設」⁵⁰というスローガンが唱えられ始めた。これについて、徐勇は「農民の生活も目に見えるほど豊かになり、農業税が廃止されたおかげで、農民の負担が大分軽くなり、物質生活が良い方向に向かっているが、しかしながら、農村の伝統文化が萎縮し、文化施設の不備、経費の不十分等などが原因で、農村社会の文化生活は極めて乏しくて、精神生活が非常に単調である。地域伝統文化への関心度合いは‘社会主義新農村建設’の要求にふさわしくない⁵¹」と指摘し、農村における伝統文化建設の重要性を訴えた。それから、徐は「優秀な伝統文化の多くは広大な農村に保存され、山間地帯に流行し、代々の村や民間に永く伝えられてきている。しかしながら、現代文明の強烈なインパクト及び伝統文化が長期間にわたって蔑ろにされてきたことと相俟って、多くの文化

⁴⁶ 1958年から始まる人民公社化運動期の用語、人民公社の目標は公社以前の高級農業生産協同組合に比べて、一つにはその規模はずっと大きく、二つには財産の共有化をいっそう進めなければならない。

⁴⁷ 働いても働かなくとも同じといった悪平等主義と上の命令によって無償で物資を調達すること。

⁴⁸ 中国語で「家庭聯産承包責任制」また「大包干」という。農家が世帯別に、集団から配分された土地の経営をすべて請け負う制度。一定の食糧を国に収めれば、余剰作物を自由に売ることができ、郷村による費用徴収を除いた利益が農民のものとなる。それまでの農業の集団経営方式である人民公社体制に代わり、一九七〇年代末、安徽省鳳陽県小崗村が村の存亡をかけて秘密裏に行ったのが始まりで、のちに公認され全国にひろがった。

⁴⁹ 李、趙、葉 (2008) p. 34

⁵⁰ 2006年中央政府の、第十六回五中全会で「生産発展、生活寛裕、郷風文明、村容清潔、管理民主」という五つの主旨で新しい農村建設を目指すスローガンである。日本語に訳せば、生産を發展させ、生活を豊かにして余裕を生み出し、農村の気風を文明的にし、農村を清潔に整え、管理を民主的にするという意味になる。

⁵¹ 徐(2008)p. 12

が次第に忘れられ、物質文明と精神文明のアンバランス問題が浮き彫りになった⁵²」と述べ、最後に地域社会の文化衰退の現状に懸念を示した後、政府が主体として地域社会の文化を再建設すべきであると主張した。徐は上から下へというトップダウン式の手法で地域社会の文化の再建を図るべきと提唱している。だが、現実として中国において多くの地方では、すでに様々の独立した特徴の見られる生活は終焉を迎えつつあり、異なる省と県の特徴自体が識別できなくなり、文化に関する公共生活の痕跡も次第に消滅しつつある。

農村における文化の衰退について、中国の郷土文学者梁鴻⁵³が自分の生まれ故郷梁庄⁵⁴を被写体にして近年の文化衰退事情を詳らかに叙述した。たとえば梁はこう述べている。

「世間でよく言われるのは経済の衰退は文化の混乱と衰退を招くということである。何故かという、文化の伝承には安定的な基礎がなければならないからである。すなわち、生活が安定で経済的にも余裕があつてはじめて、文化の内在と形式が十分に発展できることになるだろう。だが、現在中国の農村における状況はこれと正反対である。各家庭の収入が増加し、農村全体の経済も急速に発展してきたが、文化⁵⁵伝承面においても人々の精神面においても、さらに知的探求心においても、今は断裂と衰退の傾向にある。中国ではこの断裂と衰退が‘転型’という言葉で一括りされているが、このいわゆる‘転型’の背後に巨大な文化破壊があることが忘れられがちである」と。梁は調査地である自分の故郷について、新世代の家庭では皆それぞれ出稼ぎに行き、ほとんど春節しか帰らず、村の政治と公共事業例えば選挙、道作り、学校建設などに関心を持たない現実を如実に描写した。梁の描写から被写体となった村では社会関係資本が非常に不足していることを読み取るに難くない。梁は郷土文学の手法で自分の故郷を描いただけで、社会学と文化的な視点からの分析はあまりなされていない。

さらに、地域社会の文化衰退、人間関係と秩序倫理の崩壊について、董磊明は「今日、農村の衰退と過疎化は様々なことに起因しているが、最も大きな原因は農村の日増しに深刻化が進んでいる原子化⁵⁶であると言っても過言ではない。近年、ムラという組織が次第に解体するに伴って、多くの農村共同体が崩壊しつつあり、ムラの公共空間が切り刻まれ、

⁵² 徐(2008)p. 16

⁵³ 梁(2015) p. 224

⁵⁴ 内陸の河南省の西南部に位置している村である。

⁵⁵ 梁鴻によれば、ここで言う文化は伝統的な考え方、道徳、習俗だけではなく、現実生活の文化状態も含まれている。

⁵⁶ 人間関係が希薄になって個人がばらばらになるアトム化のこと。人間関係が疎遠になり、社会ネットワークが解体し、社会規範が失効となること。賀雪峰『新郷土中国』北京大学出版 2013年。

人間関係は疎遠になり、協力関係はますます形成しにくくなった。実際の生活に見合う共同文化が欠如していて、ムラに存在していた道德、輿論、価値体系も次第に崩壊している⁵⁷⁾と述べている。董は地域社会の人々の倫理道德の喪失と価値観の変遷を社会問題とみなしているだけで、これらの現象を社会関係資本という視点から分析するという姿勢は見当たらない。更に言うと、現在の中国社会を全体からみれば、ほとんどまとまりのない異なる諸階層と、あまり相互に結びつきのない民衆からなっていて、その結果ほとんどの人が私的利益のことしか考えない集団と化し、だれの目にも明らかな共通利益が大幅に縮小しているという大きな社会背景を視野に入れなかった。

日本の中国農村研究者田原⁵⁸⁾は「中国の農村に関しては情報の偏りが顕著である。発展の裏側に取り残された悲惨な農村というイメージ、一部のセンセーショナルな貧乏、暴動、陳情などのイメージのみが針小棒大に伝えられる傾向にある」と指摘している。田原はコミュニティ・スタディの手法で中国農村の東部、中部、西部それぞれの公共建設の取り組みを描いた。特に注目されている中部農村は「自力更生」の影響で、社会関係はバラバラな「原子化」状態にあると言われている。宗族に代表される伝統的な人間関係がすでに消失しており、他方で、市場経済に基づく新しい人間関係は形成されておらず、そのためだれもが自分の小さな家庭の利益を顧みるのみで団結せず、村落生活が立ちゆかなくなっている。コミュニティ住民を結びつける紐帯の解体现象は、公共建設の停滞を招き、地域経済の発展速度に影響を与えるのみならず、社会治安や老人扶養問題などにも及ぶ社会問題発生の原因ともなっていると指摘した。田原は地域別に中国の農村社会における人々の間の協力的な行動を促す「信頼」と「ネットワーク」の異同を分析していたが、これらの異同を社会関係資本のアンクルから検討する試みは見当たらなかった。

日本の中国社会研究者阿古⁵⁹⁾は、湖北省のある村の水利・土地利用からスタートして中部農村の社会関係資本について考察し、地域の社会関係資本が発展しないのは、中部農村の場合、自然環境の厳しい西部農村と異なり、人的要素に起因する側面が大きいと指摘している。灌漑システムの崩壊、土地区画調整の難航ということが現実になった今日でも、「組織依存」の体質は変わっていない。市場経済によって変化を迫られる中、失墜した父権は回復せず、家族の社会的機能は失われる一方であり、道德・イデオロギー面に真空が

⁵⁷⁾ 李、趙、葉 (2008) p. 24-25

⁵⁸⁾ 田原 (2013)

⁵⁹⁾ 阿古 (2009)

生じたことから、「公德心のない個人」が生まれやすくなっているのが背景原因だと深く分析した。さらに阿古⁶⁰は、ゲーム理論においてよく語られる「コモンズの悲劇」という光景を目の当たりにし、「ソーシャル・キャピタルの欠けている社会では、互酬関係から育まれる信頼感という潤滑油が不足している。多くの者が地域で協力し合えばより高い効果が得られることが分かっているながらも、協力が成立しなかった場合、協力した者が損失をこうむり、離反したものが利益を得られると考える。村民同士の間には、信頼関係が構築されていないため、お互いに利益を得る機会を逃してしまう」と中国の地域社会における協力困難の現状を指摘した。

その他、農民工問題や農村における伝統文化、例えば祭りなどを取り上げる論文が多数発表されているが、惜しむらくはそれらの研究は伝統文化活動を単に一つの文化活動ととらえるに留まり、伝統文化と道德秩序の関係を含んだ社会構造のアンクル、さらに中国の地域社会の社会関係資本のあり方という視点からの研究は非常に少ないと言わざるを得ない。

海外では社会関係資本と文化に関連する研究は盛んに行われている。日本の研究者村上俊介は社会関係資本と市民文化について「我々が東アジア諸国における社会関係資本の具体的有様を観察するとき、近代のプロジェクトとして市民社会・社会関係資本(市民文化)とはまったく異質の(あるいは類似の)伝統的社会諸関係(文化)を見出すだろう・・・1980年代以降、東アジア諸国は急速な経済発展を果たしてきた。そしてその過程において、政治的にも大きな変容を見せてきている。短期であれ長期であれ、東アジア諸国は市民社会化への途上にある。我々は異なった社会における文化・規範の異質性をまず認識し、これまでの伝統文化・規範が政治・経済の変容にどのような意味を持ち、そして政治・経済の近代化の途上で、その背景にある社会関係資本が意味転換をなしているのかどうか、そして意味転換がなされているとすればどのようになされているのかを分析する必要がある⁶¹」と指摘した。日本の研究者大守隆は東アジアにおいて社会関係資本と地域統合への含意について、日本、韓国、中国、台湾、香港、タイを比較してアジアの伝統的な地域共同体の特徴を以下のようにまとめた。①チームワーク重視 ②相互監視の強さ(高い人口密度が背景) ③高齢者の積極的役割と敬老精神(生産活動から引退しても地域社会経営などに関与) ④「祭り」が一体感や帰属意識醸成の上で重要な役割を果たしてきた ⑤

⁶⁰ 阿古(2009)

⁶¹ 村上(2010)社会関係資本研究論集 第1号 2010年3月

クローニ的傾向 ⑥自然との関係はより複雑であるが、エコロジーを重視し、自然を舞台とした共生意識。さらに、大守は「アジア的な共通性は、アジアの自然条件やそれを背景とした農村社会の影響を受けて形成されたものであるが、産業構造の変化や人口の都市集中にともなってこうした要因の重要性が低下している可能性がある。アジア諸国では、アジア的農業を基盤とした伝統的な地域社会の果たしてきた機能が経済発展や都市化に伴って市場や政府に代替されつつある。しかし、その移行は必ずしも円滑に進んではいない⁶²⁾」と述べた。

本稿は先行研究とは異なり、以上に挙げた問題を現在中国の社会関係資本のあり方からアプローチしていきたい。長年にわたって、国家と個人の間において不可欠の「社会」⁶³⁾が「欠落」⁶⁴⁾していること、さらに近年では消費主義の下、過度な物質生活への依存は社会の公共精神と社会の関係資本にどのような影響を及ぼしているのか、今日の地域社会における社会関係資本の稀薄化は、ある意味で言えば民衆の権利が貧困状態にあるからなのではないかという仮説をたて、幾つかのケーススタディーを取り上げながら分析していきたい。

第2項 地域社会における賭博に関する先行研究

いわゆる「社会主義新農村建設」が進むに伴い、地域社会におけるさまざまな問題が盛んに議論されてきた。こうした中で、地域社会における賭博現象も学界の注目を集めている。だが、研究の全体はまだ一般的なギャンブルとしての枠内で取り扱い、初歩的な段階に留まっているものが多いと言わざるを得ない。近年の農村地域における賭博に関する先

⁶²⁾ 大守 (2011) 社会関係資本研究論集 第2号 2011年3月

⁶³⁾ 19世紀半ばまで日本語には「社会」という単語はなく、「世間」や「浮き世」などの概念しかなかった。筆者はここ言う社会は、国家と個人の間、ギルドなどの中間的な団体、またNGO、NPOなどの組織を指している。

⁶⁴⁾ 南開大学准教授熊培曩が『重新發現社会』の中で(p.10)、社会主義国家と名乗る中国では「社会」が欠落している、社会主義国家が「社会」を警戒する、と述べている。熊は国家と個人の間、政府と市場の間に「社会」があることを忘れてはならない、また「社会」は健康的な個人が自ら組織して、自治を目標としているものである、たとえばアメリカでは各分野で活躍している百万余りの非営利組織などがその例である、と主張している。それ以外に類似の提唱もある。清華大学社会学者郭于華は、中華人民共和国建国初期に全ての経済組織、社会組織が国家掌握の政治組織のコントロールに置かれ、政府が例外なく社会の隅々まで管轄の触覚を張り巡らしたことを「国家吞併社会」と定義した。また、歴史社会学者黄宗智がこれを公共領域(第三領域)と名付けた。「社会」そして「社会」の「欠落」について、様々な議論が行われているが、本稿は紙幅のため以上挙げた三人の提唱だけを紹介する。

行研究を CNKI⁶⁵で検索したところ、農村賭博問題に関する論文及びレポートは 30 件ほどしかなく、その内容も賭博の実態描写と新聞報道の類がほとんどである。学術的な視点での農村賭博を研究する論文数は一桁に留まり、その内容も様々である。具体的に見てみると、張書強・周通⁶⁶は、近年農民たちの生活水準が高くなったことが賭博の経済基礎を提供したとし、‘勤労致富’⁶⁷という伝統的な価値観が忘れられつつあり、短期間で大金持ちになりたいという拝金主義が大きな原因である、と指摘した。また、農村の賭博現象と娯楽概念の区別から農村の賭博観念の特徴を分析する研究がある。例えば、鮑曉会⁶⁸の「当代農民賭博娯楽観」という農村賭博の形成原因及び予防法を検討する研究と徐学慶⁶⁹「现阶段農村賭博氾濫的原因及治理对策」などである。実地調査を行った論文は、鐘啓華⁷⁰の「農村賭博現象看中国農村社会変遷」で、実証研究を踏まえ農村賭博の現状と生活様式の変遷との関係について分析し、農村賭博の現象への理解に有効な内容である。

鐘燕⁷¹、陸治業⁷²はそれぞれ広州市花都区と南寧市邕寧区の城中村⁷³で、立ち退きで大量な補償金を得た農民の賭博状況について調査した。それによると、これらの地域では、にわかに金持ちになった農民が賭博の様式を多様化させ、インターネットを通じて海外の賭博組織と関わっているケースも少なくない。健康的な娯楽施設が非常に乏しいので、長い間精神生活が満足できない状態にある。金持ちになった農民のほとんどは起業することが難しいと感じる一方、出稼ぎの低い収入には既に興味がなくなり、家でごろごろするようになった。無味乾燥な農村生活を強いられ、時間と経済の余裕ができた農民は精神的な刺激を求めるため賭博に走ってしまった、と述べた。また、趙⁷⁴は「農村の生活が改善するとともに、文化への渴望も次第に強まっている。政府機関は一部分の地方では成功を収めているが、ほとんどの所では形式に留まり、文化建設に使うべき資金が流用されている。伝統的な農村文化と娯楽が徐々に消えていき、図書館、映画館、運動場、文化コーナーな

⁶⁵ 中国知識基礎施設工程 (China National Knowledge Infrastructure) 1999 年中国教育部などの応援の下で清華大学が作った各領域にわたる学术交流のウェブサービスである。

⁶⁶ 張、周 (2013)

⁶⁷ 勤勉で苦勞を厭うことなく、働いて富を得る。

⁶⁸ 鮑 (2007)

⁶⁹ 徐 (2001)

⁷⁰ 鐘 (2006)

⁷¹ 鐘 (2012)

⁷² 陸 (2011)

⁷³ 「城中村」中国の都市化過程に現れた現象である。改革開放後、都市の発展の需要に応え、都市の面積が次第に拡大していく。こうした中に、もともと都市の周辺に存在していた村は高層ビルに囲まれ、都市の中の村になる。このような村落を「城中村」と呼ぶ。城中村が特に顕著に見られる都市として、北京、上海、天津、重慶、武漢、広州、深圳などが挙げられる。

⁷⁴ 趙 (2011)

どの現代娯楽施設がなくて、やむを得ずに賭博場に行った村民が少くない。賭博のような社会現象は文化建設の欠如の現れだけではなく、同時にその結果でもある」と述べている。趙は現在の農村社会では文化建設への投資が少なく、健康的な娯楽文化のインフラ設備が不足している事態を指摘した。中国の農村社会学者于建嵘の百村調査報告⁷⁵でも賭博についての調査記述はよく見られる。その原因について、以上で触れたように、伝統行事例えば各種の祭りが行わなくなり、公共生活がほとんど消失し、村民はテレビを見る以外に殆ど楽しむことがない、などの要因が挙げられている。若者はパソコンとスマートフォンに興じることができるが、教育素養の高くない人々は単調な生活を如何に耐えていくか、やはり賭博以外にあまり良き方法がないようである、と指摘した。

中国の研究者牛犇は、地域社会の賭博問題について「農業税が廃止された後、農村が相対的に自由になり、大きな事件が発生しない限り、政府が農村のことにあまり関与しない。こうしたなか、賭博蔓延などを制約する力がなくなった。新農村建設の核心は整った農村環境と生活の豊かさだけではなく、「新農民」を育てることこそもっとも大切なことである⁷⁶」と言及した。牛は近年政府が農村社会へのコントロールの力を弱めるにつれて、実質上農村の文化建設を放置していると指摘している。

日本の中国研究者阿古⁷⁷は湖北省の沙洋県におけるフィールドワークで、現地の娯楽のあり方から人間関係の特徴をとらえてみた。現地の娯楽といえば、麻雀が主流であり、調査当時に流行っていたのが番号くじの「六合彩」⁷⁸である。番号購入のヒントが隠されている「番号新聞」を読みながら、熱心に議論している人々の間では、「何番買った」が日常的な挨拶になっていて、大変人気を博しているようである。さらに、六合彩の流行は投機心を持つ農民が増加することを表している一方、バックに暴力団が存在することや、借金による自殺・家庭崩壊もあり、単なる娯楽に留まらない危険性があると懸念している。同じく日本の研究者増川宏一は、古今東西の資料に基づき、その時代の社会的環境などを考察し、賭博の定義や起源、歴史などまとめた。原始共同体社会から奴隷社会、封建社会。資本制社会と移り変わる中で、人類は賭博をどのようなものとして扱ってきたにかを明ら

⁷⁵ 序章の第1節 p.8の注を参照

⁷⁶ 牛 (2010)

⁷⁷ 阿古 (2009)

⁷⁸ 香港の宝くじ (ロックハップチョイ: mark six) 1から49の中から、好きな数字を6つ選ぶタイプの宝くじである。ここでの六合彩は現地では「地下六合彩」と呼ばれ、非合法的な六合彩のことである。

かにしようとした⁷⁹。

梁鴻⁸⁰は「中国では農村社会のみならず、半分以上の県では麻雀などの賭博活動は最も流行っている娯楽方式である」と指摘し、「特に県城では、いわゆる‘茶館’⁸¹はお茶を飲むところではなければ本を読むところでもない。‘茶館’という名義で営業許可書を獲得するだけである。悪く言えば、‘茶館’という所はもはや合法的な賭博場になっている。そして、参加者は一般の政府公務員から個人経営主までそれぞれ固定した麻雀友達がいるほどである。中国の地域社会だけではなく、市民社会でも賭博が浸透している」と述べている。地域社会における賭博事情について、陳柏峰⁸²は賭博を組織するチンピラらしき集団による農村社会への危害が甚だしいと指摘し、市場経済のもとに農村は「知り合い社会」（熟人社会）⁸³のロジックの拘束から解放され、賭博などの犯罪行為はもはや知り合い社会の規則で管理できなくなっている。村民も賭博会社のような組織に対抗することがなく、農村社会の秩序が大いに乱されていると両湖地域の賭博事情を懸念していた。

最後に、王李娜⁸⁴は安徽省にある幾つかの村を調査し、文化と心理の角度から農村社会の賭博を分析し、賭博の社会コストからその危害をも言及した。だが、賭博はただ一つの孤立した現象ではなく、地域社会における様々な社会環境と密接に関わっていることが忘れられている。賭博の繁栄は地域社会の文化衰退、社会関係資本とどう関わっているかについて、王はほとんど触れていない。以上のように、中国研究者の先行研究の文献を見ると、おおかたの研究者は一般的な賭博の種類、特徴、原因、危害、及び対策について叙述した後に、農村地帯の賭博に対しての取り締まりを呼びかけ、その必要性和緊迫性を訴えるに留まっている傾向にある。これらの賭博に関する研究はたいてい間接的にあるいは本筋ではない文脈で補足的に言及する程度に留まっている。洞察はないわけではないが、一般的な地域社会の問題として扱い、社会学の視野で賭博の形成要因、関連する様々な社会

⁷⁹ 増川 (1980)

⁸⁰ 梁 (2015) p. 235

⁸¹ 中国の小説家、劇作家老舍 (本名舒慶春) が 1957 年に発表した劇曲「茶館」のイメージではない。

⁸² 陳柏峰 (2011) p. 133

⁸³ 「熟人」とは「よく知っている人」のことであり、日本語では適切な言葉が見つからない。費孝通はかつて中国農村社会を「熟人社会」と呼んでいた。郷土社会は地方性の制限の下で、ここで生まれ死ぬという社会になっていた・・・これは一つの熟人社会であり、見知らぬ人のいない社会である。「熟人社会」では、血縁と地縁が一致しており、いわゆる親類・友人の間柄あるいは親族でなくても親しく、その自然地理的な境界と社会生活の境界はみなはっきりしていて、同時に大体重なり合っていて、閉鎖的な社会空間に属している。テンニースの「ゲメインシャフト」の意味に近いと筆者は読み取っている。

⁸⁴ 王 (2008)

要素についての研究、とくに社会関係資本との関係についての言及はあまり見当たらない。

第3項 義理及び儀式の異変に関する先行研究

日本では「義理をたてる」、「義理を欠く」、「義理にも」、「義理と人情の板挟み」という言い方がある。また、日本人は何か行動する場合に、無意識のうちに「義理を欠いたらいけないから」というような外的要請に従っている時がある。ここで言う義理は社会生活を営む上で、立場上、また道義として、他人に対して務めたり報いたりしなければならない義務を意味する。中国の日本文化史研究者韓立紅⁸⁵は「日本語の語彙を調べれば、『義理』のある関係は、冠婚葬祭に際して行われる家の互助関係をはじめとして、家屋の改新築や災害病気に対する互助関係、本家（親分）に対する分家（子分）の年始礼や盆礼、地主小作間のそれ、親戚知己間の贈答慣例などに現れていることが分かる。そこで、『義理』とは、日本の社会関係を規制する一定の生活規範の意味であったことが明らかである。それ故それは、親子関係、主従関係、師弟関係、親方子方関係などの上下関係における上位者の下位者に対する威圧を示すだけのものでないことを知らなければならない（中略）・・・ここから、『義理』は『人情』との対概念として機能し、『義理』は公を意味し、『人情』は私を意味するものと考えることができる」と述べている。

日本社会の義理について、文化人類学者ルース・ベネディクトは『菊と刀』の中で次のように分析していた。「日本人のよく言う言葉に『義理ほどつらいものはない』というのがある。人は『義務』を返済せねばならないと同様に、『義理』を返済せねばならない。しかしながら『義理』は『義務』とは類を異にする一連の義務である。これに相当する言葉は英語には全く見当たらない。また、人類学者が世界の文化のうちに見いだす、あらゆる風変わりな道徳的義務の範疇の中でも、最も珍しいものの一つである。それは特に日本的なものである」⁸⁶「『義理』は、日本が中国の儒教から得たものでもなければ、東洋の仏教から得たものでもない。それは日本独特の範疇であって、『義理』を考慮に入れなければ、日本人の行動方針を理解することは不可能である。日本人はすべて、行為の動機や、名声や、その本国において人々の遭遇するいろいろのジレンマについて語る時には、必ず常に『義理』を口にする」⁸⁷「『義理』の規則は、厳密に、どうしても果たさなければならない返済の規則である。それはモーセの十戒のような一連の道徳的規則ではない（中

⁸⁵ 韓 (2008) p. 174

⁸⁶ ルース・ベネディクト (2005) p. 165

⁸⁷ 同上

略)・・・また、『義理』の規則は、隣人を自分と同じように愛するということとも、なんの関係ももたない。日本人は、人が真心から自発的に寛大な行為をすることを要求しない。彼らは、人が『義理』を果たさなければならないのは、もしそうしなければ、人々から『義理を知らぬ人間』と呼ばれ、世人の前で恥をかくことになるからであると言う。『義理』にどうしても従わなければならないのは、世間の取り沙汰が恐ろしいからである」⁸⁸と。

日本では、義理人情は「義理」と「人情」という二つの言葉を合わせたものである。「義理」とは、社会生活を営む上での他人に対する道徳的なルールである。これに対して、「人情」は人間が誰でも持っている自分や家族などへの愛情である。従って、日本では「義理」と「人情」はしばしば対立する場合がある。一方、中国では日本の‘義理’の意味とぴったり当てはまる言葉が見当たらないが、あえて言うなら、中国語の‘人情’にあたると言えよう。漢字圏に属する日本と中国は、なまじ同じ漢字を使っているため、誤解を招きやすい。本稿で扱う‘義理’の意味は、日本で使われている‘義理’の意味とは異なっていることを断っておかなければならない。

新世紀日漢双解大辞典では、日本語の「義理」を中国語の‘人情’‘情面’‘情分’と解釈している。実は日本の‘義理’（中国では‘人情’にあたる）は中国のムラ共同体或いはコミュニティの中で最も重要な社会現象である。義理は匿名の社会ではなく、互いに知り合っている社会に存在する対人関係の原則の一つである。宋丽娜⁸⁹は、義理儀式的価値は日常的な機能と社会性以外に、義理儀式を通じた人間関係を成り立たせる点にあるとしている。義理はその形式によって、日常義理（日常生活の中にある義理）と儀式義理（儀式が伴っている義理の意味）に分けている。日常義理は村落共同体で生産、生活の中にメンバーの間でお互いに何らかの形で誰かに貸し借りの状態を作るのに対して、儀式義理は冠婚葬祭の際、お祝い金或いはプレゼント等のやり取りのことを指している。ある意味で言えば、儀式義理は歴史的な出来事であり、人々はこの儀式にたいして長期的な予期と期待をしている。郭于華⁹⁰は地域社会における儀式義理は住民たちが人生の節目の時に儀式と宴会を行うことによって、地域共同体の記憶、ある種の共通認識、価値観、アイデンティティを築いていく、と述べている。言うまでもないが、義理の貸し借りは完全に平等

⁸⁸ ルース・ベネディクト (2005) p. 174

⁸⁹ 宋 (2011) p. 82

⁹⁰ 郭 (2000)

な互惠関係に則っているわけではない。また、中国では「水一滴の恩に湧き水で返さなければならぬ」という古い言い伝えがあるように、物質の交換より感情のバランスが求められている。言い換えれば、地域住民は義理と儀式よりもその背景にある倫理観、価値観などを非常に重視している。義理というのは目で感知するものよりも心で感知するものであり、儀式を抜きに語れない。そのため、義理を具体化するには、義理を表す祝儀と‘幫工’以外に、義理と密接に関わる儀式を通さなければならぬと言っても良からう。

以上述べてきた義理の儀式は複雑な歴史の変遷を経てきた。新中国成立後の‘破四旧’⁹¹と人民公社時代の‘紅白喜事’⁹²とで儀式が簡略化され、1980年から義理の儀式は一時的に従来（人民公社以前）のしきたりに復帰したが、その後まもなく衰退していった。ここ十数年、地域社会の市場経済化と村の空洞化によって、地域社会の義理または儀式が著しく衰えてきた。特にこれまでの義理は地域社会の住民同士のプレゼント交換がメインの形だったが、近年はほぼ非対等的な祝儀の交換になった⁹³。

中国の伝統的な地域社会における義理は「差序格局」⁹⁴に基づき、親疎関係と関わっていて、血縁はその基礎である。これまでの伝統的な地域社会は農業が中心なので、安定的な生活は何よりも大切だと思われてきた。このような小農経済の生活様式の下で、血縁関係は地域住民の対人関係の最も重要な要素である。「差序格局」というのは正に血縁関係がその大きな枠組みの基礎であり、地域住民の間の貸し借り（義理）の多くはこのルールに従っている。しかしながら、ポスト工業時代の地域社会はもはや従来の伝統的な地域社会と大きく異なっている。宋麗娜⁹⁵は現在の農村社会の義理への理解はより複雑になり、「差序格局」の理論だけで応えられなくなった。新しい時代のなかで、この変容をどう捉えるかは重要な課題になっている、と述べている。

また、中国の伝統的な家制度を研究している張永健⁹⁶は地域社会の冠婚葬祭の習俗と祝

⁹¹ 1966年6月1日『人民日報』の社論で、数千年以来人民に毒を飲ませ続けている旧思想、旧文化、旧風俗、旧習慣（合わせて‘四旧’）をなくすべきというスローガンを提起した。

⁹² 紅喜事は男女結婚、出産、進学などめでたい時に行われた儀式と宴会のことを指しているのに対し、白喜事はお年寄りの自然死亡の葬式を指している。日本の冠婚葬祭にあたる言葉である。

⁹³ 宋（2011）

⁹⁴ 中国の社会学者であり人類学者でもある費孝通は、1947年に表した著作『郷土中国』の中で、中国の伝統的農村の社会構造の最も基本的な特性を「差序格局」で表現した。その社会構造は、無数の私人関係が組み合わさったネットワークから成り立っており、一つ一つのネットワークは異なる「己」を中心とした同心円状に広がっていることである。それによると、自己を中心に形成されるネットワークの範囲は水面の波紋のように伸縮する、ネットワークの中心から離れるほどに弱くなるという。

⁹⁵ 宋（2011）

⁹⁶ 張（1994）

儀事情を考察し、「親族関係は農民の日常生活に重要な経済と政治機能を発揮している。これらの機能は冠婚葬祭の祝儀を通じて強化されている。親族制度は中国伝統農業社会における人間関係の基礎である」と指摘した。尚会鵬⁹⁷は河南省の東部地域における結婚式祝儀について研究した。彼の調査によれば、地域社会の祝儀ネットワークは二種類に分けられ、一つは親族集団の内部ネットワークであり、差序格局、非公開、迂回等価という原則に基づいている。もう一つは非親族集団のネットワークであり、親密関係度合、公開、直接等価の原則を遵守している。尚は「冠婚葬祭時に祝儀を盛んにやりとりしていることは地域社会の人間関係はまだ温情的な特徴が残っていて、中国人の恩返し心を培ってきたのと同時に、人々に義理という重荷を負わせている」と述べている。郭宏斌⁹⁸は、近年中国の地域社会において人情往来の範囲が拡大するにつれて、祝儀金額も大きくなり、宴席名目も繁雑になっている現象を鋭敏に捉えた。郭は特に祝儀が非対等な交換になっている面に注目し、この非対等的な交換によって、富、権威、声望などが一極に集中する傾向にあると警鐘を鳴らした。

人々は社会の不平等を無くす努力をしながら、無意識のうちに社会構造の不平等状態を強化してしまい、不本意にも階級の固定化を再生産しているのである。中国の地域社会で祝儀が親疎関係、人情、面子以外にもっと大切なのは、祝儀を受ける側の個人の権威、声望とも深く関わっているからである。他にも社会心理学という視点から人情と祝儀について多くの研究者が成果を収めている。たとえば、黄光国⁹⁹は中国人が他人に「義理を尽す」主要動機は、他人の報いを期待していることにあると指摘している。

さらに、中国特有の義理—「中国語では‘人情・関係’」というネットワークについて、阿古¹⁰⁰は「血統主義を重視する中国において、「社会圈子」の中核を占めるのは、血縁のある家族や親戚であるが、市場ルールや法治が不完全のなか、厳しい競争原理が持ち込まれている状況において、血縁に限らず、さまざまな形での「関係」構築を通して、リスクマネジメントやコスト削減を行い、経済的・社会的な利益を確保しようとする動きがみられる」と指摘している。地域社会における儀式と祝儀の事情について、阿古は、大学に合格した農家の娘が本来当日の主人公であるはずなのに陰に隠れてしまっていた現象を

⁹⁷ 尚 (1996)

⁹⁸ 郭 (2006)

⁹⁹ 黄 (2004)

¹⁰⁰ 阿古 (2009)

取り上げ、現在中国内陸部の農村では家族や近所の人たちが集まって行っていたささやかな祝い事も年々派手になり、商業主義的な色合いを濃くしつつあると述べている。そして、出稼ぎによって都市生活に慣れた若い人たちの間では、余暇や行事の楽しみ方に変化が生じているかもしれないと分析した。

前述した研究とは異なり、陳柏峰¹⁰¹は現代の農村社会の現実に基づき、義理と道德規範の面から農村の現状を細かく描き、詳しく分析した。陳¹⁰²は「儒家は正にいわゆる礼である義理を社会規範とし、社会の基本的な秩序を築き上げてきた。この過程を義理の礼儀化するプロセスと呼ぶ。礼儀化というプロセスを通し、知り合い同士の社会には義理が存在する上に、礼もその社会規範の一部となっている。次第に義理は礼と一緒にになり、知り合い社会（熟人社会）における対人関係の基本原則になった」と述べた。言うまでもなく、儒家の理論構築は正にこの農耕社会の需要に合わせたものにほかならない。このような人々が互いに熟知し合っている社会では、人間の行為は、義理が基本的な規範であるという前提で営まれている。たしかに伝統的な村では、人々は「郷土ロジック」¹⁰³の考えに基づき、適切な行動を取っているかもしれない。しかしながら、これまで農村社会で義理を重視することが対人関係の基本だったのと異なり、近年では、近隣同士の間には摩擦が生じた場合に、話し合うよりも、短絡的に暴力で問題を解決するケースも少なくない。これについて、陳¹⁰⁴は「ムラ共同体は地域住民が互いの状況を知っているのだけではなく、天然な親近感があるはずである。しかし、現在、「両湖地域」（湖北省、湖南省を指す）では、ヤクザの地域社会への事業参入など様々な干渉によって今までの村民同士の義理社会を壊している。村民は道德の束縛から解放されるに伴い、地域社会が無政府状態になり、コントロールが非常に困難になっている」と懸念を示した。

最後に、近年の移行期の地域社会における義理及び儀式の異化現象について黄玉琴¹⁰⁵が「義理は手段として利用され、地域住民にとって短期間の経済問題を解決するツールである」と指摘している。一方、朱曉莹¹⁰⁶は江蘇省北部での‘義理と祝儀氾濫化’現象を

¹⁰¹ 陳 (2011)

¹⁰² 陳 (2011) p. 7

¹⁰³ 「郷土ロジック」について費孝通 (1998) が「主に四つの側面がある。まず、知り合い同士の付き合いは基本的にお互いに譲り合い、長期的互惠関係、人情と面子を重んじることである。それから物事を考える際に固執せずに、極端に走らないこと。三番目は見知らぬ人を差別すること。知り合いでなければ冷淡に接する。場合によって暴力、脅威で交渉する。最後は郷土への強い思いである。自分の荣誉と誇りなどを自分の住んでいる地域社会と一体化させるのである」と述べている。

¹⁰⁴ 陳 (2011) p. 6

¹⁰⁵ 黄 (2002)

¹⁰⁶ 朱 (2003)

調査し、義理と祝儀の往来の範囲が拡大しつつあり、祝儀の金額も巨大化し、名目も繁雑になっていて、義理の逆機能がますます顕著になっているとまとめた。以上、簡単に先行研究をレビューしてきた。中国の地域社会における人々の義理は日増しに‘単純’になり、地域社会の人々にとって物質利益以外に求めるに値するものがない。まだ完全な法治社会と言えない環境では物質利益だけを追求するならば、悪質な社会競争を引き起こしてしまい、矛盾と衝突が起きるのは避けられないだろう。こういう状態になると、民衆の間では金銭と権力が揃えばできないことがないというような‘金銭権力万能論’的な認識が徐々に広く認められるようになり、社会の道德倫理と秩序を立て直すのは不可能に近い。このような地域社会では、社会関係資本が蓄積し、社会関係資本のストックが豊かになることは難しいだろう。

第4項 地域社会と社会関係資本に関する先行研究

社会関係資本（ソーシャル・キャピタル）は、比較的新しい概念として近年浸透してきた。ナン・リンが社会関係資本の研究について「初期の研究者たち（Loury, G. 1997, 1987; Ben-Porath, Y. 1980）も社会関係と通じた資源または資本の存在を指摘し、時には社会関係資本という用語を取り入れていた。しかし、社会関係資本が研究の世界で注目されるようになったのは、ブルデューやコールマン、リンなどの複数の社会学者が、それぞれ独自にその概念を詳細に探求した1980年代に入ってからであった¹⁰⁷」と指摘している。その後、1990年代後半から、とりわけ2000年代に入って「社会関係資本」への注目が急速に高まってきた。中でもパットナムの代表的な研究である、「哲学する民主主義（原題：Making Democracy Work）」¹⁰⁸では、イタリアでの同じような制度的・財政的条件の下で同時期にスタートした20州を追跡調査し、「制度パフォーマンス」という要約的指数を用いて測定した。その結果、北・中部の州政府の方が南部の州政府より応答的で効率的な統治を行っており、その統治の成否を左右する変数の中で最も重要なのは、各州の「共同体の度」であること、すなわちソーシャル・キャピタルの多寡の度合いであるとした。パットナムのイタリアにおけるフィールドワークを基にした印象的かつセンセーショナルな分析は社会関係資本の概念を世間に普及させた。その後パットナムは、『孤独な

¹⁰⁷ ナン・リン（2008）p. 27

¹⁰⁸ パットナム（2001）

ボウリング』¹⁰⁹において、アメリカ人の様々な社会参加の減退を現す現状として、ボウリング連盟のメンバーの減少を事例にとりあげ、一人でボウリングを楽しむようになったことを‘Bowling Alone’という象徴的な言葉で表したのである。この調査研究を通じて、パットナムは孤独なボウリングの原因を①世代による変化、②テレビなどの電子メディアによる娯楽の私化、③共働きによる時間的・金銭的余裕の喪失と地域活動への不参加、④住居が郊外へと広がることに伴う通勤時間の増大と纏めた。

パットナムによると、「近年では、多くの分野の研究者が、社会関係資本のストックを生む多くの源泉やそれらストックがもたらす多岐にわたる結果について検討を行うようになり、そうした作業は幾何級数的に増大している・・・社会関係資本という概念は、当初用いられた社会学や政治学の分野だけにとどまらず、今や、経済学、公衆衛生学、都市計画学、犯罪学、社会心理学など様々な分野でも用いられるに至っている。タンザニアからスリランカ、さらにはイタリアに至る世界各地での研究によって、一定の状況の下では社会関係資本の適切なストックが経済発展を促進する効果を持ちうるということが明らかにされている。米国と英国での研究は、公式なもの非公式なもの両方を含めて、社会的なネットワークが、ともに犯罪を減らす効果を持つことを明らかにした。フィンランドから日本に至る様々な地域での研究では、社会的な繋がりを持っていることが健康に大きなプラスの影響を持つ、という顕著に一貫した観察結果が得られている。イタリアの州政府と米国の州政府の比較から、州行政の質は、各州における社会関係資本の多寡に応じて変わりうるということが示されている。アンデス山脈の国エクアドル、中世の英国、サイバースペースにおける社会関係資本についても研究がなされている・・・地域社会の問題への市民の積極的参加が民主主義自体にとって不可欠だ、とする論点と共鳴しあっていることである¹¹⁰」という。

日本では、社会関係資本は多様な社会科学の分野から概念が行われ、日本における事例研究が行われている。例えば、マクロの観点から、政治、経済、経営、開発論それぞれと社会関係資本についての議論の紹介がある。また、社会学の分野では、関係論的社会学の理論統合を目指して社会関係資本論を展開する三隅一人¹¹¹の著作がある。政治学では、日本の政治に関して、坂本治也¹¹²が、社会関係資本の視点から、「より良き統治と市民・

¹⁰⁹ パットナム(2006)

¹¹⁰ パットナム(2013)p. 4

¹¹¹ 三隅(2013)

¹¹² 坂本(2010)

市民社会組織との関係」に焦点を当て、「政治エリートに対して適切な支持、批判、要求、監視を行う市民」について論じている。三浦一浩¹¹³は新潟県上越市およびその周辺地域を具体的な事例として取り上げ、市民活動を支援する組織、中間支援組織に注目し、地域の中で組織と組織を橋渡しし、ソーシャル・キャピタルを生み出しているその活動を検討し、また、地域自治の試みのなかで市民活動組織が果たす役割を検討し、そこへの中間支援組織のアプローチのあり方をソーシャル・キャピタルの観点から考察した。早田幸¹¹⁴は東日本大震災の被害の大きかった地域における地域再生・復興と社会関係資本について考察した。早田は日本の地域社会地震、水害などなど大規模な自然災害や紛争によって損害を被った社会がいかに関人の生活と社会システムの機能を回復するか、脆弱コミュニティにおけるソーシャル・キャピタルを活かした復興について考えた。そして「コミュニティが主体となったレジリエンス（回復力）が機能するためには、市民の相互信頼や規範の意識、地域社会のキャパシティを高める必要がある。そのためには適切なリーダーシップ、ガバナンスおよびマネジメントが必要である」と指摘した。吉積巳貴・森晶寿がベトナムの婦人会の事例を取り上げ、グローバル化や都市化のなかで東アジア途上国のソーシャル・キャピタルと経済発展について状況紹介した。「途上国では一般に、ソーシャル・キャピタルが貯蓄や保険といった市場経済におけるリスク回避手段を不十分ながら提供してきた。東アジアでは、加えて、灌漑システムなどの共同生産手段の維持・管理を軸としたソーシャル・キャピタルが蓄積された地域もあった。市場や金融機関が発展し、そのような機能を提供するようになると、今までソーシャル・キャピタルが果たしてきた機能を代替していった。ソーシャル・キャピタルは貧しい人々や女性など伝統的に大きな権限を持ってこなかった人々の社会参加を促し、安心感を高める機能を果たすようになっていく」¹¹⁵という。

中国では伝統社会から現代社会へ移行している中で、地域社会における社会関係資本が不足または欠如していると言われて久しい。複雑な歴史段階を経て、今日の中国の地域社会では、古い習慣が変わり、習俗が壊れ、信仰が揺らぎ、人々は利己主義という狭い範囲に閉じこもる傾向にある。人々は長年公共生活に関わる活動が少なくなり、周りの社会の出来事に関心を持とうとしない。それゆえ、これらの人々は、ただ自分のためにのみ生を

¹¹³ 坪郷（2015）pp. 139-152

¹¹⁴ 坪郷（2015）pp. 153-162

¹¹⁵ 坪郷（2015）pp. 90-100

全うし、自分のことにしか関心を寄せず、自分の問題以外に関与しないようになった。こうした中で、今までの伝統社会における社会関係資本をどのように捉えるか、如何に伝統社会に既存の社会関係資本の要素を再発見し、その中のポジティブな面を利用して現代社会における社会関係資本の蓄積を増やしていくのかは新しい課題になっている。中国の研究者李軍¹¹⁶は「現在、わが国において社会関係資本に関する研究はまだ初歩の段階にあり、改革開放以来、社会の移行に伴い、社会関係資本理論への認識と応用が徐々に深まってきた。現代社会における社会関係資本は伝統的な血縁関係、親縁関係、地縁関係の共同体に基づいているものではなく、市民権利と義務に基づいているものである」と述べている。宗族の勢力が村の権力分配に与える影響に関する王銘銘の分析では、村民間の互助関係、人間関係、義理、声望などの社会関係資本のことが取り上げられている¹¹⁷。鐘漲宝の社会関係資本理論は農村社会の構造変化を解釈するのに役立っているのみならず、彼は伝統農村社会の変遷を論理的に解釈し、今後農村社会構造の行方の予測にも機能すると指摘した¹¹⁸。李培林は「農民が郷鎮企業を創る際に、家庭の倫理規範は企業の監督コストを削減する有効な手段であるため、家庭倫理と規範を企業に持ち込む傾向があることから倫理規範は郷鎮企業の社会関係資本になる」と述べている¹¹⁹。他にも農村自然資源管理、コミュニティーガバナンス、公共物の提供、農村の環境保護、余剰労働力の移転など様々な研究分野において、社会関係資本の理論は大いに力を発揮している。

以上簡略にレビューしてきたように、地域社会における社会関係資本に関する研究、特に中国の地域社会を研究するため社会関係資本のあり方から捉えるケースはないわけではないが、調査地域は少し特殊な地域に集中している傾向がある。例えば沿海地方の郷鎮企業と家族企業などはその例である。もちろん、これらの研究は中国全体の地域社会における社会関係資本の研究に多大な参考になるが、「差序格局」に則っている地域社会の多くは中西部の農業大省にあるため、中西部こそ相対的に農村社会を代表する例であると思われる。本稿では、中国の伝統的な社会の構造及び特徴を考えた上、以上述べた中西部の地理的にふさわしいエリアを選び、地域社会における文化・娯楽・義理と儀式の変容を考察していきたい。

¹¹⁶ 李 2006 (3) pp. 84-88

¹¹⁷ 王 (2004) p. 74

¹¹⁸ 鐘 (2002) (1) p. 65

¹¹⁹ 李 (1995) p. 20-29

第4節 調査概要と調査地の概況

まず調査の構成について、本稿の主旨との関係で、構成の概略のみを記しておく。本稿では移行期における三つの村の関連事情を参与観察と聞き取り調査でトータルに把握し、錯綜する事情の背景原因について検討を加える。

第1項 調査に関する基本情報

調査の進行状況は以下の通りである。第1次調査は、2012年12月におよそ3週間、農業が中心であるA村を対象に調査を行った。第2次調査は、2013年の1月23日から2月23日までおよそ一ヶ月間にわたって、A,B,C三つの村の宴席と賭博事情を参与観察した。第3次調査は、2013年8月約2週間、県道に近くて交通の便が比較的に良いB村を対象に実施した。第4次調査は、2014年12月約一ヶ月間、兼業農家の比率が高いC村で聞き取り調査とインタビューを実施した。第5次調査は、2015年8月およそ一ヶ月間、A、B、C三つの村に滞在して参与観察を行った。参与観察と聞き取り調査では、以下の質問項目に焦点をあてて行った。（付録参照）

ア 調査対象の基本属性：

性別、年齢、学歴、職業、収入、住居環境、婚姻関係、世帯構成、移動手手段、宗教信仰

イ 社会的信頼度

近隣者との付き合い度合い、友人・知人との付き合いの頻度、親戚との付き合い頻度、文化活動への参加経験、村の公共事業への参加意向と頻度、村自治会・選挙への参加頻度

ウ リスクと社会的安全網

生活を脅かすもの（失業・病気・食糧不足）、日常生活上の問題で頼りにする人・組織、自然災害・事故・老後の心配の有無、地域内でのもめごとを地域内で解決が可能かどうか

エ 社会儀礼

村人の結婚式への参加度合い及び役割、家を建てる時などの互助状況、葬式出席の義

務を感じる程度・地域の祭礼への参加程度、出産、進学、冠婚葬祭の参加状況。

第2項 調査地概況

筆者がフィールド調査をおこなった村落は、中国内陸部湖北省の南東部に位置する県級市¹²⁰で、長江流域に位置するW市である¹²¹（筆者の出身地である）。具体的な拠点はW市に管轄されているA鎮A村、I鎮B村、U鎮C村である。W市及び三つの鎮について紹介しておこう。なお、正確な位置については地図参照。

W市は中国華中地域にある湖北省の東部、長江北岸に所在する。北部は大別山などの山地、中西部が丘陵地、東南部が平原となっている。湖北、安徽、江西三省の境界にある町である。1987年、県級市に改編された際に、W市に改称された¹²²。W市は4街道弁事処と8鎮（316行政村）より構成されていて、面積は1200.35平方キロメートル、人口はおよそ78.4万人、そのうち都市戸籍は凡そ19.8万人で、農村戸籍は58.6万人である。2013年のGDPは202億元であった。耕地面積は50万畝¹²³である（以上は2013年のデータである）。今回、フィールドは当市の自然村¹²⁴A村、B村、C村で行われた。それぞれの鎮と村の概況については以下の説明及び図表2の通りである。

¹²⁰ 「都市」を概して捉えるのではなく、区別して考えることが重要である。少なくとも、① 沿海部大都市（北京、上海、杭州、広州など）、② 内陸中核都市（西安、重慶、成都、武漢など）③ 平均的な省城（鄭州、南昌、蘭州、貴陽など）④ 地区級市の中心地、⑤ 県（県級市）の五ランク程度に区分することができる。県級市はその中では小規模な地方都市である。

¹²¹ 調査地を選ぶ理由について、筆者の考えでは、例えば江蘇省の華西村とか安徽省の小崗村そして河南省の南街村のようないわゆる模範村は確かに知名度が高いが、典型的な地域社会の概念と掛け離れ、真の地域社会の現状が反映できないと思われる。逆にあまり知られていないいわゆる発展途上の地域は問題を分析する上で平均的な真実に近くて、より調査地に適していると思う。

¹²² 1987年10月22日までG県という名前を使用していた。（W市県誌）

¹²³ 畝は面積単位であり、1畝は約6.67アールである

¹²⁴ 中国では、村を行政村と自然村に分けられている。通常、地域社会では自然村が「ムラ」であり、行政村は「ソン」である。自然村は、農業生産を基礎とする共同体であり、地縁と血縁をその構成原理としている。自然村と行政村は、必ずしも一致するわけではなく、政治的諸関係はむしろ自然村に依拠している。

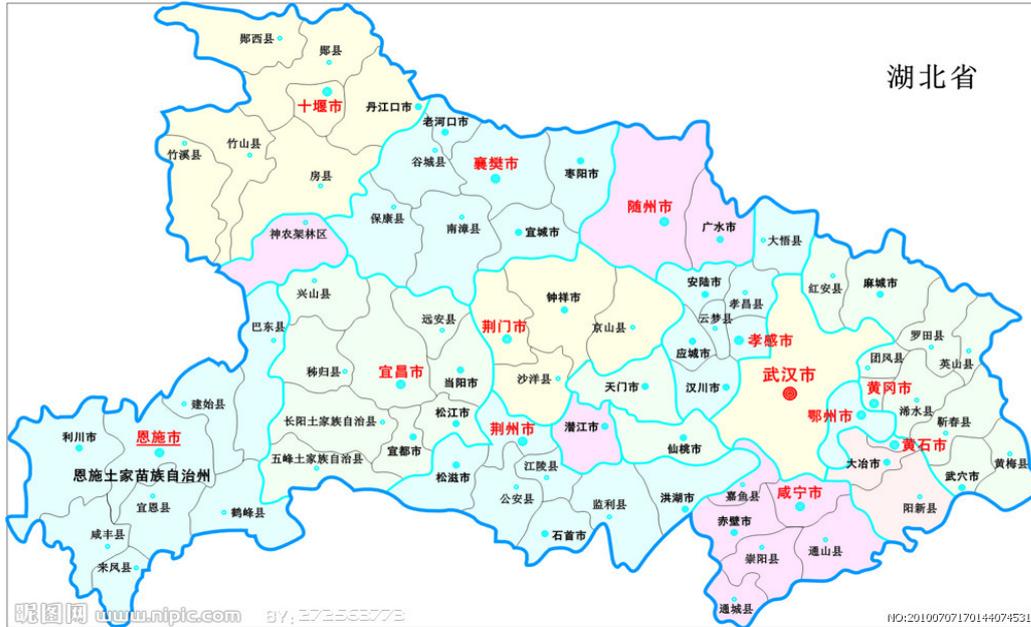


図1 湖北省各市区簡略図 (『中華地図網 <http://www.hua2.com>』より)

1 ア鎮はW市の東南部に位置している。長江中下流の沖積平野である。面積は63.8平方キロで、総人口は約4.7万人である。湖北省の重点綿生産地の一つである。2013年現在、一つの居民委員会と8行政村を管轄している。フィールドのA村の主要な農産物は棉と小麦で、川魚を養殖する農家もある。76世帯で、総人口は307人である。青壮年労働人口167人中、141人が出稼ぎに行っている。耕地面積は凡そ587畝で、一人当たりの面積は約1.9畝である。2013年の一人当たりの年平均年収は8900元である。

図表 2 ア鎮 A 村人口構成の概況

性別 年齢・人数		男性		女性		合計
		30 歳～	1～30 歳	30 歳～	1～30 歳	
		87	60	92	58	
学歴	小学校 ¹²⁵	56	10	50	21	137 ¹²⁶
	中学校	18	16	9	30	73
	高校	2	11	2	5	22
	専門学校	3	4	0	1	11
	大学	1	2	0	1	4
婚姻状況	既婚・子有	80	11	86	18	
	既婚・子無	4	4	5	3	
	未婚	3	45	1	37	
家庭収入	4 万元以上	66	15	64	21	
	4 万元以下	21	2	28	4	
職業 ¹²⁷	建築業	23	12	6 ¹²⁸	3	44
	裁縫	11	3	12	17	43
	工場	4	2	2	10	18
	農業、その他	7	4	10	7	28

(2013 年度 W 市 A 村の資料による 筆者作成)

2 イ鎮は W 市の東部に位置している。面積は138平方キロで、総人口は約8.3万人である。地理条件に恵まれ、交通網が発達している。全体的な産業構成として、北部は林業及び果物産地として位置づけられ、中部は菜種の油産地、南部は湖での養殖魚貝業となっている。2001年、イ鎮と別の鎮が合併し、新イ鎮となった。2013年現在、下に二つの居民委員会と39の行政村を管轄している。自然村は全部あわせて377村あり、16110世帯から成り立っている。フィールドの B 村の主な生産作物は稲作で、それ以外にイモ類や雑穀も作っている。67世帯で、総人口は287人である。うち、青壮年労働人口192人で、161人が出稼ぎに行っている。耕地（水田含む）面積はおよそ420畝で、一人当たりの面積は約1.46畝である。2013年の平均年収は8750元である。

図表 3 イ鎮 B 村人口構成の概況

¹²⁵ 中に小学校を卒業していない人がいる。本稿では統計上の都合で、小学校未卒の人の学歴を小学校と見なす。（中学校、高校も同様）

¹²⁶ 教育を受けたことのない非識字者がいる。B 村と C 村も同様である。

¹²⁷ いろいろ業種があり、また二つ以上の職業に従事する人もいる。ここでは主な職種を挙げる。

¹²⁸ 主人と一緒に建築関係の仕事をする。

性別 年齢・人数		男性		女性		合計
		30歳～	1～30歳	30歳～	1～30歳	
		81	54	92	60	
学歴	小学校	48	13	32	16	109
	中学校	10	16	4	23	53
	高校	1	8	1	4	14
	専門学校	2	2	1	2	7
	大学	1	2	1	0	4
婚姻状況	既婚・子有	74	9	87	14	
	既婚・子無	4	2	5	5	
	未婚	3	43	0	41	
家庭収入	4万元以上	62	16	67	23	
	4万元以下	19	3	25	2	
職業	建築業	32	14	8	4	58
	裁縫	8	3	16	18	45
	工場	2	3	5	12	22
	農業、その他	11	5	12	3	31

(2013年度 W 市 B 村の資料による 筆者作成)

3 ウ鎮は W 市の中南部に位置している。面積は104平方キロ、人口は約5.9万である。1987年現在のウ鎮に改名された。2013年現在、下に一つの居民委員会と29の行政村を管轄している。フィールドの C 村は稲作が主な産業でありながら、法事を行う“道士”¹²⁹という職業にも従事する兼業農家の多い村である。43世帯で、総人口は192人である。うち、青壮年労働人口114人中、62人が出稼ぎに行っている。耕地(水田)面積はおよそ240畝で、一人当たりの面積は約1.25畝である。2013年の平均年収は9400元である。

図表 4 ウ鎮 C 村人口構成の概況

¹²⁹ W 市の県誌によると、道士は道教の神主で、道教を信じ帰依する者である。道教の教義と戒律を受け入れ、俗世間から言えば貧しくて苦しい生活に耐える一方、本人は自分が脱俗で神聖な宗教生活を送っていると考えている。同時に、道士は道教の伝播者として神秘的な方式で道教を広め、宗教のために力を尽くしているとされる。本県の道士は一般的に、葬式、廟宇法事、風水などに関わる仕事に従事する人を指す。単に道教を信じるだけでなく、様々な仏教活動にも参加している。

性別 年齢・人数		男性		女性		合計
		30歳～	1～30歳	30歳～	1～30歳	
		47	40	59	46	
学歴	小学校	29	11	22	16	78
	中学校	8	17	7	23	55
	高校	1	2	2	3	8
	専門学校	2	1	1	1	5
	大学	1	2	0	2	5
婚姻状況	既婚・子有	42	8	58	12	
	既婚・子無	4	4	1	6	
	未婚	1	28	0	28	
家庭収入	4万元以上	38	13	46	18	
	4万元以下	9	2	13	4	
職業	建築業	19	8	3	5	35
	裁縫	4	5	8	6	23
	工場	2	1	2	4	9
	農業、その他	4	1	6	2	13

(2013年度 W市 C村の資料による 筆者作成)

図表 5 調査地三つの自然村に関する概況

村の名前	世帯数	人口	耕地面積	一人あたり 平均収入	産業特徴
ア鎮 A村	76世帯	307人	587畝	8900元	棉、小麦
イ鎮 B村	67世帯	287人	420畝	8750元	米、養殖
ウ鎮 C村	43世帯	192人	240畝	9400元	米、兼業

(注：2013年 W市統計年鑑のデータを抽出し、筆者作成)

第3項 調査地の選定と自分のポジションについて

調査対象として W市の三つの村を選んだのは、以下の考えに基づいている。

‘華中郷土派’ とよばれている中国農村研究の代表者である賀雪峰は、中国の農村モデル

を‘原子化村’地域と‘非原子化村’地域と分けている¹³⁰。賀によれば、原子化村は基本的に一つの家庭をアイデンティティーと行動単位にしているのに対して、非原子化村は一つの家庭を超えている家庭連合をアイデンティティーと行動単位にしている。また、非原子化村はさらに、行動単位が比較的大きい‘宗族型’と行動単位が比較的小さい‘戸族型’、‘小親族型’、‘連合家庭型’に分けている。それぞれの特徴は以下の図表にまとめている通りである。

原子化村の特徴

村の特徴			村治特徴		
	価値生産力 強い村	価値生産力 弱い村		価値生産力 強い村	価値生産力 弱い村
育児意欲	弱い	弱い	上訪 ¹³¹	有り	少ない
非正常死亡率	高い	高い	一人っ子政策実施難度	容易	容易
住居競争	普通	弱い	幹部の報酬	わりに高い	高い
年寄りの地位	低い	低い	一事一議	不可	不可
婚姻関係の強度	強い	強い	農民の負担	わりに重い	重い
第三種の力	強い	弱い	村の債務	普通	高い
村の紛争	普通	多い	選挙競争	有り	少ない

(注：賀雪峰 『村治的逻辑』 p. 181 による 筆者訳)

非原子化村（小親族、戸族、連合家庭）の特徴

村の特徴				村治特徴			
	小親族	戸族	連合家庭		小親族	戸族	連合家庭
育児意欲	最強	普通	割高	上訪	多い	多い	少ない
非正常死亡率	割高	割高	低い	一人っ子政策実施難度	最も難しい	比較的容易	比較的容易
住居競争	強い	普通	強い	幹部の報酬	低い		割高
年寄りの地位	普通	普通	高い	一事一議	比較的難しい	比較的難しい	比較的難しい
婚姻関係の強度	弱い	普通	弱い	農民の負担	軽い	軽い	重い
第三種の力	普通	普通	普通	村の債務	少ない	普通	普通
村の紛争	多い	普通	少ない	選挙競争	多い	多い	少ない

(注：賀雪峰 『村治的逻辑』 p. 177 による 筆者訳)

以上の図表からでも分かるように、原子化村と非原子化村それぞれの村の違いは以下と

¹³⁰ 賀 (2009) p. 167

¹³¹ 中国では、人々が (近年特に農村地帯の住民) 地元政府が下した不当判決、また地元の役人の腐敗問題などを中央政府に直訴するため首都北京へやって来ること。

なっている。原子化村では村民間に宗族関係は非常に薄くて、外在的な面において競争する傾向がある。典型的な例は住居の競争である。村民の負担は大きくて、村の債務は比較的が多い。また、外出した人はあまり村と関わらない。それに対して、非原子化村特に宗族型の村は団結力があり、フリーライダー行為はある程度抑えられている。村を出た人も村のことに關心を持っている。村民の負担は少なく、村の債務は少ない。それ以外の詳しい違いは図表を参照する。

調査地の三つの村とも経済の面において中国農村社会全体のレベルから見れば特に進んでいるところでもなく、遅れているわけでもない。また、地理的な面においても都市の近郊でもなければ、山の中の辺鄙なところにあるという極端なところでもないため、一定の代表性があると考えられる。また、三つの村とも元々賀雪峰が提示した‘非原子化村’であるが、(その中のア鎮のA村は‘小親族型’、イ鎮のB村は‘宗族型’、そしてウ鎮のC村は‘戸族型’に近いと見られる)、いずれも近年‘原子化村’に移行しつつある傾向が見える村である。

なお、前書きにも少し触れたように、筆者は今回の調査対象地W市ウ鎮C村の出身である。C村からおよそ3キロ離れているイ鎮B村は筆者の姉の嫁いだ村である。そして、ア鎮A村は筆者の親戚である叔母(母の姉)の村である。筆者は17歳まで(大学に進学する前)ほとんど自分の生まれ育ったC村で生活し、6歳の時から、姉の家へ頻繁に遊びに行っていたから、B村のこともよく知っている。さらに、筆者は中学時代に通学の関係で、親戚である叔母の家(母の姉)に3年間同居させてもらった。つまり、以上三つの村とも、筆者にとって住みなれた場所であり、地方政府や知人などの紹介を通じることなく、身近な形で現地の人々と接触できる。また現地の方言にも精通しているため、服装と方言などが異なる外部の調査者より調査対象の本音や考え方を聴取することができ、より自然な観察と調査が可能と考えられる。

近年W市では市内のみならず、地域社会でも大きな変化が起きている。経済発展とともに、前述した様々な異化現象が発生している。このような変容を目の当たりにしてから、筆者はいつか本腰を入れてこれらの村のことを全面的に調査し、そしてこれらの変容を社会学の視点から捉えていきたいと思うようになった。中国の農村研究者賀雪峰は長年にわたって、大量なフィールドワーク資料に基づき、農民の行動単位および村治モードを二つに分けている。一つは家庭を単位とする原子化農村タイプ、もう一つは家庭を超えて、家

庭連合体とする非原子化農村タイプである。言うまでもないが、広大な中国での複雑な状況の中で、このような分類は簡略化した分類方に過ぎない。その目的はある特定の地域の村治モードの特徴を検討するだけでなく、ほかの地域の村治モードと比較して、より体系的な理論に帰納していくためである。本稿では、自分の目で故郷の現況を観察し、変化しつつある中国地域社会に生活している人々のエートス、考え方、行動ロジック、対人関係、そして人々が生活している地域社会全体を、賀雪峰の提唱した中国農村モデルに基づいて、それぞれ性質の異なる村の研究を参考にし、移行期にある中国全体の大環境の下、‘非原子化村’が‘原子化村’へ移り変わる際に、地域社会の文化と風俗が何故、そしてどのように変容しているかを社会関係資本のあり方から見る、という新しい試みを展開した。

第5節 本稿の研究方法

これまでの研究では、ある社会を理解するには、まず政治的、経済的なデータを使い、文献資料を利用してマクロ的に分析する手法が多く使われている。また、人類学の研究によくエスノグラフィー (ethnography) という手法が使われているが、文字通り「民族 (ethnos) について書かれたもの (graphy)」であり、写真やフィルムなど映像記録も含まれる。文化人類学の手法をベースとして、特定の民族の特徴を描き出すのが中心であるが、現代社会におけるさまざまな組織や集団、個人にも焦点を当てることもある。

本稿では、フィールドワークを通じて、研究対象である集団や人々の社会生活を観察し、体系的に記述を整えていく。調査の具体的な方法は、インテンシブなインタビューと参与観察である。「拉家常」(調査地の言い方で世間話をする意味である) でいろいろな深層な情報を掘り出し、収集した。ただし、様々な事情で長期間の調査を行うのが難しいため、本稿の研究方法は厳密に言えば「エスノグラフィー」ではなく、「エスノグラフィック・スタディー」である。筆者は農村で育ったことを生かし、うわべの調査ではなく、いわゆるインサイダーの立場に立って、自分の生活経歴と体験を生かし、より深層の地域社会を見ることができると思う。そうして、数回にわたって、フィールド調査地に滞在し、人々の日常行動と対人関係を観察してきた。また、必要に応じて政府部門にも聞き取り調査を行い、可能な限り資料提供を受けた。さらに、県誌などの公文書も資料とした。文末の論

証部分では、近年中国の公共知識人の書いた論文、著書を参照し、綿密かつ質的に分析するというアプローチを心掛けた。また、本稿を完成するにおいては、アンケート調査を試みたが、せっかく大勢の協力を得たにもかかわらず、論旨の展開において、有効に組み合わせさせて生かすことができなかった。したがって、論の処々において引用するにとどめ、量的な調査結果を生かすより、質的なインタビュー調査に重点を切り替えることにした。

歴史的、地理的更に民族的にも複雑な中国を理解するには、ただ関連する文献、資料、データを分析するだけではなく、調査地でのフィールドワークを活かすべきであるが、やはり調査には限界があることを認めなければならない。社会学の調査では、調査地の人々とより密接な関わりを持つことなくしては全面かつ有力な情報は得られず、中の世界を覗くことが難しいと言われている。しかしその際、客観的認識のために調査者と被調査者との間にあるべき距離が保てなくなる場合がある。また、インタビューが対象とするのは、あくまで被調査者の主観的認識であって客観的現実ではない。また、聞き取り調査では、被調査者の目に映っていない事実を掘り起こすことはできない。そのため、そうしたアプローチは、社会の深層に横たわる構造、力学また民衆のエートスを把握するのには限界がある。この現実の本稿が不足している面と繋がっている。約9億以上の農民を有している中国は、地域差がとてつもなく大きい。いかに現今の地域社会を研究し、地域社会の全体図を構築するかは研究者にとって大きな難問であること、中国の社会学者費孝通と呉文藻が切り開いた「コミュニティースタディー」という手法のみでは、ある集団の心理傾向、行動ロジックを抽出するのはほぼ不可能に近い現実を知らなければいけない。言い方を変えれば、アンケート調査やインタビューなどの精密な意識調査の手法で測定するのも限りがある。本稿では、できるだけこれらの不利な要素を克服し、より正確、客観的な結果を導き出すように努めたつもりである。

第一章 地域社会における文化・行事と社会関係資本

第1節 文化と地域社会における伝統文化

第1項 文化の定義

文化という概念の起源はラテン語の *cultura* であり、本来の意味は「耕して得た物」である。つまり、自然界に存在している物ではなく、培われた物である。この概念は色濃く農耕社会を反映している。また、文化の有無は人類社会と動物社会の区別の最も重要な判断基準であり、文化は人類社会の維持と発展に大きな寄与をしてきたことは誰しも否認できない事実であろう。

文化を代表的に定義したのはイギリスの文化人類学の学者タイラーである。文化とは「特定の社会の人々によって習得され、共有され、伝達される行動様式ないし生活様式の体系」や「知識、信仰、芸術、道德、法律、習慣とその他、社会の成員としての人間によって獲得されたあらゆる能力や習慣の複合体¹³²」であると述べている。タイラーの提示した定義によると、文化は一種の複合体で、内包されたものは非常豊富である。以上列举された内容以外に、社会制度、社会組織なども文化に属している。その後、タイラー以外に社会学者、人類学者、民俗学者、心理学者もそれぞれの立場から文化を定義した。中には歴史的なものや規範的なものもあれば、心理的なもの・描写的なものもある。ただし、これらの定義は文化を一つの複合的な基本概念として捉えることに変わりはない。

日本の研究者石黒は「文化を人間の観念体系とする見方によれば、言語様式から知識体系に至るまで、文化内の要素や概念は必ず意味や象徴作用を持っている。この意味構造や象徴作用こそ、ある文化を他文化と区別せしめているものであり、〇〇文化、××文化の特色をなしている。そして、人間の行動や認識を暗黙のうちに規定している¹³³」と指摘した上、文化人類学の学者ギアツ、リーチなどの立場による文化の定義は、「象徴形式を通して表現される意味のパターン」「人間の行動に対し外部からコントロールするような認識体系」「世代から世代へ継承されていく伝達形式」「その成員たる人々が認知し、関連づけ、解釈するための知識体系¹³⁴」とまとめている。

¹³² E. B. Tylor (1958) P. 18

¹³³ 石黒・亀田 (2010) pp. 66-67

¹³⁴ 石黒・亀田 (2010) pp. 66-67

中国の学者梁漱溟¹³⁵は文化を「人類生活の様式」と定義し、さらに人類生活の様式を精神生活、物質生活、社会生活と分類した。また、蔡元培¹³⁶は文化とは何かについて、文化とは人生発展の状況であると提言し、衣食住、医療衛生、政治、経済、道徳、教育、科学などを列挙した。梁と蔡の文化の定義は極めて広範にわたっていることがわかる。中国農村研究者賀雪峰は「文化というものはある意味で価値観と観念であるとも言える。文化は生活に浸透しているもので、往々にして何らかの儀式で表れている。文化に対しての感覚は通過儀礼と儀式が欠かせないと思われる。また同時に、通過儀礼と儀式を通して文化は再生産され、維持されていく¹³⁷」と指摘している。

以上、文化の内容は物質的文化と精神的文化に分けられるが、広義の文化概念は物質的な文化と精神的な文化の総合体を指す。そのうち、本質的な文化概念は制度と規範であり、具体的に言えば人間が長期的な労働生産の中で育んだ行為の規範、習慣、生活様式を指している。それに対して、狭義の文化概念は科学文化と知識を指している。本稿では、文化は道徳・宗教信仰と風俗・習慣を含め、ある特定の社会に共有される行動様式と生活様式を指す。

第2項 地域社会における文化と機能

以上文化について論述してきたが、本稿で扱う地域社会における文化についてももう少し付け加えておきたい。地域社会での文化は長年儒家思想を基に形成してきた「族規」「郷規」¹³⁸の含まれている習慣、しきたりの性格が強い。「族規」「郷規」はどのような存在であるかについて少し説明を加えておく。古代の中華帝国の領土はとてつもなく広くて、多くの人口を抱えていた。皇帝が民を直接コントロールすることは困難であった。その状況下、古代中国の皇権はどのような力で国を治め、農村社会の秩序を維持してきたのだろうか。長い間、社会を正常に発展させるために、中央集権の皇権は‘県’以下に正式な行

¹³⁵ 梁『東西文化及其哲学』（1929）p. 53 上海商務印書館

¹³⁶ 蔡「何謂文化」『蔡元培美学文選』（1963）p. 113 北京大学出版社

¹³⁷ 賀（2007）p. 40

¹³⁸ 梁治平は中国の伝統社会の習慣と規範について「郷規は郷土社会で利益衝突の産物である・・・ただし、その権威と効力は国家から授かったものではない。中国伝統政治の構造システムに拠り、たとえ政府が宗族、行会（英語では guild , 手工業の中で、同じ業界の人が規則に則って、内部の調整と外部の交渉にあたる組織である。）の規則を認たとしても、政府が正式な権力を授けたと言えない。宗族であれ、行会であれ、これらは国家の法律と無関係に誕生したものである。これらの組織が行使している裁量権は組織自身の創造物であり、権威のある政府から授かったわけではないと説明している。

政単位を設置しなかった。‘県’以下の管理は宗族組織に任せるシステムをとってきた。こうした中で、中国の伝統的な国家の治め方には二つの特徴が見られる。一つは国が上から儒家思想を利用して民を教化する。二つ目は同時に民間において「郷規」「宗規」で民を教化する。中華民国までの長い間、中央権力は民のため生活規則、組織規範を作ることがなく、労役や税金の徴収と暴動鎮圧以外に郷民の生活にほとんど直接関与しなかった。その結果、各集落（宗族、郷村）では、族規、郷規が村民間の約束事として形成されてきた。

地域社会では人は行動の主体であり、そして、そういった人々が生きる文化には、何らかの主体性のモデルがあると考えられていた。伝統的な農耕社会では、以上述べた宗族規範がモデルと考えられている。農耕社会ではムラ共同体に備わる仕来りのおかげで、内部闘争と逸脱行為を抑えることができ、農業生産と生活秩序を維持してきたとも言えよう。一方、現代社会に入ってから、このような宗族規範が現代の法治精神と食い違っているとしばしば指摘されている。たとえば宗族規範には強い懲罰性が含まれていること¹³⁹などがその例の一つである。また、文化は世代を通じて伝承されていく性質がある。そのメカニズムは文化主体である構成員が社会化を通して次の世代に既存の文化を認識させ、社会を規制している価値と規範を学ばせ、遵守させていく。次の世代はこのような文化を受け、背景に潜んでいる知識を身につけていくことになる。

地域社会で形成してきた文化は、人間が長い歴史の中で過去の共同生活の中で積んできた経験を、共同体全体が適切だと判断して受け入れた事実と規範の集大成である。一旦形成して確立した以上、それに相応する価値観と行為規範が受け入れられることになる。したがって、文化は地域社会では共同体の成員の行動を整えることに大きな役割を果たしている。ある集団で形成してきた文化はその集団の人々にとって規則となり、さらにその文化は内面化し、社会関係資本の重要な要素である‘規範’にもなっていく。何世代にもわたる歴史的・文化的な規範が社会関係資本に影響を与えていることは自明のことであろう。

これまで多くの学者が論じたように、文化は純粹で自然なものではなく、人類の生産活動の産物でもある。時代の生産力、生存環境、人間の外界への認知に相応するものである。

¹³⁹ 族規、郷規は国が黙認している民間のものでありながら、誘導性だけでなく、強い懲罰性を持っている。例えば、宗規と郷規を違反した人に対して、責める、殴る、酒とか穀物等を罰として供出させる、ひいては族籍（日本でいう系図にあたる）から外すこともある。（日本の村八分と似ているような懲罰）（史鳳儀 1999）

人間は誰しも世の中に生まれた以上、人間社会にある既成の習慣に従わなければならない。つまり、後で生まれた人は否が応でも人間が長い年月に積み重ねてきた経験、価値、規範のある社会に合わせて生きていくことになる。個々人にとって文化は生まれつきの能力ではなく、後天的なものであり、学習の結果である。これらの社会文化を習得することによって、個々人の生活が維持できるようになる。勿論、人間は自己の能動性を発揮し、環境に合わせてながら新しい文化を作り出すこともできる。

第3項 文化と社会関係資本の関係

ある社会の中で、異なる個人は皆それぞれ自分の必要に応じて異なる行動を取っている。しかし、これらの行動が他の成員の同意、理解、協力をどれほど得られるかは、その行為の価値または意義がどの程度認められるかに関わっている。そのため、個人と集団、個人と個人の間での文化の共有度合いがコミュニケーションの鍵になってくる。同じ文化を共有する者同士は基本的な価値と文化符号への認識が同じであるため、協力関係が形成しやすいのである。

文化による表現行為には規範という次元が絡んでいる。同じ文化を共有する人たちの間に仲間意識が生まれ、逆に共有しない人に内的なサンクションが働く。そして、同じ文化を共有するか否かによって他者との関係のとり方を変えたりする。文化は人の行動を方向づける力を持ち、他者との関係を規定する役割を果たしている。特定の社会では、文化は規範であり、人々を結ぶネットワークの基礎である。そのため、文化はその社会における社会関係資本にとって非常に重要な要素である。

一方、文化の衰退に伴って、共通の文化と心理の基礎が崩れ、社会関係資本も貧弱になると、結局アノミー現象が起こることになる。アノミーは英語で‘anomie’と言う。現代社会学事典(2010)では「共同体の信仰、倫理価値を反映する社会規範が衰弱するまたは破壊されていること」と説明している。社会規範、倫理道德の基準がなくなること、或いは、規範と道德の束縛力がなくなる(役に立たない)状態を指す。社会学者デュルケム¹⁴⁰はアノミーとは、従来の社会規範が緩んだり崩壊したりするため、人々の行為や欲求に規制が加えられなくなり、焦燥や欲求不満が生じる状態、あるいは個人また集団の関係を規制していた社会的規範が失われ、社会が乱れて無統制になった混沌状態であると定義して

¹⁴⁰ デュルケム (1985)

いた。言い換えれば、アノミーというのは、社会が提唱している文化目標と、目標を実現させる合法的な制度と手段が断裂している緊張状態の意味である。伝統的な社会規範が崩壊しつつある中で、新しい社会規範はまだ完全に確立されたとさえ、主流となる社会規範が欠乏している現代中国では、文化が著しく衰退している。そのため、中国の地域社会では社会関係資本の形成が困難で、秩序・治安よく生産活動が運ばれ、正常な生活軌道に乗るのが難しいと思われる。

第2節 事例調査

W市は湖北、安徽、江西三省の境に位置していて、古代は揚州と荊州の境であった。呉と楚の文化の影響を受けてきて、古くから多種多様な文化が融合している。風俗習慣の基本は漢俗であり、若干地方性がある。代表的な文化芸能として‘採茶調’‘文曲劇’‘黄梅劇’などの地方劇が挙げられる。（『W市県誌』による）

第1項 A村における調査

(1) 荒地の対応・水利施設の修繕における協力困難

調査対象：村の元書記D、村民H、大学生村官¹⁴¹

調査期間： 2013年12月1日から 2013年12月12日

調査地のA村は市内まで約26キロ、鎮政府まで約11キロ、最も近い市場¹⁴²まで3.5キロである。中学生のころ筆者はA村で3年間生活していたので、当時農民が月光の下で収穫する光景は今でも目に焼き付いている。20年前まで非常に綺麗な田園風景だった。2013年の12月の調査で、数年ぶりのA村と再会して、驚いたことに、目の前のA村は記憶と全く異なっていた。小麦が植えられていた畑が荒地になり、よく遊んでいた林がなくなった。主婦たちの洗濯場所として常に賑わっていた池もほぼ埋まっており、多くの家屋が廃屋になっている。

¹⁴¹ 大学生村官とは大学など高等教育機関の卒業生のうち、各地の地方政府による選抜を経て、農村において村レベルのリーダーの一人となって、在来のリーダーたちの補佐をする若者のことである。「村官」というのは、村の「官」すなわち「役人」のことで、役人は「幹部」の概念に相当する。

¹⁴² ‘いちば’ 定期市の開かれる場所。現在は日常し、固定した商店になっている。



(2013年12月7日 筆者撮影)

協力者Dは65歳で、1991年から1998年まで村の書記を勤めた。村の過去のことを熟知していて、現状もよく把握している。筆者が中学3年間A村に滞在したこともあって、Dは警戒する様子が見られず、調査にとっても積極的に協力してくれた。

Dはまず人口構成を説明してくれた。A村に在籍している世帯数は76世帯で、人口はあわせて307人である。うち男性147人、女性160人。60歳以上は107人で、出稼ぎ者は78人である。お年寄り一人だけが暮らしているのは38人で、一方留守児童（両親は出稼ぎ不在で、祖父母と暮らしている）は62人もいる。以下は対話の録音の一部を整理したものである。

調査日 2013年12月2日 月曜日 晴れのち曇り

筆者：現在村にとって喫緊な問題は何だろうか。

D： 耕地が宅地に利用され、農地は急激に減っていることである。青壮年が皆出稼ぎに行っているの
で、その他の農地が荒地になり、数年経てばその土地は利用できなくなるのも心配事である。土地はや
はり我々農民にとって命であり、今のところ出稼ぎで稼いだお金でなんとか食べていけるが、しかし果
たしてこの状態は今後も長く続けられるだろうか。数年後、我々の子孫はこの土地で自分の家族を養っ
ていけるだろうか。（タバコに火を付けてから）現在多くの人が道路付近で新しい家を作っている一方、
元の宅地を手放したくない。廃屋のままなので、土地が大量に浪費されていて、利用できない土地が年々

増えている。さらに、生活ゴミがほったらかされていて、灌漑システムに大きな影響を与えている。



(2013年12月7日 筆者撮影)

Dによると、荒地になっている原因はいろいろ考えられるが、最も大きな原因なのは農業にとって不可欠な水利施設の荒廃と破壊である。多くの村民はこの村の公共灌漑システムを修繕したかったが、皆協力し合えばより高い収穫が得られることが分かっているながらも、数戸のフリーライダー（ただ乗り者）が協力しないので、協力した者は自分が損失を蒙り、逆に離反したものがただ乗りできるという¹⁴³。積極的に水利施設の修繕を押し進める公益心のある村民は「馬鹿者」とみなされてしまい、村民間では信頼関係が構築されておらず、共通の利益を得る機会を逃してしまうのである。村人のロジックは、自分の実際得たもので利益を計算するだけではなく、他人の収益と比較しながら行動を決める。こうした中で、ある種の特殊な‘公正観’が醸成された。それは「自分が得している多寡はともかくとして、他人はタダで自分の行動から利益を享受してはいけないこと」である。文化習慣の理論から見れば、ある習慣行動は、結果として当事者にとって「得」になる場合に、そしてそのような場合に限って定着するようになると言われているが、ここではこの理論が適していないようである。

A村の現象について、諸富は「社会の成員の間に信頼が醸成されていれば、‘他者の利益のために何らかの行動をすると自分に返ってくる’」と期待することが可能であるために、

¹⁴³ きだみのるが著した『にっぽん部落』中の日本の農民の考えと奇妙に似ている。

他者のために行動ができる。成員間でこうした互酬性が一種の社会的規範にまで高められると、その規範に基づく社会ネットワークが形成される。このネットワークが社会に埋め込まれることによって、今度はネットワークが社会の成員を常に相互に協力するように差し向けるというプロセスが想定される。つまり、社会関係資本を活用することで社会関係のなかで人々の相互的な利得を獲得させるための協調と調整が促進される。ただし、何も貢献することなくその恩恵を享受する「ただ乗り」の人々が増えると、他の成員も社会関係資本に投資するのを馬鹿らしいと感じて投資を差し控えるために社会関係資本は衰退する。こうしていったん信頼が失われると、相手には協力しない方が得だという規範が成立し、不信感と非協力的な態度が相互に増幅されていくという負の循環が生じることが考えられる¹⁴⁴と述べている。以上のような現状が現れた原因は、諸富の指摘した要素以外に、調査地ではリーダーシップが取れる人がほとんどいなくて、指令的な規範を形成するのが極めて難しいことも大きな原因の一つである。地域社会における指令的な規範は、社会関係資本の非常に重要な形態である。それによって、人は自己利益的に行動ではなく、集合体の利益のために行動できるのである。社会からの支持、地位、名誉、その他の報酬によって強化されたこの種の規範は社会関係資本であり、この社会関係資本は地域の人々の公共意識を鍛え上げ、人々を公共の利益のために働かせるのである。

フリー・ライダー（ただ乗り）の発生を防止し集合財を供給するために、社会関係資本が重要な役割を果たすことは、社会関係資本論が展開され始めたときから、すでに指摘されている。集合行為問題とは、集団や社会全体の利益となる財の供給にさいして成員が負担をしないで便益のみを享受しようとする、つまりフリー・ライダーになり供給が困難になることである。そこでフリー・ライダーの発生を防ぎ供給を実現するうえで、成員間の協力をもたらす絆や信頼関係すなわち社会関係資本が重要になる。パットナムがこの問題を展開する際に十八世紀の哲学者ヒュームが提起した「農民の逸話」を引用した。隣の農家の小麦豊かに稔り収穫の時期を迎えている。自分の小麦の収穫の時期はその後にくる。自分が隣の小麦の収穫に協力し、次に自分の小麦の収穫に隣の協力があれば両者にとって利益は大きい。しかし、そのようなことは起こらない。自分が協力しても、隣は裏切るであろう。隣も同様に考えている。結局、協力は成立せず、両者とも収穫の時期を逸してしまう。これは、「共有地の悲劇」「囚人のジレンマ」などでも示されている。この問題を

¹⁴⁴ 諸富（2003）

発生させないためには、言い換えれば裏切りを防止し協力を実現するためには、裏切りを処罰する制裁的なものが存在しなければならない。ここでもし第三者機関を設立し、強力な権限を与え、裏切りを監視したり制裁を課したりすれば高いコストがかかるだろう。やはりそこで自発的な協力が重要になる。パトナムによれば自発的協力が生まれるために社会関係資本の蓄積が必要である。社会的信頼、規範意識、社会的ネットワークのような社会関係資本はそれ自体公共財であると述べている。パトナムは互酬性の規範と市民的積極的参加を重視する。互酬性とは「相互期待を伴う交換の持続する関係」と規定される。互酬性の規範の一般化は社会関係資本の極めて生産的構成要素であり、集合行為問題解決をもたらす。市民的積極的参加は市民間の水平的交流を作り出し、協力を実現させる。

調査地 A 村で見た現象は、フランスの政治思想家トクヴィルが指摘した19世紀の30年代のフランス社会の状況を連想させる。トクヴィルは次のように言っている。「地域社会では人々は誰もが独立し、同時に無力である。一人では殆ど何をなす力もなく、誰一人として仲間を強制して自分に協力させることはできそうにない。彼らはだから、自由に援け合う術を学ばぬ限り、誰もが無力に陥る。地域住民が団体をつくる権利と趣味をもたないとすれば、大きな危険にさらされるであろう。文化文明自体が危機に瀕する。共同で何かを行う能力を身につけないような人は、やがて野蛮に戻るであろう¹⁴⁵」と。トクヴィルの厳しい指摘は、現代中国の地域社会にもやや当てはまるかもしれない。調査地の A 村で観察したこの一見小さな現象から今日の中国の地域では人々が私的利益のことしか考えない集団と化し、利己主義に閉じこもっていることが管見できるだろう。

(2) 村民 H との会話

調査途中で子供連れの H とで出会った、筆者が農村調査していることが分かってからすぐ話しかけたきた。

村民 H: 今、うちの村は非常に大きな問題を抱えている。一番悩んでいるのはゴミ問題だ。皆自分の生活ゴミを勝手に捨てているから、雨になると、田圃と畑に流され、農地が汚染されてしまい、耕せなくなっている。ゴミと落ち葉などで排水溝が詰まっていて、汚れた雨水がそのまま井戸に流れてしまう。この二三年癌でなくなっている人が何人もいる。奇病が発生し、今まで病名さえ聞いたことがないのも少なくない。本当におかしいよ。あなた(筆者のこと)は今出世していると聞いたから、なんとか

¹⁴⁵ トクヴィル(2005c)p.190

我々の意見を上に伝えてくれないか。政府は今農村に対して何もしてくれないから、我々は自分たちが見捨てられたような存在になったと感じているよ。

H は最後に自分の子供に「江チャン（仮名）は将来この小父さん（筆者のこと）を見習ってね、小父さんはよく勉強してやっこの村から逃げ出したよ。たとえ将来勉強できなくても、少なくとも何かスキルでも身につけて、都市で生活しなければいけない。この村に居続ければ、お嫁さえもらえないぞ」と冗談半分で言った。

筆者は今回の調査の目的を改めてHに伝えたところ、すぐには自分たちに役に立たないと分かり、少し失望したような様子が窺えた。その後、他に何人かの村民との会話でも「農村現在这么乱，政府也不来管一管」（今の農村はこんなに混乱しているにもかかわらず、政府は全く管理してくれない。）という不満めいた言葉が何回も口から出た。愚痴を漏らしている彼らは政府が農村を見捨てていることを嘆き、農村には良い道路もなく、働く工場もなく、知識も文化活動もないと批判している一方、村人はもし遂行の任務をすべて自分自身に任せられれば、捗々しく進捗するかもしれないことを考えもしなかった。彼らは政府の管理に慣れてきたので、すでに自ら組織して目の前の問題を解決する能力が衰えているようである。



（2013年 12月 7日 筆者撮影）

Dと一緒に村の周辺を歩きながら、聞き取り調査を続けた。廃屋の数が目立っていたため、A村を回ってその数を確認したところ、合わせて36軒もあった。A村では廃屋を含めて102軒の家屋があるが、廃屋は全体の三分の一を超えていることが分かった。調査時は

旧正月までまだ二ヶ月ほどあるから、出稼ぎにいつている人がまだ帰っていない。そのため、新築の家屋の多くは戸口に鎖がつけられていて、鎖は既に錆びていて、門と窓に蜘蛛の巣もたくさんあった。敷地の周りに様々な雑草が生えていて、手入れされていない状態であった。



(2013年 12月 7日 筆者撮影)

D: 新しい家がどんどん建てられているが、旧正月以外にほとんど住んでいない。

筆者: もったいないと思わないか

D: もったいないなどといった考えはあまりないと思う。ほとんどの人は若いうちに都市で一所懸命頑張ってお金をコツコツ貯め、働けなくなったら村に帰ろうと思っているから、あえて今家を作っておこうと思っているだろう。うちの村の出稼ぎ者は70人以上もいて、最高年64歳、最低年15歳(中学二年で退学)である。子供は鎮にある中学校または市にある高校に寄宿しているので、休みの日しか帰らないから、新築の家があまり利用されていない。また、多くの人は村の家を自分の終の住処と思っている、あるいはもし都市で失敗でもしたら、最後の安全網だと考えているだろう。(ここ数年家屋意識と出稼ぎ状況は少し変化がある)

賀雪峰の調査によると、湖北省の京山県にある原子化村では、若い人たちは家を建てる場合、村ではなく、鎮や県城に建てたり、あるいはマンションを購入したりする傾向があるが、ここA村では、村の敷地内に視野が良くて、地勢の高いところに家を建てる傾向がある。ここ数年、県城でマンションを購入する人が徐々に増えているが、まだ多数派ではない。さらに、たとえ県城にマンションを持っていても、村で家を建てる場合もある。やはり、自分の根は村にあるという意識が少し残っているようである。



(2013年12月7日 筆者撮影)

Dとの会話によると、20世紀90年代初期から、A村の人は徐々に出稼ぎを始めた。最初の出稼ぎ先は沿海地方の広東省と福建省に集中していた。広東省に行っていた人は左官と塗装など建築仕事が多かった。福建省石獅市などに行っていた人は裁縫の仕事（日本では女子の職業であるが、調査地では多くの男子が従事する仕事の一つである）がほとんどであった。近年、出稼ぎに行っている人は徐々に村に戻らなくなった。特にいわゆる‘八零後’¹⁴⁶の若者は能力があれば、県城または省城でマンションを購入して家を構えた人は少なくない。経済力の普通の人さえ村から少し離れている鎮に引越したがっている。つまり、地域の人々は自ら自分の世々代々が生活してきた場所を放棄する傾向にある。調査地では少しでも富裕になった農民たちは都市に目を向けてしまうので、農村におおむね一世代、二世代しか暮らしていない。人々が出稼ぎなり商売なりで、やっと少し財産を取得することができたら、彼らはやがて、息子から犁を取り上げ、都市に送り出そうとしているのである。Hさんが自分の息子に「将来よく勉強して、村から逃げ出すように」といみじくも言ったものであって、たまたまの偶然ではない。このように、人的資源が流出し、地域社会内での社会関係資本の蓄積が難しく、外に向かうメカニズムが起こり始めている。

今日の中国の地域社会の人々が自分を育てた農村に対して抱く奇妙な敬遠感は、自分た

¹⁴⁶ 中国では1980、1990、2000年以降生まれた人をそれぞれ‘八零後’、九零後、零零後と呼んでいる。

ちによるものであることは否めないが、しかしながら、やはり歴史的な原因――直接的な原因として実証されていないが、間接的な原因として、無視できないだろう。中国では1950年6月から1953年まで土地改革¹⁴⁷を実施した。この改革を通じて、広大な農民を立ち上げらせ組織し、党と政府に付き従わせ、郷村の政権と武装を掌握することができた。かくして、土地改革は経済的に地主階級を消滅させ富農を弱体化したのみならず、政治的にも地主階級を徹底的に打倒し富農を孤立させたのであった。こうしたなかで、国家が土地をはじめあらゆる生産手段を手に入れた社会では、政府がほぼ唯一の権力となっしまい、従来地域社会で活躍していた郷紳¹⁴⁸階級などの中間権力は徐々になくなった。それまで地方の統治業務を指導していた地主と郷紳階級は革命の嵐の中で消え去り、残った雑多な大衆は地域社会を管理する組織も経験もないから、統治のあらゆる細目を担当しうるのは国家そのものしか見当たらない。つまり、革命によって、地域社会の指導者層、括弧つきであるがエリートという郷紳を消滅させたのである。調査では年長者から聞いた話であるが、この村では何人かの地主が今は廃校になった小学校でさんざん虐められ、殺されたという¹⁴⁹。

また、村民Hの話の中の‘村から逃げ出す’という言葉からも分かるように、村人の心の奥底のどこかに地域社会を見下している心理が潜んでいる。このように村落を嫌悪し、離村したい原因は、上に述べた土地改革の歴史と現行の土地所有制度にも関係しているのではなかろうか。中国で古くから「有産者有恒心」（土地を所有する者は恒心を持つ）といわれるように、郷紳精神は土地に依拠するものであり、土地に執着し、地所によって支えられている。だが、近代中国では土地改革をはじめ生々しい暴力による現在の土地集団所有制（実質国有＝地域権力も国家所有）が地域社会を支配してきた郷紳層を地域社会か

¹⁴⁷ 1950年6月30日、『中華人民共和國土地改革法』を公布。土地改革の目的と任務は、‘地主階級による土地所有制を廃除し、農民による土地所有制を実施、以って農村の生産力を解放し、農業生産を發展させ、新中国の工業化の道を開く’とにある。

¹⁴⁸ 中国の明(みん)・清(しん)時代(1368～1912)における官僚身分をもつ者の郷里での呼称。官僚をみざす挙人(きょじん)、貢生、監生、生員などは総称して士人(しじん)という。郷紳、士人をあわせて紳衿(しんぎん)、紳士(しんし)ともいう。有力地主の家は科挙合格者を出すことに専念し、進士(しんし)（科挙の最高学位保持者で官僚身分をもつ）、士人を出し、商業活動も行いつつ大土地所有を拡大していくものが多かった。このように郷紳、士人を出す地主の家が当時の支配階級を構成していた。郷紳は地方の実力者であり、社会秩序保持の役割を担い、また「土豪劣紳(どごうれっしん)」として権力を振るって社会矛盾を激化させた。清末、科挙制度の廃止後も、実質的な郷紳階級は維持、再生産され、革命運動の打倒目標となった。奥崎裕司著『中国郷紳地主の研究』（1978・汲古書院）

¹⁴⁹ 詳細は本章の第2項を参照。

ら追い払ったため、郷紳層が地域社会を支えてきた側面を見失わせ、それとともに、広い意味で地域社会を維持する精神をも失わせたのではあるまいかと考えられる。

(3) 大学生村官Lとの対談

村の脱穀場で大学生村官Lと偶然出会った。脱穀場は昔、村民が映画を見るところであった。それ以外に祭りの開催場としてもよく利用されていた。Lは既に2年間勤めた。彼に農村社会のことについて聞いて見ることにした。

調査日 2013年12月4日

L: 私は2年前に大学を卒業してからこの村にやってきた、大学では文化人類学を勉強していたため、農村社会の伝統文化に大変興味を持っていた。中国の伝統文化は急速に消えていると聞いていたが、まさかこんなに速いとは思わなかった。今の農村社会は建築、芸術など目に見える有形文化だけではなく、各種の祭り、口述歴史などの無形文化も急激に消えている、この村も例外ではない。様々な風俗習慣、伝統文化が衰退してきた。昔の旧正月によく‘黄梅劇’などの地方劇を演じたが、今は演じる人もあまりいなければ、観る人もほとんどいなくなっている。この村でも旧正月以外に人気(ひとけ)さえ感じられない。旧正月以外にはよろよろと歩く老人しか見えない。近年、出稼ぎの人が旧正月に帰っても自分の家に閉じこもり、テレビを見たり、ゲームをやったり、マージャンをしたりするだけで、近所あまり関心を持たない。祭りを行うどころか、麻雀などの賭博と冠婚葬祭の宴席以外に人を集めることさえ難しい。生物学のたとえでいえば、村は健全な有機生命体ではなくなり、すでに年を取っていて、生命の活力を失いつつある。村の会議と選挙に参加する人が極めて少なく、自分と直接的な利害関係のない「公」のことに関心を持たない。最近麻雀などの賭博以外、広場ダンスが少し流行っているが、参加者はほとんど一部分の婦人のみに留まっている。火災防止・環境保護などはもちろん、農業活動の灌漑・水源管理さえ参加しない。最も自ら率先して行動するまた先頭をきる役割を果たす人がなかなか現れない。

確かに聞き取り調査と実地調査では、昼間からマージャンを楽しんでいる人が多く見られ、路上に使い捨てられたオムツと宴会に使われたビニールシートをはじめ、生活ゴミが散らかっていて、養豚場の糞尿垂れ流しなどが目立った。自分こそが村の主人公であるという主体意識が薄くて、自ら組織して周りの環境を整えようとせずに、心の底に誰かに頼って、管理してもらおうという行政(あるいは誰か)への依存心理が非常に強いと見られる。

金儲けなどの物質生活の追求には熱心だが、自分の周りの公共事業、公共文化には関心を示していない¹⁵⁰。

以上のように物質的欲求が肥大化し、公共精神が衰えた社会では、さらにまた他の特徴が見られる。それはこのような社会では人々の間につながりが希薄化していることである。伝統的な地域社会、いわゆるムラ社会では、生活のすべては共同体に依存しているが故に、人々のつながりは非常に密接であった。しかしながら、すでに述べた通り、近年中国の地域社会では事態は一変したのである。その原因は以下の三つがよく挙げられている。一つ目は、産業構造と就業構造の変化に伴って、若年雇用者層が都市部に大量流入し、さらに一人っ子政策で、少子高齢化や単身世帯の増加、地域活動を担う若者や現役世帯層の減少傾向が続いていること。二つ目は、交通通信機関の発達などによる生活圏の拡大、テレビやスマートフォン、パソコン、車などの普及によって人々のネットワークが広がった結果、地域共同体への依存度が軽減したこと。三つ目として、生活様式および生活意識の都市化、特に近年では、若者の間では情報化の進展による関係性の変化などによって、地理的なコミュニティよりもウェブ上のコミュニティに関心を示す人々が増えていることも大きな要因の一つである。

筆者は上に挙げられている理由に賛同する同時に、やはりリーダーシップの取れる人いわゆるキーパーソンは非常に重要な要素であることを強調したい。パットナムが「一国の社会関係資本のストックに影響を及ぼすもう一つの勢力は、社会的あるいは政治的な起業家である。社会関係資本の発生と成長を促す機関・制度を整備するうえでリーダーの役割が大きいという意味で、リーダーシップが重要な意味を持つ」¹⁵¹と指摘したように、地域

¹⁵⁰ 以上の現象について、トクヴィルは「物質主義が世間に根を張り、人の魂を腐敗させはしないとしてもこれを柔弱にし、やがては一切の精神のばねを音もなく弛緩させるであろう」[トクヴィル(2005b)p. 238]と過度な物質生活への依存は社会の公共文化を腐食すると予言した。また、オルダス・ハクスリーは『すばらしい新世界』で機械文明の発達による繁栄を享受する人間が、自らの尊厳を見失い、報酬による労う型のコントロール(control by reward)を受けていると悲観的なトーンで人間が無思考の奴隷になることを描いた[ハクスリー(1932)]。彼によると、このような社会では、人々は思考などが要らず、ただ絢爛とした物質的満足が溢れている世界を享受するだけで良い。このような快感が広がれば広がるほど社会が安定する一方、徐々に活力を失い、ゾンビ社会になってしまう。ゾンビ社会の最も大きな特徴は思考力の喪失である。人間は考える力がなくなれば、心理的な示唆とプロパガンダを受けやすくなり、現状に満足してしまいがちである。そうすると、社会を変える意欲がなくなり、それに伴って行動能力も減退または喪失してしまうだろう。中国の地域社会はまさにハクスリーがあらわしているゾンビ社会になりつつあると言えよう。

¹⁵¹ パットナム(2013)p. 15

社会ではトップに立つ人間によるリーダーシップに負うところが大きいことはもはや論ずるまでもないだろう。だが、一人っ子政策による農村人口の減少と出稼ぎによる季節的な人口移動、進学などによる若者の流失、現在地域社会ではリーダーシップの取れるキーパーソンの現れがますます困難になるであろう。

第2項 B村の教育事情

調査日 2015年8月11日 火曜日 曇り

教育は文化にとって最も重要な要素で、社会関係資本と互いに影響し合っている。稲葉¹⁵²は教育が社会関係資本を育むこともあり、社会関係資本が教育に影響を与えることもあると指摘している。文化は教育を抜きにして語れないとされているので、本稿では文化と社会関係資本を考察する際、調査地の教育現状も鑑み考察することにする。2015年8月に一週間程度B村で調査を行った。B村はA村と似ている問題もあるが、それと別に小学校が廃校になったことは少し異例だと考え、さらに初級教育は地域社会の教育事業の中心的存在で、かつのちのちにも精神的な拠り所でもあるから、B村での調査は重点的に小学校教育に関する聞き取り調査を行った。以下は調査日記に基づいて整理した内容である。



(廃校となった小学校の正面)

¹⁵² 稲葉 (2015) p. 56



(廃校の校内 2015年8月11日 筆者撮影)

廃校の光景 B村の小学校は様々な事情で2008年に閉校された。学校の鉄門が錆びていて、鎖は付けられていなかった。入ってみたところ、キャンパスの空き地に野菜が植えられていて、教室の木製のドアはすでに腐食していた。壊れた窓を通して教室内の光景を覗いて見た。廃棄された家具、ベッド、椅子、ソファなどがあちこち転がっていて、数年前に使われたノートと黄ばんだ国語教科書が散在し、黒板にまだ小学生の絵と落書きが残っていた。裏門をでたところに辛うじて生き残った売店¹⁵³があった、店主D2に学校についての話を聞いた。彼は元々この小学校の教師（民弁教師¹⁵⁴）を勤めていた。以下はD2との会話の記録である。

この小学校は1963年に成立した。最初は校舎がなくて、民家の建物を借りて2年間程間に合わせた。三年目になってようやく日干し煉瓦で簡易教室を作り上げた。文革の時、校舎前は地主と富農などの「黒五類」¹⁵⁵を批判闘争する場所であった。この小学校設立時から日干しの校舎まで大いに尽力した郷紳（知識層であり小地主で、村の向上に資する人）は糾弾され激しい暴行を受けた。その子供たちも紅衛兵に革ベルトで殴られて、床にうずくまり、血まみれになったあと、小さな部屋に閉じ込められたという非人道的な迫害を受けた¹⁵⁶。また、当時集会を行う時にリーダーのスピーチと毛沢東の最高指示が全てこ

¹⁵³ 商品の種類が少なく、在庫も少ない。3台の麻雀オートマシンが置かれていて、売店というよりむしろ麻雀館と言うべき。

¹⁵⁴ 公務員の身分を持たない小中学校の教員（給料は国の補助金以外は民間例えば村自治体で負担する）限定された期間に行われる試験に合格すれば、正式な教員になれる制度もあった。

¹⁵⁵ 中国において文化大革命初期に、出身論に依拠し、労働者階級の敵として分類された5種類の階層のこと。具体的には地主、富農、反革命分子、破壊分子、右派及びその家族も含める。

¹⁵⁶ 当時の中国では出身階級が大きな意味を持っていた。「黒五類」というレッテルが世帯を超えて引き継がれる。「親が英雄なら子も英雄、親は反動的な子なら子は馬鹿者」という言い方があった。

の校舎前を出された。1986年国から補助を少し受け、村も一部資金を捻出し、また村民は力を合わせて小学校を建て直した。当時村民のほとんどは積極的に協力し、現在よく見られるフリーライダー（ただ乗り、非協力者）は少なかった。学童の入学率も非常に高く、教員の質も比較的に良かった。80年代の末期から90年代の中頃までの数年間はうちの小学校の最も輝かしい時期だった。進学率も学生の成績も全県ではトップクラスに入っていた。当時卒業生の何人かは大学まで進学したという。1996年僕は正式な教員になれたはずだが、一人っ子政策に違反したため資格が取り消された。それが契機で教師の仕事をやめ、売店を経営し始めた。1998年から徐々に変化が現れた。少しでも能力とコネのある教師はほとんど鎮の中心学校または市内の学校に転職した。そのため小学校の教育質が急速に落ちた。村民たちは失望感を感じ、経済的に余裕のある家庭は子供を市内の学校に行かせるようになった。余裕のない家庭の子供は学校をやめて、親と一緒に出稼ぎ先に行っている。

数年前に何人かの村民が共同出資で学校を建て直そうと呼びかけたが、村の青壮年が皆出稼ぎに行っているため、家に残っている「386199部隊」¹⁵⁷は公共事業に関心を示さず積極的に参加しようとしていない。特に教育適齢期の子供のいない家庭は自分と関係ないと思い、無駄なところで損したくないのでお金を出さない。まあ、正直に言うと、たとえ集金の問題が解決できても、こんな辺鄙なところで仕事に甘んじる先生はとうてい見つからないだろう。学校が閉鎖に追い込まれた原因はいろいろあるが、一人っ子政策と「基礎教育改革と発展に関する決定」¹⁵⁸が最も大きな影響を与えたと思う。

後の聞き取り調査でもD2の話が裏付けられた。確かにここ数年村民たちの子供の教育に対する考え方がかなり変わってきた。ある村民曰く、

「たとえ学校に行ってもあまり望みがない。また仮に幸運に恵まれて大学に入ったとしてもお金がかかるばかりで、昔のように卒業後仕事は配分してくれず、安定した生活が保証されない。この村では数年前に某大学の思想政治教育学部を卒業した大学生がいた。彼が大学で何を勉強したのかわからないが、結局大学を出て公務員などになれず、我々と同じように出稼ぎに行っている。計算してみれば、高校3年と大学4年合わせて7年間に少なくとも6万元以上掛かる。一方、逆に学校を出て早く出稼ぎに行けば7年間10万元以上稼げる。この差は誰にとっても火を見るよりも明らかであろう。

このように、村人の間では経済面の計算が最優先される傾向にある。彼らにとって教育の使命は人間を無知の状態から逃れさせることではなく、単なる金儲けの手段だと思われる

¹⁵⁷ 386199部隊とは婦人、子供、年寄りの総称を意味する。中国では3月8日は婦人の日、6月1日は子供の日、9月9日は老人の日と定められているので、それに因んで386199という名前が使われている。

¹⁵⁸ 閉校の直接的な原因は2001年中国国家国務院が「基礎教育改革と発展に関する決定」の頒布だと思われる。「決定」によると、中国農村における学生数に合わせて学校の分布を大調整し、小規模または辺鄙なところに点在している学校を撤廃し、郷鎮の中心学校に合併する方針という。

ているようである。そのため、成績がよくて勉強意欲と学力もある子供はいわゆる出世の可能性があるので、親が借金しても大学まで行かせるケースもある¹⁵⁹。しかし、多くの場合は親が出稼ぎに出ている、祖父母に育てられた子供はなかなか勉強に集中せず、ゲームやテレビに凝ったり、麻雀などの賭博を楽しむ大人の周りで遊んでいたりするのである。中学校にでも入れば、学校が遠くなり、祖父母は農作業があるから毎日送迎するわけにはいかない。また、祖父母とのジェネレーションギャップが大きすぎると、孫を可愛がる傾向があるから、我がままで、自分勝手な甘えん坊になってしまう子供が多い。子供たちはよくお祖母さんに小遣いをねだり、学校をサボってネットカフェに浸かっている。祖父母がいくら怒っても空耳で、逆に祖父母に反抗する場合も少なくない。一方、祖父母に頼らずに寄宿学校に任せるのはどうだろうか。聞き取り調査によると、完全寄宿学校は高く、教育の質も今ひとつである。呆れたことに、子供の成績は適当に作られているものであり、試験前に試験問題を黒板に書いてあらかじめ明らかにしていても試験時に解けないなどのケースもよく見られるという。

D2が心配しているのは小学校の閉校自体だけではなく、村人の教育への軽視、知識文化への尊重が風化することである。言い換えれば、村人に精神文化面の向上心が欠落していることを最も懸念している。学校の閉校は様々な現実の理由例えば人口の減少、費用の増大、教育への失望などが挙げられるが、一つの村における教育文化への関心という視点からみれば、これは単に一つの小学校が生き残るかどうかの問題ではない。地域社会にとって、小学校の閉校は教育の衰退のみならず、精神的な絆を培う文化の衰退に種をまいたとも言えるだろう。教育に対して失望し、人心が陶冶されず、文化虚無感という雰囲気はびこる結果になると思われる。

中国では多くの研究者は今日まで地域社会の教育現状を懸念している。中国の社会学者鄭也夫は「教育は少なくとも二つの意味が含まれている。学校教育以前、教育の第一責任者は親である。しかし、近年中国の農村において出稼農民工の家庭では親より祖父母が第一責任者の役割を果たしている。戸籍制度の関係で、親たちが止むをえずに子供を祖父母に預けて地元の学校に通わせている。やはり祖父母より親がそばにいてくれた方が子供の成長に有利である(中略)・・・農村出身の子供が自分の運命を変えるには、名門大学に合

¹⁵⁹ 調査地三つの村で、1978年大学入試再開してから2015年7月まで累計重点大学合格者は9人である。日本の専門学校にあたる職業学院は（高校卒業であれば、ほぼ誰でも入れる、つまりハードルが殆どない大学）含まれない。

格しなければならない。ただ普通の大学に進学するのだけでは出世の可能性が低い。近年農村の子供の勉強意欲がますます低下している¹⁶⁰」と指摘した。中国の経済学者茅于軾は「教育の目的は教育を受ける本人のためであり、国家人材を培うことではない。‘人材論’は教育を受ける人を他者の道具にさせているに過ぎず、人間本位的な考え方ではない。現在の中国における‘人材論’の行き過ぎは功利主義の一つ現れである。‘人材論’を強調し過ぎると、大学生が社会人になってから、物事の判断基準が経済効果第一となってしまふ。そうなると、社会の基本的な道徳をはじめ全てのことは経済を求めることに屈服するようになってしまふ¹⁶¹」と教育目的の視点から現在中国の教育の問題所在を指摘した。現在の教育理念と教育体制は地域社会だけではなく、社会全体の社会関係資本にとってプラスになるとは言えないだろう。全中国で一律に検閲された教科書を使わせ、ひたすらこれを暗記させる教育を実施している。国定の教育が絶対的な権威となり、あまり個人的な考えや自由な発想を育てない傾向にある。また、イデオロギーの色彩が小学校から大学まで濃く染みている。例えば現行の教育体制では、小学校における少年先鋒隊¹⁶²、中学校における共産主義青年団¹⁶³、さらに高校と大学において予備共産党員または正式共産党員になるのが模範生であるという価値観である。さらに大学では党の書記が常駐して、大学の方針など様々な重要事項を決めている。同時に大学生に対して、‘輔導員’¹⁶⁴制度を設け、常に彼らの活動と動向に注意を払っている。敗戦までの日本の配属将校と似ている制度である¹⁶⁵。

教育理念と制度はいかに人間と社会を変えていくかについて、フランスの社会学者、心理学者ル・ボン是这样子言っている。「わが国現在の教育法が、それを受けた多数の人間を社会の敵に変じ、最悪な形態の社会主義のために多くの追随者を募っていることが示されている。この教育法の第一の危険は、教科書の暗誦が知力を発達させると信じこんでいる

¹⁶⁰ 鄭 (2016) 『同舟共進』第6期

¹⁶¹ 茅 (2014) 『中国青年』第23期

¹⁶² 中華人民共和国の全国的な少年組織である。6歳から14歳の自由参加の学童を団員とし、主に課外活動を通じて共産主義を学ばせ、将来の共青团員、共産党員を育成する。ソ連のピオネールに相当する組織である。

¹⁶³ 中国共産党の指導のもと14歳から28歳若手エリート団員を擁する青年組織である。1920年8月中国共産主義青年団として発足。翌年発足する中国共産党の基盤を固めるために、下部組織として作られた。通常‘共青团’という略称で呼ばれている。

¹⁶⁴ 1961年中国共産党中央廬山会議で当時の大学生に思想政治教育を行う専門職員を設けることを決議した。2015年11月、中国教育部が‘輔導員’の第一条件は共産党員であることを新たな規定で決めた。現在では、大学生に対して思想政治面の教育を行うだけでなく、学生の日常管理、就職指導、心理カウンセリングなどをも執り行う。

¹⁶⁵ 下村『次郎物語』第3部

ことである。そこで、人々はできるかぎり教科書を覚えようと努める。そして、青年は小学校から博士の学位や教授資格を得るまで、ただ教科書の内容を鵜呑みにするだけで、決して自分の判断力や創意を働かせないのである。青年にとって、教育とは、暗誦と服従とを意味する・・・（中略）教師には絶対に誤りがないと盲信することであり、結局、その努力が、われわれの知能をかえって減退させ、無力ならしめるにすぎないのである¹⁶⁶」

と。さらにル・ボンが教育に対して、「過度の勉強に疲労した者に対してあまりにも多くのことが要求されたのである。しかじかの日に、椅子に腰掛け、または黒板の前に立って、二時間ひきつづきに、一連の学科について、およそ人間知識の生き字引となることを要求されたのである。修得したことが、あまりにも多く、あまりにも重荷となるので、たえず頭脳から抜け落ちてしまう。といて、新たな知識も修得できない。その精神力が衰え、豊かな活力が涸渇してしまっているのだ。こうして、成熟したとみえる人間が現われるのであるが、それは、しばしば、前途にもう見込みのない人間のことである。こういう人間が、身を固め、結婚し、永久に同一の圏内を堂々めぐりすることに甘んじて、自分の限られた職務に閉じこもる。腰掛の上で教科書にたよる学校の学理偏重の準備期間は、試験や学位や卒業証書や免許状を目当てに、単にそれのみを目当てに、永びいて過重に失した。しかも、それは最悪の方法によったのである。すなわち、反自然的反社会的な制度の適用と、実地修業期の極度の遅延と、寄宿制度と、人為的な訓練と、機械的なつめこみ主義と、過度の勉学とにより、かつ将来のこと、成熟期のこと、成人してからなすべき男子の職務のことを無視している。将来の決定的な地位のために必要な資格を青年にさずけるどころか、かえってそれを奪ってしまうのである¹⁶⁷」と厳しく批判していた。この百年前の指摘はまるで現在の中国の教育問題の病巣を予言していたようである。このような教育法は、重大な危険をもたらすのである。その危険とは、この教育を受けた庶民に、自分の身分に対する激しい嫌悪の念と、そこから逃れ出ようとする強烈な欲望とを吹き込むことである。

「労働者は、もう労働者としてとどまることを望まず、農夫は、もう農夫であることを望まず、そして、中流人の末輩も、その息子たちのために、国家から俸給を受ける官職以外のどんな職業をも眼中におかないのだ¹⁶⁸」というル・ボンの指摘の通り、調査地では村人は自分の住んでいる村（地域社会）、そして自分たちが出稼ぎで従事している仕事と

¹⁶⁶ル・ボン（1993）p. 115

¹⁶⁷ル・ボン（1993）pp. 120-123

¹⁶⁸ル・ボン（1993）p. 117

えば左官を軽視し、自分の子供を公務員など安定的、そしてお金もそれなりに稼げる、いわゆる‘鉄飯碗’¹⁶⁹のような仕事に従事してほしいという傾向が見られる。また、中国では小中学生の守則に書いてあるように、まず党と祖国を愛すべき、国家のため貢献すべきである。国家は教育を通じて国家建設の人材を作るべきという考え方が主流である。少なくとも官許のイデオロギーはそうである。

内陸農村の村民のエートスについて深く研究した田原は「中国経済発展の牽引力となってきた中国農民の行動原理やその背景の考え方は‘発家致富’の四文字に集約される。‘発家致富’は‘家を興し富裕に至らしめる’即ち小農民の家庭や一族が世代を超えて栄え富むことにほかならない。きわめてシンプルな目標である¹⁷⁰」と指摘している。B村での調査によると、村民間では誰が成功しているかを判断する基準はどれほどお金を持っているかである。旧正月に里帰りの村民同士は平気で今年いくら稼いだかと相手に直接聞く。誰が良い車を購入したか、都市で家（マンション）を購入したかなどはすぐ他人と比べる絶好な材料になる。少し前までは大学に受かったことは地域社会のトップニュースになり、皆に羨まれる対象になったのだが、昨今では大学に合格したか否かはともかく、「搞到钱没有」（お金は稼いだか）が日常会話の挨拶になっている。出稼ぎ経済¹⁷¹のもとに農民が目先の利益や金銭ばかりを追い求め、教育などは二の次である。インタビューを受けた中の一人は、小学校さえ卒業していないが、ここ数年建築業で大変成功している。彼が「教育を受けなくても儲けに影響は出ない。現に俺の建築隊（自分の会社を指す）で仕事をしている大学生はたくさんいるよ。大学を出ても得なことはあまり感じない」と自慢げに話した。

中国の農村問題研究者于建嵘の百村調査でも「読書無用論」（勉強しても役に立たない）との論調が流行っているようである。大学に行っても、卒業イコール失業で、家庭の期待していたリターン（良き仕事、良き稼ぎ）が見られない。農村出身者は勉強を通じて自分の運命を変えることができない以上、大金と時間をかけて勉強する甲斐が全くない。それよりも早く学校を出て出稼ぎに行った方が採算に合うと思っているという。本来なら、教

¹⁶⁹ 日本語の‘親方日の丸’という言葉の意味に近い。政府などの公共機構に保護されている職業である。国が無くならない限り倒産し得ず安定しているため、割れない鉄で作ったお椀という比喩的な言い方である。具体的には公務員、公立学校の教師、国有企業従業員などである。

¹⁷⁰ 田原（2013）

¹⁷¹ 「出稼ぎ経済」を中国語で言えば「打工経済」である。人類学者の周大鳴が定義した言葉で、（周2006）それによれば、出稼ぎ経済とは、農業を主とする農村で、外地への出稼ぎの割合が労働力全体の30%ほどを占め、出稼ぎが現金収入の主たる源泉となっているような状態を指す。

育はただ専門家と職人を指すのではなく、独立した人格と自由な精神の持ち主を養成するものである。一人の人間として自分で物事を考える能力、社会を認識する力、市民精神などを培うべきものである。だが、現在中国の教育方針では、暗澹とした将来が予想されるであろう。というのは、人々の精神が、改善されるのも、悪化するのも、幾分か教育と訓練によるのである。

以上見てきた通り、「一切向前（钱）看」（すべてはカネ次第である）という現地の流行り言葉通り、まるでお金がすべてであるという社会風潮が地域社会でかなり蔓延っている。もちろん、どこの社会でも人々は所得で人の社会的な地位を判断するかもしれないが、しかし実際に口に出して言うことはそれほどないだろう。ところが、筆者が調査に入った際、このような露骨な言い方が頻繁に聞こえた¹⁷²。また、人々の教育と文化に対する認識はやや近視眼的と言わざるをえない。教育を含め、社会全体は功利主義と実用主義になりつつある。調査地では、社会関係資本が非常に稀薄で、地域社会の教育のために皆協力して何かをする内発的な原動力、例えば地域への愛、血縁者、近隣者への敬意があまり見られない。相互支援の諸形態はまだ少し残存しているが、しかしながら、これらは家族相手にとどまっていた、他人あるいは公のことに對して、まだまだ不信任を抱いているのが現実であると言えよう。

第3項 B村の宗教信仰に関する事情

前述したように、本稿における文化の定義は、道徳・宗教信仰と風俗・習慣を含め、ある特定の社会に共有される行動様式と生活様式を指すので、以下では調査地の宗教信仰について少し触れておこう。観察調査(2013年8月12日から17日まで、2015年8月3日から8月10日合わせて2回)

脱穀場の東の大きな楠の木の下に土地廟¹⁷³があった。筆者の記憶では宗教信仰に関する活動がよくそこで行われていた。土地廟の門が開いていて、前の土台が爆竹と線香などで燻ぶっていることから拝みに来る人が多いことが分かる。地域社会の土地廟は小さく

¹⁷² このような現象は新聞によく取り上げられている。例えば、2017年の春節に、帰省した人が最も多く聞かれるのは収入と結婚相手のことである。『北京晩報』2017年2月3日

¹⁷³ 中国の南部でよく見られる民間信仰の施設である。祭られているのはその土地に棲息する人と風水を守る神様である。文化大革命の時殆ど破壊されたが、改革開放以後徐々に復帰してきた。仏像は日本の道祖神によく似ている。

て、素朴な建築物が多い。漢族が住んでいれば土地廟があると言っていいほど広く分布している。



(土地廟 真ん中に祀られているのは土地爺さんと土地婆さんである 筆者撮影)

また、調査地では土地廟以外に、村から約 1.5 キロ離れているところに「〇〇観」という道観¹⁷⁴ (廟) がある。神主によると、この道観 (廟) は中華民国十七年 (1928 年) 地元郷紳の集金で作られた。数年おきに補強修繕作業を行っていて、保存状態が良好であった。しかし、1967 年に文化大革命の‘打倒一切封建迷信’ (すべての封建迷信を打倒しよう) とのスローガンのもと、仏像も廟の建物もかなり破壊された。廟の煉瓦と基礎石は公社の倉庫に利用され、木造の仏像も焚き木に使われた。それだけにとどまっているのではなく、この廟の建設に大きな貢献をした郷紳は‘地主’と定められ、封建迷信の代表として厳しい批判闘争を受けた。今使用中の建物は 1982 年に再建したもので、費用は信者の寄付と当時春節に行われた「菩薩迎え」¹⁷⁵からの募金である。今は「菩薩迎え」はなくなったため、建築費 (調査時に境内では新たに観音殿を作っているところであった) と維持費は主に信者の念願が叶ったときの寄付によっている。

¹⁷⁴ 仏教の釈迦様と観音様以外に道教の元始三尊と神主の先祖も祭られているから、厳格な意味で廟とも言えなければ寺とも言えない。現地の方言は「廟」と呼んでいる

¹⁷⁵ 本章の第 4 項の事例 4 を参照



(建築中の観音本殿 筆者撮影)

旧暦の一日と十五日となれば、仏像を拝み、神仏に線香を供えに来る‘香客’¹⁷⁶が大勢いて、非常に賑やかである。「香客」の多くはおよそ半径5キロ以内の村民で、女性が7割強を占めている。参与観察と聞き取り調査によると、これら‘信徒’は皆それぞれ仏様に願い事がある。一番多いのは、「求財」（より多くの財産獲得）で、その次は「求官」（例えば公務員の息子の立身出世）と「求功名」（重点高校や大学への進学）である。その他、「求子」（子供が授かるように）と「求平安」（平穩無事、無病息災）などがある。

‘香客’は拝みに来る際、爆竹、‘黄表’¹⁷⁷、線香以外にりんごとか蜜柑などの供え物を持って来る。供え物を神仏前に並べ、線香を点してから‘黄表’を燃やし、そして爆竹を鳴らしてから神仏前で跪いて拝む。‘香客’の殆どは拝む時に神仏に願をかけている。神主は‘香客’が神仏に願い事をしているところに‘磬’（銅製で鉢のような打楽器）を叩く。願いことをする際に、‘香客’は「菩薩様、是非私を加護してください。もし〇〇願望が実現できたら、〇百円を油代として差し上げることを約束します」というような言い方で神仏の前で誓う。後で願いが叶ったら、神仏は「很灵」（靈驗あらたか）と称え、願をかける際に口約束した通り神仏前に金品を出す。ひと昔前までは神仏の前の灯明に使われる菜種の油を持ってくるのが多かったが、現在はほぼ現金化している。

¹⁷⁶ 調査地では拝みに来る人を‘善男信女’または‘香客’と呼んでいる。

¹⁷⁷ 神様に贈るお金である。よくこの黄色い紙で馬蹄形の金塊という折り紙を作る。

中国の地域社会では、人々は別に仏教の教義を理解した上で、本心から仏教を信じているのではなく、日本の「苦しい時の神頼み」ということわざと同じく、ほとんどは何か困っている時、または是非とも何かを実現してほしいが、人間の力ではなかなか解決できないときに、臨時的に神様の足を抱いて願っているに過ぎない。もちろん、こうした「現世利益」的な信仰は、伝統中国から存続しているものであるかもしれないが、現代ではその具体的な手段が著しく金銭と結びついていることが特徴である。



(真ん中に祀られているのは地元で‘福主大王’と呼ばれている大神である 筆者撮影)

無病息災と学業成就などの願い事なら理解できなくもないが、調査地では賭博の風潮が非常に流行っていて、時々賭博者が賭博で儲かることを願って神仏に数百元出して願をかけることが見られる。また、地元の賭博者やチンピラなどの容疑者は警察に捕まらないように神仏に祈っているケースさえもある¹⁷⁸。このような現象から、地域社会の人々は神仏を世俗社会の官と見なし、何か供え物でも出してお願いすれば、厄介なことを解決して

¹⁷⁸ 2014年4月28日にある容疑者が人を殺した後、数日にわたって廟に身を隠し、神様に無事を祈願していた。この事件は地元の新聞にも取り上げられている。(『楚天都市报』2014年5月9日)
また2014年9月11日の夜、14人の賭博者が廟に集まり、ギャンブルをしていたところを警察に捕まえられた。「廟は目立たないところにあり、神様に守られているから、安全だと思っていた」と、後の取り調べで容疑者が語った。(『中国新闻网』2014年9月15日)

くれると思っていることがうかがえる。ある意味でいえば、拝みに来る人は自分の利益を確保するために神仏に賄賂を贈っていると言えるのではないかと思われる。ちょうど現実社会で権力者にゴマすりして機嫌をとったり、お金を贈ったりして自分の安全と利益を守ろうとするのと同様の心理が働いているとも言えるだろう。

一方、まったく道観（廟）に来ないいわゆる無神論者も確かに多数存在している。これらの無神論者は比較的的文化程度が高く、マルクス主義の唯物論教育を受けている者である。官許の哲学唯物論こそ、現在の中国の人々の宗教信仰に大きな打撃を与えたと思われる。中国の地域社会では、仏教、祖先崇拜、また地域によってはキリスト教会などが見られるが、全体的からみれば「中国人没信仰」（中国人は宗教信仰がない）とよく言われているように、敬虔な教徒がどれほどいるだろうか。宗教信仰の欠乏は物質的享樂の好みを無限に助長し、やがて人々はすべてが物質に過ぎぬという考えに誘われる。この唯物論が今度は人々を引きずって気が狂ったように物質的享樂を求めさせる。この悪循環を警戒すべきと思われる¹⁷⁹。

新中国成立後から今日まで、教育などの媒体を通じて官許のイデオロギー、マルクス・レーニン主義が国民に教え込まれてきた。毛沢東時代には、仏教、儒教、道教などの宗教はある種の熱狂によって攻撃された。それにかわって、人々の魂から信仰という中身を熱狂的に奪おうとする試みがたえず繰り返された。民衆に共産主義という一種の‘宗教’というべきものが押し付けられ、魂は空虚にされた。特に文化大革命の時に多くの人がこの空しい試みに熱狂した。共産主義という目に見えない遠くのところにある一種のユートピアを強調し続け、千数百年の古い宗教を抑圧し、または監視、管轄してきたのである¹⁸⁰。

¹⁷⁹中国のトップ指導者層は建前としてマルクス・レーニン主義の信奉者であるが、本稿の冒頭で汚職摘発事件に触れたように、巨額の賄賂金を見ると、彼らの実際の行動は正反対であるように思わずにはいられない。彼らが教育を通じて国民に自分さえ信じない思想を教え続けている。ここ2、3年の汚職を撲滅するキャンペーン（‘老虎苍蝇一齐打’高級幹部である虎と下級幹部である蠅を共に叩く）でも分かるように、摘発された官僚は誠心誠意に‘人民’に服務する人が極少数派であるとも言えそうな状況である。彼らは不法な手段で‘人民’より‘人民幣’に‘服務’している。トクヴィルがこれについて、「いつの時代にも、また政治の状態がどうあれ、物質的享樂の情念とそれにつながる考えだけで一国の人民全体が満足できると信じるべきではない。官許の哲学が広まるとも、長続きすると信じない。国家宗教についていえば、それは一時的に政治権力の利益に役に立つことがあったとしても、遅かれ早かれ本来の自発の宗教に致命的な害を為すことになる」と考えられる。教義を尊重させるために政治家のとりうる唯一の手段は、彼ら自身これを信じているように毎日振舞うことである。為政者は大きな問題について細心の注意を払って道徳に自ら従わない限り、小さな問題において人々にこれを認識させ、愛させ、尊重させることを期待し得ない¹⁷⁹」と指摘した。中国に限って言えば、いわゆるマルクス・レーニン主義の信者、国家の上に凌駕するような組織は特にこれに当てはまるのではなかろうか。

¹⁸⁰ 国家宗教事務局、各地方の民政局に設置されている宗教管理委員会が宗教に関わることを管理することになっている。そのため、中国では多くのお坊さんは行政的な肩書きがついている。たとえば、少林寺の方丈釈永信は宗教管理委員会の副部長にあたる地位にあたる。

文化大革命までの間に、無神論的なイデオロギーとプロパガンダのため、古来の伝統的な祭りや文化行事は悪と位置づけられてきた。前述した神主との会話に出たように、文化大革命時代に「破四旧」というスローガンのもと、旧習慣旧文化は民衆を苦しめてきたもので、封建的かつ迷信的な要素が多いとされた。文化大革命は恐ろしい過程をたどった。政治的諸制度を破壊した上に、社会の諸制度と秩序も破壊した。その後法律は、習俗、慣習、言語までを変えてしまった。革命は統治機構を破壊したあとで、社会の基盤を動揺させ、庶民の精神文化の柱である土俗の神そのものをも徹底的に攻撃した。その後の改革開放に伴って、国家理念としてのマルクス・レーニン主義は事実上破綻し、民衆の心が虚ろになってきた。多くの人々はほぼ無宗教無信仰の状態に陥っているところに消費主義と物質的享楽主義が蔓延し、民衆はただできるだけ現世のことを享受すれば良いと思うようになっていく。近年では文化大革命時代に破壊された祖廟を再建するなどの復興活動もところによって見られるが、社会関係資本の薄いところでは賭博と冠婚葬祭の宴席以外に人を集めることさえ難しく、この努力はまるで焼け石に水のようなものである。

以上見てきた通り、調査地では無神論者が現世の享受を重視している一方、有神論者の信仰は本来の宗教信仰の教義とはやや離れている。が、彼らの中に共通点はある。例えば、調査地 A 村のような地域社会では問題を解決するに専ら権力に頼み、自ら解決しようとする。彼らにとって、神仏は官僚であり、官僚は神仏である。彼らは精神面では神仏を拝んでいるが、実際の生活では金銭と官僚を拝んでいると言えよう。周り近所と協力して困難を乗り越えるより、強者への服従で問題を解決しようとする傾向が見られる。また、宗教信仰さえ人々の利益を確保する心理的な手段になっているような功利主義風潮は直接に社会の秩序を乱していないかもしれないが、地域社会の道徳と倫理を脅かし、人々の短絡思考、近視眼、物質尊重を助長し、人々のつながり、精神的な紐帯をおろそかにする。その結果として生じる社会関係資本の協力関係と信頼を破壊する弊害は察するに難くないだろう。

第 4 項 C 村における調査

(1) 文化行事に関する事例

調査地 C 村では、様々な伝統行事¹⁸¹があったが、紙幅の関係で本稿では聞き取り調査に基づいて、いくつかの文化行事に関する事例を取り上げ、更に整理しておく。

¹⁸¹ ここでの伝統行事は主に文化大革命時代に衰退し、改革開放後徐々に復帰した行事を指す。

事例1 調査地C村では、毎年、旧暦7月15日の‘鬼節’¹⁸²に様々なイベントが盛んに行われてきた。この日が来る前に「火紙」（黄色い紙）を用意し、木製の閻魔金印（梵語が刻まれている）を「火紙」に押し、あの世で使う紙幣（冥幣とも言う）を刷っておく。さらに、白紙で冥幣を包み、上に自分の先祖と何代目と名前などを書く。裏に「中元大会不孝子孫献上御笑納」と記す。冥幣を届けてくれる飛脚の役割を果たすのが道祖神である。‘鬼節’当日のたそがれに、村の一角で、冥幣及び酒などを供え、先祖に届ける。子孫繁栄と先祖の加護が代々続くことを祈願する。この日、家族全員が集まり、一緒に食事しながら先祖を偲ぶ。毛沢東時代に、「破四旧」¹⁸³というスローガンの下、このようなしきたりは迷信だというレッテルが貼られた。その後徐々に復活してきたが、近年になって、少子化と若い世代のほとんど出稼ぎに行っていることとあいまって、このような祖先を偲ぶ行事は徐々に行われなくなった。インタビューに対して、村民Eさんは冗談半分で「一家を養うため出稼ぎに行っている。生きている人さえ金に困っているのに、亡くなった先祖のことを考える余裕がない。確かに最初は少し後ろめたい気持ちはあったが、政府の宣伝している通りあの世なんてないんだから、やらなくても大丈夫だろう」と話した。

事例2 C村は「張」という苗字の村¹⁸⁴で、毎年、旧暦の十月に、自分たちの先祖を祭る大きなイベントがある。このイベントは自然村の単位ではなく、同じ族譜¹⁸⁵に所属するウ鎮ひいてはウ鎮以外の「張」という苗字の村も参加する。この祭祀活動は、「張」の苗字を有する男性が中心になって行われている。当日生きている羊、豚、鶏などを生贄として祖先を祭る。各族長が代表して挨拶する。内容は大体本族の歴史と伝統を紹介し、更に族規等の倫理道徳を強調し、勤勉などの美德を賞賛した後、各分野で活躍していて模範になっている者を表彰する。また、このごろ教育面では、昔功名を得た人を模範として、子供の教育を重視するようになった。少し前までは、大学（特に重点大学）に合格した人を奨励することで、教育の大切さを次世代に伝えている。さらにその年に男の子が合わせて何人生まれたか、家族が何人増えたかを先祖に報告し（女の子は含まれない）、最後に

¹⁸² 旧暦の7月15日は日本のお盆に当たる祭りである。この日に自分の先祖が帰ってくるのを待っている。そのため、先祖があので使っている‘お金’を燃やして送る。また、この期間は一族団欒の時期でもある。

¹⁸³ 文化大革命時代に北京の紅衛兵は「旧思想、旧文化、旧風俗、旧習慣」を打破する運動を行った。

¹⁸⁴ この村では同苗の村なので、一族即ち村民全員になる。一族のチームワークは地域社会を担うことになる。

¹⁸⁵ 中国における父系血縁集団である宗族が、系図を中心に宗族の男性の字、生辰、卒年、業績、家訓などを記載した文書である。女系の先祖・子孫は掲載されない。文化大革命のさなかには、「破四旧」運動によって、多くの族譜が焼却された。

新生男児全員に祝物を贈呈する。

以上の行事は皇権専制時代の思想と考え方が色濃く残っていて、時代に遅れている部分もあるが、祭りを通じて人々のチームワークを作るという農耕社会では非常に重要なことを村民同士の間で確認できた。水利施設の維持、田植えや稲刈りなど大量の労力を必要とする作業、また屋根の葺き替えや冠婚葬祭などの面の相互扶助、更にそれに伴って農村社会の基本的な秩序と倫理規範の維持には、祭りから発生した社会関係資本が大きな役割を果たしていたのも否めない事実と思われる。今後の中国の内陸地域社会でも、公共事業、冠婚葬祭、祭り、農業などの共同作業が必要になるので、社会関係資本の豊かな近代的な市民社会に円滑に移行していくためのプロセスを展望していく必要があると思われる。

事例3 昔楚の国であったC村における端午節¹⁸⁶では、粽と赤いマークのつけられた卵を食べる習慣がある。また、菖蒲を家に飾るなどの習慣以外、屈原を記念するため、「賽竜舟」（竜船の競争／ペーロン競争）というイベントも伝統行事として行われていた。C村の周りには、大きな湖の以外に、無数のクリーク（小運河）があって、「賽竜舟」に絶好な自然環境を提供していた。1988年までこの村では、自然村単位でチームを編成し、端午節の日に村民間で「賽竜舟」を競っていた。しかし、1989年の「竜船事件」¹⁸⁷以来、政府が「賽竜舟」に関する行事を全て禁じた。本来ならば政府が事件の真相を究明し、責任の所在をわきまえ、対策を立てて事件の再発防止を努めるべきだが、短絡的に禁ずる手段を取った。これにより、伝統文化の喪失、人的交流の機会を逃し、コミュニティ形成の場の欠如をもたらした。

事例4 C村では、旧正月（春節）に地域の組織のもとに、村ごとに「菩薩迎え」¹⁸⁸という習慣があった。五穀豊穰と無病息災などの願いが込められている。仏像を各村に二日間置き、村民がお参りに来る。夜は村の周辺にある邪気と厄害を駆除するため、暗闇の中

¹⁸⁶ 旧暦5月5日を端午とする風習は、紀元前3世紀の中国、楚で始まったとされる。楚の国王の側近であった屈原は人望を集めた政治家であったが、失脚し失意のうちに汨羅江に身を投げることとなった。それを知った楚の国民たちは、粽を川に投げ込み、魚たちが屈原の遺体を食べるのを制したのが始まりと言われている。端午当日は、野に出て薬草を摘み、色鮮やかな絹糸を肩に巻いて病を避け、邪気を払う作用があると考えられた蓬で人形を作って飾り、また、菖蒲を門に掛けて邪気を追い払うと同時に、竜船の競争などが行われていた。

¹⁸⁷ ペーロン競争のことで、二つ村の間にトラブルが起きて、挙げ句の果て、大規模な抗争に至り、結局負傷者が合わせて34人も出る（うち8人が大怪我）大惨事になった。ついに、武装警察が80人も出動し、二つの村を囲み、闘争参加者全員を逮捕した始末になった事件。（聞き取り調査によることである。この事件は新聞などの報道が一切なく、裏付けようがなかった）

¹⁸⁸ 旧正月の一日から、各自然村は決まっている順番にしたがってお寺から仏像を自分の村に担いで運ぶ、仏像を村の誰の家に置くかは事前にクジで決める。福は仏様と一緒に来ると信じるので、仏像が自分の家に来るように村民は積極的に対応している。

仏像を担いで村の巷を通ったりする（現地では‘参神’¹⁸⁹と言う）。「参神」が終わった後、仏像の前で会議したり、村の大きな行事を決めたりする交流の機会になった。決めたことを神前契約になるから皆必ず守ることにしていた。この行事は文化大革命が終わってからまもなく復活したが、迷信色彩が濃いととかく非難され、若者もこのような行事よりマージャン・賭博を好む。したがって、イベントに参加する人を組織するのは大変難しくなっている。こうして社会関係資本を維持する機会が失われていく。同じく旧正月に「竜舞」「獅子舞」¹⁹⁰がある。『W市県誌』（1994）によると「竜舞は昔から人々がめでたい日（春節）に竜に祈願し、五穀豊穡、無病息災を祈願する伝統行事である。主な道具は布、竹、草で作った‘竜’である。竜の長さは‘節’で数える。よく見られるのは九節竜、十一節竜、十三節竜で、奇数の方が吉とされている。また、竜の体内に蠟燭、提灯などが入れられた‘火竜’もある。夜間に鑑賞するのは大変壮観で、芸術性も非常に高いと言われている。こうした制作は人々の交歓の場となり、同好の士のコミュニケーションチャンスになり、また、指導者のリーダーシップを再確認し、人々のつながりを強めたのである。1990年ごろまで、竜舞も獅子舞も時代の発展とともに、人々の体を鍛える運動にもなり、動作は非常に変化に富み、形式を重んじるようになった。竜舞、獅子舞と同時に、武術、音楽、劇なども上演するので、貴重な総合的民間芸術である」と記述してある。調査地のC村は、1989年の旧正月に村を挙げて竜舞を行い、セットとして現れる獅子舞とも取り入れられたため、至るところで好評を得ていた。だが、出稼ぎ経済の波の中で、「發財致富」は村人の主な目標になりつつあるなかで、竜舞と獅子舞はこの地域では見られなくなってしまった。

(2) 事例分析

事例1から移行期の中国地域社会における人々の生命観と価値観が変遷しているのが見られる。儒家思想の代表者孟子の言葉「不孝有三、無後為大」¹⁹¹は今でもある程度中国人のエートスを支えている。数千年以来、中国人は後継ぎを生むことが人生の中で最も大きな責務とってきた。有限な生命は子孫がいることによって無限となる。そのため、現世でいくら困難があっても後継ぎの子孫がいれば希望もあり、やり直すことも可能だと考え

¹⁸⁹ 日本の巡り地蔵と似ている形。東京の多摩地区でも行われていた。

¹⁹⁰ 獅子舞は西域から伝わってきたという説がある。文殊菩薩の乗り物で、百獣の王とも言われている。民間では、獅子は幸運をもたらしてくれると信じられているので、めでたい日に獅子舞という形で祝う習慣が徐々に形成されてきた。

¹⁹¹ 不孝なことは三つあり、後継ぎがないことは最も大きな不孝である。出自『孟子离娄上』

ている。賀雪峰は、限りのある命に無限な意義が潜んでいる価値観を本体性価値¹⁹²と定義づけ、「伝統社会の中、中国農民の本体性価値は生命を継続させることにあり、農民たちの最も心配事は後継ぎのことである。後継ぎの問題が解決していれば富を求める、名誉を追求する欲求が更に湧いてくる。逆に言えば、子孫がいなければ、人生に希望と期待がなくなり、現世享樂を重んじるようになる¹⁹³」と指摘した。事例に出てくる村民は先祖と来世に対して虚無感を示し、現世をこそ最も重要視していると考えられる。たしかに、輪廻転生説とか家の永続性が官許の唯物論より合理的だというわけではないが、しかし、果たしてこの現世のことだけを考える唯物論は人間の信仰問題と本体性価値を解決できるだろうか。本体性価値の揺れによって、人々は物事を考える時に長い目で見るのではなく、近視眼的に、また刹那に、現世のこと、目先の利益だけに囚われてしまう。最終的には、村の永続性を願うことと反する結果になるだろう。

事例2から中国の地域社会において社会性価値¹⁹⁴への配慮が消えつつあることが分かる。社会性価値とは、人間は他人が自分をどう思っているかのことである。これは人々が付き合っているうちに生じるものである。社会性価値が認められてはじめて、村共同体では「輿論」（日本語では世間体）と中国でのいわゆる「面子」が道徳の尺度になっている。さらに言えば善と悪は公平に評価できるようになる。共同の先祖を祭るなどの文化行事は村民が社会性価値を再認識する行事でもある。また、現在‘祭祖’は強制的に禁止されてはいないが、中国の官許の主流の価値観と食い違うため、かなり抑えられていることも事実である。

事例3と事例4から政府が文化行事に対する態度と扱い方は文化行事の存亡に関わっていることが見える。中国地域社会では、宗教信仰に関わるものは、迷信だと決め付けられがちであり、菩薩、神様などを信じることは時代遅れの愚かな行為で、現代社会主流の価値観に合わないことだと思われる。今日では、地域社会の宗教と伝統的な価値観が壊され、共産主義というユートピアも破綻した。この移行期を生きる人々は新しい価値観が構築されておらず、精神世界は虚無になり、まさに岐路に立たされている状態である。この隙間に、煽られている消費主義が虚に乗じて入り込んできた。さらに、事例3と事例4

¹⁹² 賀によると、本体性価値は人間が自分の生命の意義を感じた、内面化した価値であり、心の中で自分との対話であり、ある種宗教的なものである。賀雪峰(2010) p. 117

¹⁹³ 賀(2010) p. 117

¹⁹⁴ 賀(2008) p. 50は、人間同士の付き合い中で、他人の評価を気にすることによって生じた人間行為の意義認識を社会性価値と定義している。

とで見えてきたこととわかるように、政府が短絡的に文化事業を禁止するような政策を打ち出してしまうことは、事態の一層の深刻化に拍車をかけたと判断できる。

第3節 考察

本章では、いくつかの事例調査を通じて、内陸地域社会における文化、教育、宗教、伝統行事を社会関係資本のあり方からとらえてきた。

これまでの研究により、中国の地域社会における社会関係資本は人々の間、歴史伝統、風俗習慣の影響を受けて長年の付き合いの中で形成してきた特殊な人間関係とネットワークであって、血縁と地縁関係を最も重視する中国伝統社会では、血縁と地縁共同体という認識の下、特殊な信頼関係が築かれてきたので、血縁、親縁、地縁が中国地域社会の社会関係資本の主要な要素である、という認識が学界で広く認められている。

A村における水利施設の修繕、ゴミ処理の問題などを見てきたように、互酬性の規範が形成されていないことが分かる。社会関係資本の厚いところでは、他者のために行動すると、直接その相手から返礼が得られなくても、いつかは他の人から自分も利益になることをしてもらうことができると期待できる。菅谷¹⁹⁵は、(地域に定着した)規範に従っているコミュニティでは、あわよくば他人を利用して利益を得ようとする機会主義を抑制し集成的問題の解決を効果的に行うことができる。つまり、一般化された互酬性の規範は自己利益と連帯を同時に実現させるものである。そして、これが他者一般に対する信頼を強化する、と指摘している。また、社会関係資本とは関係のネットワークから生じる現実あるいは潜在的な資源の集積であり、社会的交換の場でもある。機能主義社会学の学者Blau(2013)¹⁹⁶は交換のダイナミクスを考察し、個人は他人のために自発的に便宜を提供し、便宜を提供することで、相手の報いようとする見返りの義務を相手に負わせると分析している。経済的交換と異なり、社会的交換は交換価値を特定できないが、自分が他者から利得を得るためには、自分は他者に満足を与えねばならず、コストを支払わなければならない。A村の事例では、このような社会交換原則を遵守するのではなく、協力せずに利益だけを享受するフリーライダーが現れると、積極的に公共事業を推し進めて、社会関係資本を築くのが馬鹿らしいと思われる。そのため、社会関係資本は希薄になる。そんな

¹⁹⁵ 菅谷・金山(2007) p.13

¹⁹⁶ 彼得・M.布勞(2013)p.158

ると、日和見主義者が現れてしまい、囚人のジレンマ¹⁹⁷から脱出できない循環に陥るのも必然的な結果であろう。

フィールドワーク調査によると、調査地における伝統的な道德倫理が崩壊しつつあり、物事の是非、善悪、美醜の価値体系が動揺し始めている。人々の間に信頼が薄まり、村の輿論と道德も次第に失効しつつある。中国歴史上、組織が厳密で、制度が整っていた宗族文化は文化大革命のインパクトを受けてから、その勢力が益々衰弱している。宗族はすでにネットワークの資源として人々を動員する力がなくなり、新時代の地域社会の社会関係資本の要素として利用する余地がなくなっている。

さらに、社会全体の大環境も地域社会に大きな影響を与えていると考えられる。すでに序章で紹介した通り、近年では官僚の汚職と腐敗が続々摘発されている。このような中央の官僚から村幹部まで広範にわたる腐敗の現実には地域社会の道德と信頼の崩壊をも加速していると考えられるだろう。公平と正義の欠けている社会では道德の基礎もなければ社会規範のボトムラインも喪失するだろう。公平が確保できなければ、社会の不満と衝突が絶えることなく起きることになる。そうすると、人々は安全が感じられないばかりでなく、被害者になる可能性が十分ありうる。その段階では安定的な社会の構築は空中楼阁にすぎないと言っても過言ではない。本来なら政府の職務は経済を発展させるだけではなく、公平と正義の社会を維持することであると思われる。同時に、公平と正義を守ってくれるのはただ政府に頼るのではなく、様々な社会組織にも頼らなければならない。社会組織は社会自治能力を養う手段であり、同時にその結果でもある。たとえば、NGOのような社会組織は政府の管理管轄が不能なところと市場経済が効かないところで活躍し、社会生活を秩序よく運転させ、社会のリスクを回避できるので、健康な社会であるに欠かせない要素である。社会関係資本の稀薄なところでは、結局誰もが孤独な個人で弱者であり、無力を感じている。自治能力の弱いところほど、人々の責任意識が薄い。自分と密接に関わることを自ら管理しようとせず政府に任せてしまう傾向が強い。

B村の小学校の現状から見れば、内陸農村では近代化しつつある流れの中で、都市部のような教育が十分保障されていない。教育と社会関係資本の関係について、稲葉は、「社会全般に対する信頼度が高い国ほど、識字率がたかい。もっとも、識字率が高いからより

¹⁹⁷ お互い協力する方が協力しないよりもよい結果になることが分かっているにもかかわらず、協力しない者が利益を得る状況では互いに協力しなくなる、というジレンマである。各個人が合理的に選択した結果が社会全体にとって望ましい結果いわゆるパレート最適にならないので、社会ジレンマとも呼ばれる。

スムーズな意思疎通やネットワークの形成が容易になり、社会関係資本が高いとも考えられるので、両者の因果関係は定かではないが、両者に何らかの関係があることは間違いないだろう¹⁹⁸」と述べている。調査地でのインタビューと村民との対話内容を分析した結果、内陸農村では社会関係資本の欠乏と教育の不足がお互いに悪循環の因果関係になっていることがわかる。現在問題となっているのは、社会関係資本がかなり破壊され、非常に希薄になっているところに、これを断ち切って、そして何を呼び水として社会関係資本を再建することができるかである。そのほかに、現在の教育理念は社会関係資本にどのような影響を与えているかなどについても探ってみた。

C 村のケースから中国の内陸農村の地域共同体が機能しなくなりつつあることが観察できるだろう。従来、土地集約型農業生産が共同作業を必要とした背景に、結束力が非常に重要視されていた。祖先崇拜が色濃く残っている地元の祭りや様々な文化行事が一体感や帰属意識醸成の上で重要な役割を果たしてきた。産業構造の変化や人口の都市集中に伴って、こうした要素の重要性が低下していることは確かに避けられないかもしれないが、中国の内陸地域では、伝統的な社会が果たしてきた機能と近代的な社会関係資本とは非連続的なものとして受け止められ、前者の衰退を後者でいかに補っていくべきかという連続的な視点が希薄なように思われる。言い換えれば、本来なら伝統的な共同体が果たしてきた機能は政府による社会保障制度などの整備や市場による保険商品の普及によって徐々に代行されていくべきであるが、そのシフトは様々な原因で円滑に進んでいない。

第4節 小 結

本章では、移行期における中国の内陸農村を中心に質的に調査した。調査資料に基づき、地域社会における人々の価値観、文化（教育）、宗教信仰に対する意識と認識がどう変化してきたのかを社会関係資本の視点から分析した。

調査地における文化と社会関係資本の衰退原因は、まず数十年以上階級闘争と権力闘争が絶えず繰り返され、動乱の歴史が続いてきたため、人々は他者を簡単に信じるどころか、最初から人を疑う目で他者を見るのがいつの間にか習性になってしまった。社会関係資本における最も大切な信頼という要素が一旦失われると、徐々に協力せずただ乗りの方が

¹⁹⁸ 稲葉 (2015) p. 58

得だという認識が広がり、人々の間にお互いに不信感と非協力的な姿勢が増幅していくという囚人ジレンマ現象が出現する。ひとたび破壊されたネットワークと信頼を再構築するのは至難の業であろう。それから、市場と政府の失敗を補完するための第三の要素である「社会」が長期にわたってあまり機能していないのも大きな原因だと思われる。中国では「市民社会」と社会関係資本との関係の重要性がまだ認識されておらず、一部の学者、例えば許紀霖¹⁹⁹の、「『現代中国の実態は民はいるが、市民はまだ育っておらず、市民社会はまだ成り立っていない』」という指摘はあるが、まだ社会全体の共通認識になっていない。許は「文化は『魂』であり、『魂』は『体』に依存しなければならない。『体』となるものは国家ではなく、社会であるべきだ²⁰⁰」と指摘している。『社会』が負うべき任務を政府にまかせしまうと、社会関係資本が栄養不足で健康に成長できず、存続の土壌がますます痩せてしまうだろう。

中国の地域社会における社会関係資本の現状を改善するには、すべてのことを政府という公の力に頼り切るのではなく、民間の力を発揮しなければならない。フィールドワークでの調査でも分かるように、一般民衆や政府の役人から一部の研究者までの間に、政府の管理監督が不十分であるという認識が広く存在しているが、筆者は今日の状況は、ある意味で言えば、政府の管理が社会の隅々まで手を出したのに起因しているのではないかと思われる。また、言うまでもないが、社会関係資本の成立の前提は、憲法に書いてある結社自由などの公民権利が保障されていることである。さもないと、人々はデュルケムが提唱した有機的連帯²⁰¹の実現が難しいだろう。以上論述してきたように、移り変わりの激しい移行期にある中国の地域社会において問題となっているのは、信用社会を築くことが困難で、相互不信が高まり、社会関係資本が非常に希薄になっている点にある。以上を現時点における小括として、章を閉じることとしたい。

¹⁹⁹ 許(2011)

²⁰⁰ 許(2011) p. 285

²⁰¹ デュルケム(1989) p. 215

第二章：地域社会における娯楽文化——賭博蔓延化に関する事情²⁰²

前章で地域社会の文化状況（教育を含む）と伝統文化（宗教信仰を含む）・行事の実態を考察してきたが、伝統行事などに携わることが困難になった結果、それに取って代わるものが自ずと出てくるだろう。最近の新聞などでは出稼ぎ労働者が一年間汗水たらしてこつこつ蓄えたお金を賭け事で失ってしまう報道がよく見られる。調査地ではよく見られる麻雀などのギャンブル類、いわゆる賭博がそれである。これらの報道は、近年地域社会における賭博の蔓延現象を如実に物語っていると思われる。

論ずるまでもないが、賭博の流行は社会、経済、文化、歴史など様々な要素に関わっていて、近年、地域社会における賭博の蔓延、参加者数の増加、賭博の金品額の巨大化などは、既に農村社会に大きな影響を与えている。賭博は社会の投機行為を助長し、働かずに富を得る社会風潮を醸成させてしまう。さらに、多くの個人生活または家庭に悪影響を与えるだけではなく、地域社会における個人または集団相互の関係を規制している社会的規範を乱し、地域社会の社会関係資本を大いに壊していると考えられる。

第1節 賭博の定義

賭博の概念について様々な論議があるが、以下先行研究を踏まえ賭博の定義について触れてみる。

賭博の概念はまず社会文化的な意味の‘賭博’と法律の意味の‘賭博’に分けられる。社会学辞典（2010）によると、賭博は広く言えば博打（ばくち）、博奕（ばくえき）、賭け事（かけごと）、ギャンブル（Gamble）、金銭や品物などの財物を賭けて、偶然性の要素が含まれる勝負を行い、その勝負の結果によって賭けた財物のやりとりをする行為の総称である。人類の歴史では社会生活に広く存在するサブカルチャーの一種である。

賭博の歴史と起源について、日本の学者²⁰³増川は「賭博の起源はト占、神判、スポーツに求めることができる。人類はまだ階級分化が行われていない時代から、部族の運命——豊穰や凶作、疾病、災害、狩猟や漁撈の成否——を神や精霊に祈願し、神の意志を予知する行為としてト占を行った。また、特異な自然現象も神意の表れとして感知する方法と

²⁰² 張（2016）p. 195（本章の内容と『21世紀東アジア社会学』で発表した論文の内容は重なっている部分が多い）

²⁰³ 増川（1983）p. 10

考えられた。これらの行為は宗教的な祭儀の形式をとり、神意を敏感に受け取り人々に伝える媒介者として巫女や神官が生まれた。すべての事象が神や精霊の支配と考えられた時代には、未来を予知することによって、災害を少しでも防止し、豊穡の利益を得たいというのは最も重要な願望であった。将来を感知することによって利益を得ることは、不利益な結果になったにしても、この試みは‘賭’の萌芽と言える」と述べている。また、増川は「神判も神の意志の表徴を受け取る行為であった。古代において裁判は宗教儀式であり、決定は神の意志に基づくものであった。「裁き」は判決の「結果」——利益あるいは不利益——を導きだすための‘賭’であった。神判にはト占と同様に多種多様な用具である動物の骨、木の実、貝殻、小石、植物の葉等々が用いられた」と賭博の歴史と変遷について重要な指摘をした。

戈春源によると、「現在、一般的な言い方として賭博は不当な娯楽活動の一種である。参加者が認めている規則によって、勝ちと負けが決められ、それによって投入された金銭あるいは質などを参加者の間に移転させる行為である。モチベーションの如何に関わらず、勝負によって富と金銭の獲得、喪失と関連させる行為は賭博と言う²⁰⁴」と定義づけた。賭博は常に金銭目的で、大量の金品を対象としている。社会の生産活動と人間関係に大きな影響をもたらすため、歴史の中で、ほとんどの場合は政府側の取り締まり対象であった。現在の中国の『刑法』第三百零三条では「営利を目的で大勢の人を集め、賭博する、もしくは賭博場を設けることは賭博罪になる」という司法解釈での‘賭博’が法律上の賭博概念である。一方、営利を目的とせず、少量の金品を賭け、賭博罪にはならないほどの娯楽活動は法律上の賭博ではないが、広い社会文化的な意味では賭博行為である。

以上、一般的に法律上の賭博を狭義な賭博と定め、社会文化的な意味の賭博を広義な賭博と定義することができる。たしかに実際の生活では、この二種類の賭博を判然と分けられない場合もあるが、本稿では便宜上のことを考え、広義の賭博の定義、すなわち、一般的に行われている小規模の賭博から金銭目的に行うことをも含み、すべての行為を考えることにする。

²⁰⁴ 戈 (2010) p. 5

第2節 調査地の賭博現状と特徴

調査地で最も親しまれている賭博の方法は「麻雀」、「二五八杠」、「炸金花」、「牌九」²⁰⁵などである。また「九億农民八亿麻，还有一亿在观察」（9億の農民の中の8億が麻雀をやっている、残りの一億は‘観戦’している）という流行り文句がある。この流行り文句はやや誇張的な表現であるが、ある意味で地域社会に蔓延っている賭博風潮を反映していると思われる。

中国の法律では澳門特別行政区以外での賭博は違法な行為にあたる。そのため、賭博は一般的に隠れているところで行われていて、隠蔽性がある。また、参加者は自分及び家族のことを配慮して人前で正式なインタビューはなかなか受け入れてくれない。筆者は知り合いを通じて、賭博現場の実地調査²⁰⁶を行う以外に、公安局、検察院及び裁判所の内部資料²⁰⁷を閲覧することができた。W市の検察院の2009年から2013年上半期の資料によると「農村における賭博罪はここ数年右肩上がりに増加している。賭博が原因で家の全財産を失ってしまい、闇金融の高利貸しを抱え、家族がばらばらになったケースも少なくない。近年賭博が刑事犯罪の大きな誘因にもなっていて、農民の生活生産に大きな影響を与え、家庭の崩壊を引き起こし、社会の治安秩序を大いに乱している」という。同資料によると、2010年から2013年上半期まで、農村の賭博犯罪件数は合計24件、関わった人数は138人、書類送検されたのは22件、121人である。有罪判決を下されたのは22件、121人までに上った。

以上、地域社会における賭博の状況を政府側の資料に基づいて概ね説明したが、以下では、フィールド調査に基づき賭博の詳しい状況と特徴について見ていきたいと思う。

第1項 賭博範囲の広範化と職業化

調査対象地では賭博は営利を目的とする賭博団体が村民を集め、賭博への参加を呼びかけるケースと、営利を目的とせず小額とはいえ金品を賭ける不適切な娯楽活動が共存し

²⁰⁵ トランプ或いは麻雀の骨牌で賭け事する賭博の一種である。プレイヤーと胴元の間配分されたトランプ（骨牌）で点数によって勝負する。

²⁰⁶ 賭博に関する調査実施期間は2013年の2月3日から2月23日まで。中国ではこの期間において、出稼ぎ農民工が殆ど‘春節’（旧正月）のため出身地の農村へ戻り、家族と団欒する貴重な時期でもある。この期間は多くの人にとって、休みの時間でありながら、遊ぶ時間でもある。この期間の村民活動を観察する一方、アンケート調査も行った。アンケートの内容は付録として巻末に添付している。

²⁰⁷ W市人民法院卷宗、日本の地方裁判所訴訟資料にあたる。

ている状態である。まずあげられるのは、村の全人口に占める参加者の割合が高い。成年男子の八割近くがなんらかの形で参加しているうえ、既婚女性（70歳以下）の半分以上も参加している。とりわけ近年では女性の参加者が急増している傾向が見られる。2010年賭博罪で逮捕された女性の容疑者は3人しかいなかったが、2011年は15人になり、2012年は28人にまで増え、約10倍も増加した。一方、参加者の年齢を調べると、18歳以下は全体の16.4%を占め、18歳から55歳までの割合は67.1%でもっとも高い比率である。55歳以上の比率は16.5%である。未成年者から高齢者まで各年齢層の人が参加している。18歳から55歳の割合が示すように、人生で労働に最も適している時期を、賭博に浪費していることが分かる。更に、職業別に見ると、農業を営む農民から農村在籍のままの商売者まで、町工場の経営者から村の幹部まで、小学校の教員から村の衛生院の医者まで、定年になった元国有企業の社員から現役の鎮役所の職員まで、職業は広範囲にわたっていることが調査で分かった²⁰⁸。

また、調査地では、数多くの賭博参加者中で技術や能力が高く、運も強い人が徐々に賭博を職業とするようになった。調査中いわゆる賭博のプロと何人も会った。これらの人は基本的に農作業や出稼ぎなどに関心がなく、主な時間と精力は賭博に注いでいる。遊び相手がないときに自分で練習したり、賭博の技を研究したりしている。調査結果によると、三つの自然村ではプロの賭博者が12人もいる。これらのプロは賭博の発起者として、賭博の場所と時間、金品の額、規則を決めている。そしてまた、いかに公安局の取り締まりを避けるかについて様々な対策を立てる。B村のZ4は、以前、兼業農家であったが、賭博の技術が高い上に、地方政府部門に親戚がいる安心感も手伝って、早くも2005年から賭博を職業にした。筆者との会談の中で、Z4は自分の新築の家の建築費用はほとんど賭博で稼いだのだ、と自慢げに話していた。2011年に賭博で儲かったお金で車も購入したが、2012年の旧正月に賭博で20数万元を負けてしまったため、車を質屋に売ったという。Z4は、調査地の賭博業界では、規則をきちんと守っていて、インチキな事をせずに、人柄及び‘賭博柄’が評判になるほど、‘声望’のある賭博者でもある。このように、小村ながら職業化できるほど賭博が流行している。以って、従事者の数とともに農村社会における賭博の盛行が理解されよう。

²⁰⁸ W市人民法院訴訟資料による。

第2項 賭博の経営化

地域社会における経済の発展とともに、賭博の金品額も次第に高くなってきた。巨額な利益駆使の下、賭博場所を提供する経営者と‘賭博会社’を経営する人まで調査地で現れた。言うまでもないが、誰しもこのような仕事ができるわけではない。A村のJは商売で大金持ちになった後、長年築いた人脈などを利用して賭博場を開いた。Jは経営者でありかつ自身も賭博の参加者である。Jが経営している賭博場には麻雀のオートマシン4台以外に、‘二五八杠’の開催台も設けている。夫婦で賭博場を管理すると同時に、麻雀や‘二五八杠’にも参加している。同じA村では、90年代に窃盗罪前科のあるKは、賭博の技術も高い上に、度胸もあり、さらに地元の‘混混’（チンピラ）と密接に関わっているので、3年前から賭博会社を作った。「〇〇実業公司」という名前をつけたが、ネーミングと実態は異なり、会社の実態は賭博を組織する団体である。

第3項 女性の賭博進出

フィールド調査によると、麻雀をやるのは女性が圧倒的に多いことが分かった。麻雀や‘二五八杠’に参加している女性は徹夜でやる場合もあり、食事の準備、洗濯などの家事や子供の世話などはまるで自分と無関係のようである。三つの調査地のいずれでも見られる現象であるが、若い母親は幼い子を抱えたり、周辺で遊ばせたりして、本人が賭博に興じている光景も観察した。B村での調査時期は旧正月で丁度真冬だったので、寒さで泣いている子供がいた。賭博に参加している女性Lが子供にお金を投げ、「好きな食物を買っていいから、とにかく邪魔をしないでくれ」と子供を注意した。C村の女性Qは、夫の職業が大工で出稼ぎ中、子供が二人いる。中学生の子供は週一回の休みにしか家に帰らないが、自分は賭博に参加しているので、子供と交流の時間が取れず、お金を出して自分で食事するように命じてしまう。また、賭博などに能力のある女性で、直接賭博に参加せずに、賭博の人員を集め、賭博場を運営し、高利貸しを通じて儲けている例もある。B村の逮捕された女性Rは2011年の旧正月、「九当十」²⁰⁹という高利貸しで不当な利益を得、約8万円も獲得した。

²⁰⁹高利貸し的一种である。例えば、一万元を借りる場合、その場で9千元しかもらえない。つまり当日の一割の利息が天引きされるわけである。



(村の売店の深夜 ‘炸金花’、麻雀、‘二五八杠’各一卓

2015 年1月16日 筆者撮影)

第4項 賭博の場所と方式

20世紀の末まで賭博の場所は特に決まっておらず、非常に恣意的だった。近年では雑貨店などの商業施設が賭博場になり始めている傾向が見られる。雑貨店のオーナーは商売のために賭博者を集め、できるだけ多くの客を自分の家に招くように奔走している。個人経営の麻雀室ではお茶を提供する以外に、客のニーズに応じてカップラーメンや食事を出している。旧正月には麻雀の参加者が多いため、早めに行かないと席がなくなる場合もある。このような場合、麻雀の見物人になるか、トランプを使って‘炸金花’するかになる。携帯電話の普及に伴い、ここ数年参加者の殆どは事前に‘麻友’²¹⁰と約束してから席を予約する。正確な営業時間は決まっていないが、大体午前10時から午後6時までである。もちろん深夜まで、さらに徹夜してやるケースも少なくない。

²¹⁰ 一緒に麻雀をやる友達、現地では麻友という略称を使う。



(深夜までの‘二五八杠’ 2015年1月18日 筆者撮影)

金品額が高額の場合、或いは賭博会社関わっている場合、場所の選択はかなり違ってくる。大体、交通の不便な辺鄙な農村、山林の空き地、農村婚葬宴会場などが主な賭博場になる。2010年から2012年の案件によると、辺鄙な村の民家か林の中の小屋でやる傾向が見られる。要するに主に警察の車が入りにくく、すぐに分散して逃げられるところが好ましい。調査地のB村とC村に入る道は一つしかなく、途中で必ず通る‘哨所’がある。‘哨所’には見張役が配置されていて、常に誰かが見張っている。怪しい人とか警察らしき人物が来たら、直ちに電話で通報して逃げるように知らせる。B村の周りに湖があるので、数年前警察当局の取り締まりを避けるため、船を使って湖の中心部で賭博したこともあった。

賭博に場所を提供する農家は‘抽水’²¹¹（本来の意味は水を吸い上げる、現地では隠喩の言い方で美味しい汁を吸う意味である）という形で営利している。賭博に必要な場所、机と椅子以外にお茶とご飯を用意する場合もある。毎局‘抽水’が可能なので、かなりの

²¹¹ 胴元から局ごとに儲かった金を5%から10%を取ることである。

収入になる。B村での観察によれば、少なくとも一日千元ぐらい、多いときには5千元にも達している。ただ場所、お茶、食事ぐらいを提供するだけで、何十倍も利益が得られるので、村人は競って賭博場を提供する場合もある。

賭博の方式は、長い歴史の中で時代とともに変化してきた。現在主な方式は麻雀、二五八杠、炸金花、牌九などがある。聞き取り調査によると、「二五八杠」がもっとも人気が高い。これはおそらく「二五八杠」の遊び方と関係している。「二五八杠」は麻雀の骨牌を使って、参加者それぞれに骨牌が配られる前に、おのおのの前にお金を出しておく。胴元から二枚の骨牌を手に入れた後、骨牌の点数を計算し、胴元の点数と比べて勝負する。胴元より高ければ、自分の出した同額の元金がもらえる。逆の場合であれば出したお金は全部胴元のものになる。これらの賭博方式は規則が簡単で、分かりやすい。勝負の決定も早いし、参加人数の定員もなく、一斉に多くの人に参加できる。また、毎回金品の額は自由に決められ、かつ刺激感も強い。総じて言えば、地元の老若男女にとってもっとも親しみやすい方法であるという。



(除夜に徹夜して「二五八杠」をやる 2015年1月19日 筆者撮影)

(中国は一般的に旧暦で主月を迎える)

第5項 賭博会社の進出

調査地域のB村とC村では、‘賭博会社’が数人を派遣し、‘社員’が車あるいはバイクで村に入り、村人を組織して賭博を始める。参加人数が少ない時には、様々な手段を通じて多くの人を惹きつけようとしている。例えば、最初はわざと負けたり、数人の社員同士でやったりして参加者の意欲をそそる。時には、参加しなくてもただ賭博会場に行き、周りで見るだけでも100元の現金がもらえる。このように、賭博会社の人間が人気を集めるためにいろいろ工夫している。

観察とインタビューによると、調査地に進出した賭博会社の経営者はほとんど賭博のプロであった。多くの場合、経営者は地元のチンピラと親密な関係を持っていて、彼らを一種のガードマンとして雇っている。現地ではこのようなガードマンを‘馬仔’と呼んでいる。‘馬仔’のほとんどは無職のチンピラで、仕事内容は賭博現場の安全性を確保することである。ここで言う安全性には二つの意味が含まれている。まず、常に用心深く見張って、警察の不意打ちを厳重に警戒すること。前述したように、村に入るため必ず通る所で見張って、不審な人が現れたら直ちに報告する。次に、賭博現場の秩序を守ることである。何かトラブルでも起こったら暴力で威喝する。例えば、会社の経営者のインチキまたはいかさま行為が見破られた時とか、貸し出した金の返済を催促する時は彼らの出番である。

賭博会社の経営者になるには二つの必須条件がある。まず、ある程度経済力がなければならぬ。経済的なリスクを負う能力がなければ信用されない。次は地元当局、特に公安部門にコネが必要である。賭博組織者と参加者が万が一捕まえられたら、頼み込みの力が必要になってくる。ときには事前にいわゆる保護費(日本のショバ代にあたる)を払えば、チェックが入る前に警察内部関係者が電話で通報してくれる。

賭博会社の儲かる手段は、前述したルールに基づいて‘抽水’を取ること。春節前後の参加者の多い時、一日の‘抽水’手数料だけで5000元も儲けられる。そして、もう一つは‘放碼’²¹²という地元の高利貸しで儲ける。負けた人はお金を取り戻したいという心理が強く働いていて、元金がなくて困っているところを賭博経営者が金銭を貸してくれる。闇金融と同じように、利息が日割り計算で10パーセント以上かかる。中国の法律では不法な高利貸しは返さなくても良いが、賭博の場合、借りた人はヤクザやチンピラを恐れているので、たとえ家売っても借金は返さなければならない。以上述べた通り、‘抽水’とい

²¹² 賭博場で他人に金品を貸すこと、高利貸しの一種の俗称。

う手数料と闇金融の高利貸しという二つの手法で儲けている仕組みである。

第3節 賭博参加者の心理と社会要因分析

第1項 参加者の心理・動機分析

以上、調査地の賭博実態の特徴について述べてきたが、次は、賭博参加者はどのような心理で参加しているのかについて、聞き取り調査、面談調査と観察に基づき、以下に整理した。

(1) 暇つぶし型。

これはある意味では娯楽性を持つ賭博の歴史と関係している。昔は祭日など、めでたい日に予告なしの座興として行われた。例えば、科挙に合格した人が凱旋里帰りした時に、「博劇」などの雰囲気合わせた娯楽がよく上演された。中国古代以来、特に宮廷、官僚等の貴族は遊ぶことに困り、賭け事をはじめた。文学作品『紅樓夢』では何回もそのようなシーンに出会う。現在の農村社会では、高齢者が寂しい日々を慰めるため、または、孤独感から脱出したいためとも言えるが、何人かの知り合い仲間でする。彼らは、麻雀を日常生活の一部と思う気持ちで参加し、金品が小額なためもある、参加目的はあくまで娯楽にある。フィールドワークの調査では、村民は麻雀をやることで脳の働きを促進できると思っている人が少なくない。知り合い同士が楽しく喋ることができるし、長くて退屈な時間を潰すこともできるから、人々に好まれるのも不思議ではないとインタビューを受けた一人が話した。

(2) 見栄のため。

近年、にわかには豊かになった村民は車の購入、高い家の建設、豪華な宴会の開催などで面子を張り合う以外に、自分の見栄を張る場所となるのが賭博場である。数千元、数万元を気前よく出し、大金を負けても平気を装って、自分は金持ちであることを他人に見せびらかし、経済力において自分が他人より優位な立場に立っていることを証明したい。言い換えれば、虚栄心が働いていると考えられる。村の一員であると考えより、面子を重視することを良しとする風潮が高まっている。この心理状態は少し理解しにくいかもしれない

いが、賀雪峰はこれについて「村落コミュニティの住民が未来に対して安定した予期が欠如すれば、短期消費を好む傾向になる²¹³」と指摘した通り、村民同士は家を建てるような長期的予期より、食べもの、着ている衣服等の使用物、遊びの内容などの短期消費で他者と競争しあって面子を張る。アメリカの心理学者マズローの欲求五段階説を借りて言えば、人間は基本的な欲求が満足した後、尊厳欲求(承認欲求)の満足が課題になる。だが、承認欲求が行き過ぎると、調査地で見たと同じように周り近所に認めてもらうために無理して高望みする豪華な宴席、賭博で大金を負けても光栄だと思ふ異化現象が現れる。いわゆる面子競争のために、たとえば前借りしてブランドの車を買ったり、必要以上に家を建てたりしている。調査地のA村では、家の建築ブームが2007年で一段落となったため、家を建てることを通じて自分の面子を立てることは既に時代遅れになり、今の時代はどれほど遊べるかが能力の有無を判定する基準の一つになっている。賭博などの遊びに参加せず、仕事ばかりしている人間はかえって無能な人だと見なされていると調査地の多くの人たちが思っている。

(3) 人柄誇示とコネ作り。

これは都市部ではしばしば見られるケースであるが、農村社会でも存在している。人が賭博に参加するのは、他人の金銭が目的ではなく、賭博を通じて自分の人柄を相手に認めてもらうためである。台湾作家柏楊は中国人の麻雀心理について「一人の性格と人柄は普段ではよく分からないが、一緒に麻雀をすれば、全てが分かるようになる。例えば、三局まであがらなかったら、他人を咎めたり顔色が悪くなる人もいれば、ポンもできなければチーもできないときに怒り出したりする人もいる。さらに椅子の高さとか蛍光灯の明るさとか他人の咳声などにいちゃもんをつけたりする人もいる。逆に終始一貫平常心で対応する人もいる。このように、人の気質と人柄は麻雀での振る舞いで判定できる²¹⁴」と麻雀をやる人の心理と行動を描いた。地域社会では麻雀などの賭博は他人とのコミュニケーション手段であり、友達を作る方法でもある。言い換えれば、賭博活動はある意味で言えば人間関係を促進し、交際を広めたりする機能を持つようになった。同時に、場合によって、この関係を利用してわざと負けて相手の機嫌をとることもしばしばある。さらに、近年では政治とビジネス世界では、既にコミッション(手数料)や勝敗の金品やりとりが賄賂手

²¹³ 賀(2010) p. 120

²¹⁴ 柏(1985)

段として使われている。したがって、コネのためにプレーする場合、タイミングよく負ける技術は非常に重要であると言われている。賭博はこのように倒錯した負の社会関係さえ生じてしまう。

調査地では、「幹部要想富，麻将是条路」（幹部が金持ちになりたいのであれば、麻雀が一つの方法である）という流行り文句がある。社会地位のある官僚の夫人が麻雀で金を儲けているケースが時々見られる。決して彼女が他の参加者より技術が高い、また常に運が良いというわけではなく、麻友’は夫人たち（正確に言えば、夫の方）に頼みたいことがあるだけのことである。そのため、夫人たちのリーチを待ち、タイミングよくロンをさせる。つまり、‘麻友’らが自らわざと負けることによって彼女の機嫌を取り、賄賂を送ることもできるという、正に一石二鳥である。このような娯楽形式は権力者に賄賂を受け取る便利かつ合法的な手段を提供しているとも言える。

(4) 金儲けの手段。

賭博は純粋なゲームではなく、本質は‘合理的手段’を通じて他人の財産を自分の物にする賭け事である。調査地 A, B, C 三つの村では、なぜ賭博に参加するかという質問に対して、「娯楽のため」と「金儲けのため」両方を選んだのであるが、やはり金儲けという目的がマイナス的なイメージがあるために、素直に自分の本音を吐くのを控えているようである。だが、そのなかに職業化された賭博者は目的がもっとはっきりしている。A 村の H さん（38歳）への聞き取り調査によると、「賭博の金品が小額だとつまらない。刺激感がないから、やる気が出ない。お年寄りではあるまいし、我々若い世代の人たちは皆金品が高額なほど好ましいと思っている。金品額が小さければ若者は誰も参加してくれない」と話した。こうなると、賭博金品額が次第に増加していき、一晩で数万元を手に入れた人もいる。もちろん、逆に巨額のお金を負けた人もいる。強烈な刺激のもとで、射幸心と投機の心理が強まり、自分だけが儲けられると思ひこみ、賭博で富を得ようとする。経済学では「行動ファイナンス」という学術用語がある。それは、人間が合理的存在であるという前提を否定し、様々な感情的バイアスがかかった中で、金融行動の意志決定を行っているという考えである。だからこそ、統計的に負けると分かっている競馬やパチンコ、賭博にも、自分だけが勝てると思って手を出してしまう。まさに賭博に参加する人間の僥倖心理と同じように、自分だけは負けない、勝てる信じ込む傾向にある。更にこれらの人は自分をコントロールする能力が比較的弱くて、負けたら元金を取り戻したいので、結局高利

貸しに頼らざるを得ない。挙句の果ては、値打ちのある物を質屋に入れたり、自分の家を売ったりすることも珍しくない。場合によっては自殺とか凶悪な犯罪に走ることもさへある。このように人々は賭博をゲームとして楽しむのではなく、収入の手段、巨利を追及する目的のために参加している。



(ある賭博者の家の‘春聯’²¹⁵ 2015年1月18日 筆者撮影)

(5) 賭博組織者の投機心理

賭博経営者を見れば、賭博を組織する者として莫大な実利に駆られ、法律を踏み躪ることを恐れず、様々な手段で人員を集め、賭博への参加を呼びかけていることがわかる。賭博会社であれ、店のオーナーであれ、これらの賭博を組織する集団、個人は利鞘を稼ぐため懸命に奔走している。前にも触れたように、2011年から賭博会社というべき組織が設立され、農閑期、特に旧正月の間に、毎日数人を村に派遣してくる。最初はエビでタイを釣

²¹⁵ 中国では、旧正月に門や入口の戸に貼るめでたい対聯。上の‘春聯’の意味は、(右) 矢鱈にポンやチーをしても来る牌はすべて四君子、(左) ロンもツモも全部チンイツである。(上) 賭けるとなると必勝。

るように、人の射幸心を利用して村民を惹きつける。その後金品の額が増大するにしたがって、賭博に参加する人の心理状況のバランスも崩れていく傾向が見られる。賭博の特徴の一つは、所謂、‘運’が回ってきたら短時間でぼろ儲けできること、そして、汗を流して稼ぐより苦勞せずに済むことである。消費享樂主義の価値観の下で、多くの人がこれに嵌っている。賭博経営者及びプロの賭博者との面談調査を通して、経営者のみならず参加者も賭博を通じて一晩で長者になり、物質的な享樂のため最大限の経済基礎を作りたいと考えていることが分かった。典型的な例として、A村のHさんは賭博で大量のお金が儲かってからすぐ車を買ひ、まるで自分が実業家のように見栄を張っている。こうして地味な勤勞精神が徐々に消失し、自分だけが儲かるのを良しとする風潮がはびこるとともに、徐々に地域社会の連帯感が失われつつある。

第2項 賭博蔓延の社会要因分析

農村の賭博問題が今日の状態まで発展して来たのは様々な要因が絡んでいる。歴史から見れば、遠い昔から賭博はすでにサブカルチャーとして存在していた。王李娜が「賭博は夏朝から始まり、既に数千年にわたってきた。史書の記載では春秋戦国時代に‘鬪鷄’と‘六博’などがあった」と賭博の歴史について述べ、更に「賭博は社会のサブカルチャーとして、歴史伝承性があり、時代と社会制度を超える性格もある²¹⁶」と指摘した。賭博問題に歴史の原因があることは否めないが、それだけでは問題説明にならないと思われる。やはり、現在地域社会における賭博の蔓延状態の背景には、なにか根本的な原因が潜んでいるのではないかと思われる。以下では、アンケート調査に基づき、賭博の背景にある社会的な要因を分析してみる。

(1) 経済と時間の余裕

改革解放以来、特に近年では、中国の経済が目覚ましい発展を成し遂げた。もちろん貧困地域は依然として残っているが、十年前、十五年前と比べればすこぶる底上げできたと思われる。農村の経済が豊かになるにつれて、生活水準も高まってきた。この経済の発展は賭博に一定の経済基礎を提供したとも言えるだろう。農村社会の消費支出としての衣食住の中で、もっとも大きな支出は家を建てること。調査地では2007年12月時点で、建築して

²¹⁶ 王(2008) p. 24

から8年未満の家が全体の84%を占めている。つまり、大部分の農民は人生の中で一番金のかかることはすでに終わっている。また、時間の面において、調査地の三つの自然村ともコンバインなどの農業機械を導入した家が増えた。機械で苗を植えたり、農薬をかけたりして、最後にコンバインで収穫するようになった。こうして、今まで農作業に必要な時間を大いに節約できるようになった。一方で、農村地帯は工業化と都市化が遅れているので、近くに余剰労働力を吸収する仕事先が少ない。次項で述べるように文化活動の場所・施設もなく多くの農民は時間と経済の余裕ができたが、働ける、活動できる場所が少ないことは現状である。

(2) 消費方式の変化と精神生活の欠如

アメリカの心理学者マズローが提唱した人間の欲求段階説を借りて言えば、中国の農村社会における人々は基本的に第一段階の生理的な欲求は満足できているが、現在は更に高い段階にある文化生活と精神生活を期待している。三つの調査地とも、健康な村民文化活動はほとんど空白に近い状態である。「農閑期と旧正月の時間の使い方」に対して、テレビを見る割合は58%で、もっとも高い割合を占めている。「寝る」と答えた人は46%で、「隣人の家へ行ってお喋りする」と答えたのは44%を占めている。調査対象の中で、農村地域では都市のようなショッピングモール、映画館、遊園地、公園などのような施設がないため、遊びようがない。識字率などの文化素養の関係でテレビを見るしかない人もいて、積極的に本や雑誌や新聞などを読む人が非常に少ない。A村のMは「現在ドラマは若者向けの内容が多くて、見るに耐えるものが少ない。だが、ずっと寝るわけにもいかないし、隣人同士は何十年も付き合っているので話の種も尽きた。遊ぶ手段としてやはり一番頭に浮かんでくるのが賭博である。賭博に参加しているうちに、時間はあっという間に過ぎてしまう」と話した。同村のNは「十五、六年前までは、農閑期に‘採茶劇’（地方劇）を練習していたから、機会があれば行政村の舞台で‘採茶劇’を演じ、村民を楽しませた。各祝日に異なる伝統行事があったので、余暇の過ごし方は充実していた」と自分の幼い頃の記憶を語った。村民P（定年退職した元小学校教員）は「今は農村社会における伝統的な民俗文化が衰退して、どうも歪んだ文化的価値観が主流になったような気がする」と嘆いた。調査に協力してくれた人の中の約6割強が「もしより有意義な文化活動があれば、賭博に参加しない」と答えていた。

(3) 伝統社会の価値観の崩壊、文化失効

賭博が蔓延したのは伝統の風習と価値観の変化も大きな原因だと考えられる。改革開放後、農村社会でも現金収入が必要になり、特に近年では、金銭至上という拝金主義の雰囲気はいつの間にか著しくなった。今まで農村社会の生活は、儉約や質素が主流の考え方だったが、現在の社会風潮では、次第に消費主義に取って替わられつつある。特に出稼ぎなどで都会に出ていった人が目の当たりにしたのは自分の生活環境とまったく違う世界である。これらの現実はずらず知らずのうちに各自に内面化し、村人の価値観を少しずつ変化させてきた。A村での聞き取り調査によれば、多くの村人は「農業に頼っていれば食べることが心配ないが、金持ちになること、つまり、‘発家致富’は極めて難しい。都市部の裕福な人、また立ち退きなどでたくさんの土地賠償金をもらって成金になった都市近郊の農民を見れば、自分も金持ちになりたい。周りの人は次から次へと金持ちになって、自分より能力が高いわけでもないのに、何で自分より豊かなのかと不服の心理が働いている。特に、子供時代に一緒に遊んでいた幼馴染が自分より豊かになるのを目の当たりにし、自分も一日でも早く追いつこうと思っている」というような考え方を持っているという。最初の娯楽目的が徐々に強い射幸心に変化し、前述したように、短期間で富を作りだしたいという成金心理と相俟って賭博問題が深刻になった。さらに職業化した賭博成功者が手本になり、勤勉に働くより賭博の方が楽に稼げると思うようになった人は少なくない。

中国社会学者費孝通は『郷土中国』で、中国の農村社会について「熟人社会」と「郷土ロジック」という二つの用語を使った。これは農村社会を的確に説明している典型的なモデルと言われている。費の理論を纏めていけば以下の通りになる。‘郷土社会’は、農業による自給自足の社会で、土地は農民にとって命綱である。彼らは土に根を生やすように、世々代々その土地に住んで農業を営み、大多数の農民は集村をつくり、そこに居住している。こうした社会では、地縁は血縁の投影に過ぎず、血縁と地縁の合一は村落の原始状態である。‘郷土社会’は、そこで生まれ、そこで育ち、そこで死ぬ社会だ。代々住み続け、人口が飽和点に達すると、別のところに新しい土地を切り開くことになるが、そういうことがなければ極めて流動性の低い社会だ。自給自足の「郷土社会」においては人口流動する必要がないからである²¹⁷。だが、今日の中国農村社会は、もはや「郷土ロジック」社会ではなくなっている。今日の農村は、伝統的農村と異なり、多くの農民が都市部へ出稼ぎに行き、農業以外の産業に従事している。また、交通手段と通信の発展に伴い、人々の

²¹⁷ 費(1998)p. 9

交際の輪が広がった。今までの地縁と血縁で構築されてきた社会関係以外に、仕事関係などの重要性も高まっている。さらに、前述した農村伝統行事も行われなくなり、村という共同体、及び、同じ村出身という人情に対する認識も薄くなった。こうした変化に伴い、伝統社会の基礎構造である「郷土ロジック」も変わり、村民間の付き合いの背景にある対人関係意識も変化していく。アンケート調査では、「賭場無父子」²¹⁸という俗語に対してどう思うかという質問に、92%の回答者が賛成している。また、賭博での僅かな金で村民同士が大喧嘩になるケースもよく見られる。さらに、現在中国の地域社会では、従来の社会規範が効かなくなる一方、共同体が基本的に一致している目標と価値観に基づく新しい規範がまだ確立されていないため、多くの社会問題が続出している。賭博現象もその中の一つの典型的な例だと思われる。

以上、賭博の原因について、いくつかの面から分析してきた。

第4節 賭博の社会関係資本への影響分析

麻雀をはじめとする賭博行為が地域社会の社会関係資本にとってマイナス要因になる逆機能がどれほど大きいかは、調査からその一端が伺えると思われる。賭博に参加する個人にとって、働かなくてもお金持ちになれるという射幸心理が掻き立てられ、麻薬と同じように病みつきになり、長期にわたってやり続けると人は怠けグセがつく。その他、調査地ではよく見られるケースであるが、一旦始まったら大抵夜遅くまで続け、場合によっては朝まで夜通し行うことも珍しくない。徹夜が体に害を与えるだけでなく、多くの賭博参加者は元気づけるために、タバコを次から次へと吸っているから、参加者は皆一晩中ずっと煙草の煙に浸っていることになる。このように、賭博は参加者個人の健康面に悪い影響を与えていることが分かるが、賭博の参加者の家庭関係に対する影響、そして地域共同体への影響はどうだろうか。以下では事例を挙げながら分析して行きたい。

第1項 地域社会の信頼関係への影響

まず調査地で多く見られる麻雀を例にしてプレイヤーの参加心理と麻雀の基本原則を

²¹⁸ 賭博場では、たとえ親と子の関係でも輸贏勝敗がは容赦しない。言い換えれば肉親などの血縁関係さえ賭博の前では排除される対象になる。

参考に、賭博は人々の信頼関係にどのような影響を与えているかを見ていきたい。

麻雀は上家（カミチャ）を見つめ、下家（シモチャ）を防備し、対面（トイメン）を打算し、自分を固守するという四つの基本原則があると言われている。最も中心となっている事柄は互いに足を引っ張りあい、たとえ自分が勝てなくても相手を失敗させようとする。表では和気藹々とした雰囲気であるが、裏では疑心暗鬼で、互いのことを防備したり、打算したりしている。上家はどのような牌を出したのかを覚え、自分の牌と合わせながら下家に隙を乗じられないように牌を出す。下家の出した牌をよく観察して、チーとポンのチャンスを与えないように用心しなければならない。総じて言えば、狡猾で打算的であり、人の目を欺いてうまいことをする。相手を落としてまでも自分の利益を守り、互いのことを信頼しない。もちろん、誰かが大三元（役満貫）になりそうな時は、他の三人が臨時的に連合して、その人の足を引っ張ることもあるが、しかしながら、このような協力関係は臨時的なもので、普段は烏合の衆の関係に過ぎないだろう。

以上、麻雀には一定のルールがあるため、どこの国でも麻雀を楽しむなら、上のような現象が起きるのは避けられないだろう。たとえば、日本でも同じであると思われるかもしれない。しかしながら、筆者は麻雀がある意味で言えばまさに中国地域社会における複雑な人間関係を反映しているのではないかと考えている。自分の必要な牌は他人に握られていると同時に、自分も他人の必要な牌を持っている。これは現実の生活で、中国の人は自分の運命は多かれ少なかれ他人に握られていて、自分も何らかの形で多少他人の運命を握っているようである。前述したように、調査地で最も親しまれている賭博の方法は「麻雀」、「二五八杠」、「炸金花」、「牌九」などが挙げられ、どれも金銭のやりとりにおいて、信頼関係を失いがちなものであるが、中でもゲームの中身において最も駆け引きの要素が強く、信頼を失うことが多い麻雀について言えば、複雑な関係網の中で、互いに持ちつ持たれつの関係にあるよりも、人々は打算的に利用しつつ、利用されているのである。したがって、麻雀による賭博行為は人々の信頼関係を築くに資するとはいえない。あまりに賭博が蔓延しているため、賭博が終わって、一般社会に戻っても、ゲームと切り離された思考に人々が簡単に切り替えるとは考えにくく、むしろ逆の影響、すなわち他人への猜疑心を掻き立てかねないと言えるのではなかろうか。調査地では、賭博の際にインチキをする人は普段の生活の中ではあまり信用されておらず、いみじくも調査地の言い習わし「牌品即人品」（賭博柄は人柄である）の言う通りであろう。

第2項 家庭関係への影響

家庭は社会の細胞で地域共同体の最も基本的な単位だと言われている。地域社会に広く流行している賭博は地域社会における家族関係にどのような影響を与えているだろうか。家族が信頼や互酬性の規範のような一般的態度の潜在的リソースである。家族的背景が、信頼の程度に最も影響力のある決定要因であると言えよう。ストッレの整理によれば、「これまでの研究では、両親が子どもの態度や規範に三つの方法で影響を及ぼす。第一に、信頼できる開かれた両親のもとでの環境や自尊心のある寛容な環境のもとで成長した子どもは、信頼し、相互に報いることを望むようである。第二に、両親が子どもにどのように他人を評価するのか、誰と協力するのかを教える。第三に、子どもが協力するのか、離反するのか、についての直接的エピソードを経験するのは、学習の場としての家族の機能による。全体として、この三つの方法が、子どもの信頼を発展させる重要なリソースである。」²¹⁹

家族の中で最も重要な関係である夫婦関係から見てみよう。調査によると、夫婦とも賭博が好きな家庭では、夫婦関係にあまり影響がないと答えているのに対し、片方だけ賭博が好きな家庭では、特に負けた時によく喧嘩するという。調査地C村では2011年の夏にある事件が起こった。ある日、村民Y4は「二五八杠」に熱中していたが、それ同時に、妻も麻雀の‘戦場’で熱戦していた。水辺で遊んでいた二人の間の5歳の幼女が池に落ちてしまったところを、近くにいた6歳上の姉が助けようとしたが、足を滑らせて溺れてしまった。同伴の子供の知らせを聞いて、母親はすぐ池に駆けつけ、水中で子供を見つけたが、とうとう命を助けることができず、姉妹二人とも溺死した大惨事になった。その後夫婦間ではたびたび子供の溺死責任について揉めたり、喧嘩したりして、ついに離婚に至った。

上の事例は特別なケースと思われるかもしれないが、W市の公安局の資料によると、賭博による夫婦喧嘩で刑事事件に至ったケースは年間数十件もある。(2012年から2016年まで5年間のデータから見れば、少しずつ増えている)。さらに、この事例からも見たように、賭博は夫婦関係に影響を与えるだけでなく、青少年の成長と健康にも大きな影を落としていることが分かるだろう。調査ではよく見られる光景であるが、まだ歩けない子供を

²¹⁹ Stolle (2003) pp. 29-30

抱いて賭博に興じている母親が少なくない。歩けるようになった子供は大抵他の子供と遊んだりするが、この時とばかりに母親に小銭を強請っておやつを買ったりする。もう少し物事が分かるようになったら、そばで賭博を見たり、大人を真似たりするようになる。小学校4年生の子供数人がトランプで遊んでいたのを見て、「親に言われないうか」と質問したところ、「親の邪魔さえしなければ、こっちのことを全然構おうとしないよ。だって、構う暇も精力もないんだもん」という返事だった。このような家庭で育てられた子供は、両親が賭博に夢中になっているため、学校から帰って碌にご飯も食べられない。自分で適当に料理を拵えたり、強請った小遣いでカップラーメンやおやつなどを食べたりしている。調査地三つの村では、賭博が好きな父母の家庭では子供は勉強意欲をあまり示しておらず、進学率も低い傾向が見られる。多くの場合は中学校を卒業した後、出稼ぎに行っている。このように、知らず知らずのうちに子供は心身ともに大きな影響を受けていることが分かるだろう。

調査地C村では野菜畑の世話をしている70代の女性Yと雑談の形で聞き取り調査をした。Yは主人がなくなった後、次男の家に引越して一緒に住むようになった。次男は出稼ぎに行っているので、普段は次男の嫁、孫二人と合わせて四人で生活している。次男の嫁が賭博の虫で、孫の世話は全部Yに任せている。「彼女はほぼ毎日行っているから、家事も子供の世話も、野菜を植えるなどの農作業も全て私がやっている。もうこの年になっているし、本当に大変です。しかし、やらなければ、とても嫁の顔を見ることもできない。特に彼女が負けた時はそうである。将来もし自分が寝たきりになったら、彼女を頼りにするしかないから、今我慢しないと、彼女の機嫌でも損ねたら今後のことは心配だ」と泣かんばかりに話した。本来年取った自分を世話してもらうために次男の家に引っ越したが、結局、孫と次男の嫁の世話を見なければならぬという真逆の結果になってしまった。このように体力の面だけではなく、精神的なプレッシャーを感じる老人は地域社会では多く存在している²²⁰。

以上挙げたのはただいくつかの事例に過ぎないが、これらの事例を通じて地域社会における賭博による社会関係資本への影響を窺うことができよう。たしかに、日本でもパチンコでお金を使い果たして、子供をほったらかしている母親がいるという現実を見れば、た

²²⁰ 中国の農村社会学研究者劉燕舞の地域社会における老人自殺現象を参照。

だ中国の地域社会だけのことではないと思われるかもしれないが、賭博が社会に浸透している度合いは、日本の比ではない。本稿を通じて、地域社会における賭博は中国の地域社会の個人、夫婦関係、親子関係など社会関係資本の基礎である家庭関係に大きな影響を及ぼしていることが管見できよう。

第3項 近所関係への影響

近所関係は地域社会においてもっとも重要な地縁関係であり、地域社会の構造において肝腎な部分である。調査地での調査によると、賭博風潮が盛行するところでは、それだけでなく弱まっている村人同士の絆をさらに壊している。

多くの人が集まって賭博に興じている時に、ほとんどの人は勝敗にしか関心を持っていない。勝った人は嬉しいが、負けた人は挫けて不愉快になる場合が少なくない。時には冗談交じりの会話だけで口喧嘩また大喧嘩になるケースも稀ではない。調査地B村とC村では近隣との付き合いを絶った原因の多くは賭博時の口喧嘩によるものだという。この場合、大人だけではなく、両家の子供まで付き合いわないという悲劇さえ生じる例も稀ではない。また、兄弟姉妹などの親戚関係も賭博時のお金の貸し借りでトラブルになり、関係を絶ったケースも珍しくない。

本来労働や休息に充てるべきの時間が賭博に奪われてしまい、村人は隣近所との交流時間が少なくなった。もはや論ずるまでもないが、人々は村の生産、経営、公共事業などを検討する意欲もない。彼らは貴重な賭博時間を‘無駄’な村の公共事業に使おうとはすまない。自分自身が村の主人でありながら、関連する肝腎の仕事をおろそかにするのである。社会関係資本が失われるのは想像に難くないであろう。

第5節 小 結

本章では、調査における賭博の関連事情を紹介し、その背景にある原因も分析してきた。調査地では出稼ぎ経済のもと、平均的な家庭の収入（2012年の時点）は年間4万元から5万5千元という水準に達した。地域社会全体の経済状況が10年前よりかなりよくなり、物質的な満足度が高まってきたのである。しかしながら、一方では人々は娯楽施設と文化活動がほとんどない状態を強いられている。今日の地域社会では、文化構築への軽視と娯楽

活動の欠乏が賭博蔓延の大きな原因の一つであると言えよう。それから、従来の伝統行事が行われなくなり、道德倫理、社会規範も次第に忘れ去られている。人々の間に共同体に基づく協力関係が徐々に薄まり、今までの秩序と規範を維持してきた伝統文化が衰退していると同時に凝集力も弱まってきた。一方、新しい規範意識が一向に形成されず、地域社会における社会関係のストックの増加が難しいだろう。

市民活動と社会関係資本、両者の間に何らかの関係があることは想像に難くない。そこに住む人々の間で豊かな社会関係がはぐくまれている地域においては、当然様々な市民活動は活発であろうし、市民活動が低調なところでは社会関係資本もあまり豊かとはいえないだろう。市民活動は、地域社会において互酬性や相互の信頼を高め、ネットワークを強化することを通じて、社会関係資本の形成を促進すると考えられている。他方、豊かな社会関係資本は市民の多様な活動を活発化させる環境を提供すると考えられる。

社会関係資本の生産者としての市民活動に注目したとき、鍵を握るのが市民活動を支援する組織、中間支援組織の役割である。日本では、内閣府国民生活局二〇〇三年の調査報告によると、様々な市民活動組織の中でも中間支援機能を有する団体、中間支援組織の活動の展開が重要である。福祉や環境問題などの固有のミッションではなく、市民活動そのものを育成・支援するというミッションをもった中間支援組織は、市民活動にとって必要な様々な資源を必要とする団体に提供したり、提供可能な主体を紹介したりする。その資源は地域の様々なセクターにある場合や地域外にしかない場合もある。中間支援組織の活動により、これらの異なるセクター間や地域内外のつながりが醸成されていくと考えられる。このような中間支援組織の資源・技術の仲介機能やネットワーキング・コーディネーター機能を強化していくことが望まれる。(内閣府国民生活局 二〇〇三 九五---九六)。

今日の中国では、政府機関の主要な機能として、民衆に公共サービスを提供するより、スーパーカンパニーであるように、企業経営に重点を置くようになっていくと言っても良からう。富永が過去に日本社会について指摘した観点を借用すれば、中国社会はまさに「上からの近代化を強行する過程において、政府は産業化の促進にのみ関心を向け、他の側面の近代化については、これを促進しなかったというだけでなく抑圧したのであった。それに対して、民の世界において民主主義の精神をはじめ、自由の精神、市民（村民）社会の形成などが遅れを取った²²¹」。確かに、中国では改革開放まで長い間民衆は上からの指

²²¹富永(1990) p. 164

令にしたがって、さまざまな建設運動を展開してきたが、しかしながら今日に至っても民間にある NGO のような組織はまだ自由に行動することができず²²²、徐々に自治の能力が衰え、もはや回復が難しい状態になっている。我々はただ民衆の自立、自由精神の欠乏を咎めたり、責めたりするべきではない。比喩的に言えば、我々は長年車椅子に座らせていた人の筋肉の少なさを指摘する筋合いがどこにもない。これからの喫緊な課題はどのようにして、民衆を車椅子から離れさせ、自力で歩けるようにすることを考えなければいけないと思う。

第3章 地域社会における義理と儀式の変容

²²² 中国では NGO、NPO などの組織を作るには、政府（民政部門）で登記しなければならない。しかも登記する際、必ず登記する組織を管轄する‘単位’の同意が必要である。改革開放以後、確かに NGO、NPO などの組織は数的に急激に増加していたが、しかし自由度の面ではあまり変わっていないと思われる。特にここ数年、政治的な組織や主管庁に多少なりとも関わりそうな組織などの、いわゆる敏感問題に関わる組織がかなり弾圧を受けている。

第1節 義理の社会基礎

実証研究は社会学の基礎的な研究方法であり、社会事実を基本的な研究視野と研究対象として、経験と現象を抽出して分析することに基づいている。中国社会における義理と儀式の基礎研究には、ある基本的な前提が置かれている。それは人々が長年熟人社会²²³において、長年の社会生活の中で共通認識を共有し、互いに長期的な予期があることである。即ち、人々は知り合い社会を生き、互いのことを熟知していながら生活の中で生活などに関する常識を共有している。

義理は中国の地域社会では昔から存在していた社会現象であり、深い文化的な基礎と社会土壌があり、すでに地域住民の行動ロジックと価値観になっている。移行期における中国の地域社会では義理と儀式に関して様々な変容が起こっている。このような変容は地域社会の変遷の表れであり、言い換えれば、義理と儀式の変容から移行期の社会性質を窺うことができる。本章では義理及びそれに伴う儀式などを通じて地域社会の現状を把握し、近年社会の変化に伴って伝統的な義理と儀式に反する事例に焦点をあてて考察し、移行期における中国の地域社会の人々の行動ロジックを理解し、社会関係資本の角度から捉えていきたい。

第1項 定義と基本概念

義理：楊華²²⁴によると、地域社会における義理は日常生活型義理と儀式型義理に分けられている。前者は人々が日常生活において人情味のある協力と互助行為を指しているのに対し、後者は人々が人生の節目に様々な儀式を挙げ、宴席を設けて客を招待する活動を指し、主に儀式、宴席、プレゼント交換、など三つの要素が含まれている。義理の異化とは、儀式上では伝統的な倫理道德の規則を破り、文化と秩序の維持と逆の機能の儀式、または義理の往来では日常生活規範から逸脱しているアノミヤ行為を指している。例えば、儀式で無茶なことをするとか、正当な理由のない「整酒」²²⁵などがその例である。

儀式：冠婚葬祭やその他の祝い、記念などのために、一定の礼式、順序で行われる改まった行事である。常に宴席を儲けて客を招待するという行為が伴う。

²²³ p. 23 の説明を参照せよ

²²⁴ 楊 (2008)

²²⁵ 本稿の 10 ページを参照せよ

祝儀：客として宴席に出る際に祝意を表すために贈る金銭や品物は祝儀である。調査地では、「送礼」（地方によって賄賂の意味になることもある）また「送人情」という言い方である。

第2項 調査地における儀式の異化²²⁶事例

義理の儀式は人々が人生の重要な節目に行っている儀式と宴席などのイベントである。儀式型の義理はプレゼントの交換と義理の交換(主に祝儀の形)が伴っていて、主に儀式、宴席、プレゼント交換の三つの要素が含まれている。以下では三つの要素のそれぞれを、調査地における近年の義理及び儀式の異化現象から取り上げてみる。

事例① 調査地C村の葬式 調査日 2014年12月27日 土曜日 曇り

調査地C村では、古い伝統がまだ少し残っているので、儀式に関する仕来りは比較的に多くて、複雑である。特に葬式の場合は宗族組織と祖先崇拜に深く関わっている。少し前までの葬式は逝去した当日、まず道士を招き²²⁷、入棺する前にお経を唱えて死者の魂を苦しみから救う。道士は法事をやる以外に、出棺吉日の選定²²⁸と墓の位置と方向²²⁹の選定もしなければならない。死者を入棺させてから、柩を出棺吉日まで家に置く。その間、親戚と友人が追悼しに来て、花輪を献じ、火紙²³⁰（黄色い紙、あの世で使う冥幣のこと）を大量に燃やす。出棺当日まで道士は経を唱えて法事を続ける。法事進行中、逝去した人の直系子孫は麻の服²³¹と帯を纏い、柩の前に跪いて、頭を地面につけてお辞儀をする。出棺する前の夜、「叫茶」という儀式がある。子孫全員揃って、松明に火をつけて、墓の方向へ歩いていき、途中では大きな声で死者の魂が帰るように呼びかけながら、死者の靈魂を導く。例えば孫の場合なら「お爺さん、家に帰って、お茶をどうぞ召し上がれ、道に迷わないように」と呼びかける。この「叫茶」が終わってから葬式の宴席が始まる。

しかしながら、ここ数年調査地C村の葬式の儀式が一変した。とりわけ最近の葬式は賑

²²⁶ 日常馴れ親しんでいる文脈から物事がずれて、不気味で見慣れぬものになること。

²²⁷ 自分が道士である場合、自分の家族の人に法事をする事ができない。他の道士に頼まなければならない仕来りがある。

²²⁸ 死者の八字で決める。八字は人の生まれた年、月、日、時間の四つを、干支の2文字ずつで表すことである。

²²⁹ 家族の風水に関わっているから、非常に重視されている。

²³⁰ 第一章で言及した。本稿のp.57にある。

²³¹ 死者の息子及び息子と同じ世代の人は麻の服、孫及び孫の世代にあたる人は赤の布を頭から被る、曾孫の世代は緑の布を頭から被る。

やかなアトラクションが流行になっている。最初はラッパとか、オーシャンドラムの楽団に演奏してもらったりしたが、その後徐々に劇団を招いて上演するまで発展し、ここ数年はセクシーな衣装を着て、迫力のある歌を歌いながら踊るようになった。地域社会における冠婚葬祭の儀式変化について、賀雪峰は「地域の人々は地方劇よりも流行歌とダンスを好んでいる。頼まれている楽団は最初葬式の雰囲気に合わせて悲しい曲を演奏したり、歌ったりしていたが、アトラクションを演じているうちに、葬式のことを忘れ、観衆の要求に応じて自分たちの長所であるストロングダンスとかモダンダンスをやるようになった。更に、その後より多くの観衆を集めるために、ストロングダンスは最終的に官能的な踊りに走ったケースも少なくない²³²」とフィールド調査地湖北省京山県の現状を描いている。

以上のような現象は決して湖北省京山県だけのことではない。2009年12月9日、安徽テレビ局は「五河県の農村地帯の葬式ではポールダンスとか官能的な踊りが上演されている²³³」と報道した。報道の中でインタビューを受けた村民が「ラッパとかオーシャンドラムなら誰も見に行かないよ。あれ（官能的な内容）がなければ見に来る人が集らない」とにやりと笑いながら言った。他にも似ているような報道がたくさんありすぎて、枚挙に暇がない。現在ではすでにニュースではなくなっているから、取り上げるテレビ局はほとんど見当たらない。やはり地域社会の日常生活では文化活動が殆どなくて、娯楽といえばマージャンをはじめ様々な博打類しかない現状をあらわしているようである。娯楽と文化の欠如も儀式が異化する一つの誘因ではないかと考えている。

事例② 結婚式に‘好色漢である舅’ 調査日 2015年1月9日～14日

三つの調査地とも結婚式では滑稽の要求による低俗化が起こっている。本来厳粛な儀礼に悪戯が行われるようになった。その内容は今までの倫理禁忌のボトムラインを突破している。フィールド調査の間に、数回の結婚式に参加した。最近の結婚式では、嫁を迎える車は村に入る前のおよそ500メートルのところに止めさせられ、舅に花嫁を家まで背負わせるような悪戯が流行るようになった。舅の顔が京劇の隈取のように塗られ、高い帽子を被らせ、帽子には「色狼水貨新郎」²³⁴（好色漢で偽新郎）と書いてある。更に、たとえ冬でも背負う時に必ず裸足でなければならない。一方、姑の顔にもドーランが塗られていて、

²³² 賀（2010）p.130

²³³ <http://v.baidu.com/watch/7845939619066411511.html>

²³⁴ 帽子に書かれている文字は特に決まっていなかったが、悪戯であればあるほど良いとされている。

首にダンボール紙をぶら下げ、上に「我吃醋」（私は妬いている）と書いてある。嫁が新婚夫婦の部屋に入った後、物見高い群衆が舅の耳近くで銅鑼を叩き、「響きますか」²³⁵と舅に尋ね、「響きます」と答えるまで銅鑼を叩き続ける。銅鑼の音に耐えられなくなり、やむを得ずに舅は「響きます」と答え、物見高い群衆は大笑いになって、「ふざけるな、よくそんなエッチなことを考えていますね」と嘲って返事する。このように、舅と花嫁の性的な関係を仄めかすようなジョークが主題になり、姑はピエロのロールになり、注目を集めた。本来結婚式の主役であるはずの新郎は逆に冷遇されていて、ただ後の宴席で飲まされているだけである。このような悪戯は最初のうちは新鮮感があったが、数年も経てば、刺激の感度が徐々に低下していくので、つまらないと思われるようになる。常に新鮮感と刺激感を保ちたい要求と、宴席が賑やかでなければならない、より多くのオーディエンスに来てもらう欲求があいまって、より低俗で可笑しい悪戯が発明されていくのは想像にかたくない。



（結婚日の舅 筆者撮影）

事例③ 結納金の面子競争の白熱化

一人っ子政策などが原因²³⁶で、地域社会では男性は婚姻市場では非常に不利な立場に

²³⁵ 中国語では「響」と「想」が同じ発音である。「想」は「～をしたい」の意味であるため、「響く」と答えたら、嫁と性的関係を持ちたいの駄洒落になる。

²³⁶ 地域社会では、人々の考え方が保守的で、どうしても男の子がほしいという願望が強いため、妊娠してから女の子と分かったら、中絶を選ぶ人が多い。

立っている。現在地域社会では嫁を迎えるために、一家全体の力を挙げなければならない。調査地ではこれまでの仕来りとして結納金はほとんど要らなかったが、しかしながら、近年結婚の必須条件として‘一动不动’（‘一动’は車のことを指す、‘不动’は農村にある家の外に、県城でも不動産を持つこと）以外に、‘万紫千红一片绿’（‘万紫’は5元札²³⁷を一万枚、‘千红’は100元札を千枚、‘一片绿’は50元札を50枚、合計175000元の結納金）が必要である。更に場合によって仲人に10001元「万里挑一」（一万人の中から選んだ人の意味）を謝礼として出さなければならない。結婚式の当日、車が多ければ多いほど、新郎新婦が乗る車は高級車であればあるほど、主人側は面子があると思われる。特に嫁の親が車など面子に関わることを気にしている。車は結婚当日に親戚と友人に頼んで来てもらうものもあるが、それ以外、特に高級車の殆どは専門業者から借りている。一日の所用費用は車のランキングによって500元から2000元以上までである。こうした中で結婚式はますます豪華になり、出費が嵩む一方である。インタビューでは、村民に「なぜこんなにたくさん車が必要ですか、もったいないと思わないか」と尋ねたところ、「確かに少し無駄に見えるかもしれないが、だけど、皆がやっていることだから。やらないわけにはいかない。別に自分は同じ村の他人より能力的には劣っていないし、他の人ができれば、私もできる、負けるもんか。こんな肝心な時にけちなこと或いはみすぼらしいことでもしてしまったら、皆に見下されるよ」との答えだった。

²³⁷ 中国現在流通している人民元の5元札、100元札、50元札はそれぞれの地色は紫、赤、緑である。



(結婚式の車 手前の車はアウディ Q7 とレンジローバーである 筆者撮影)

(高級車がたくさん見られる一方、隣にゴミが放置されたままである)

第3項 考察

儀式の機能について、まず機能主義の元祖であるデュルケムは、オーストラリアのトーテム儀式が部族統合に寄与していることから、儀式への参加を通じて、個人の情緒が安定することで社会の統合がもたらされると論じた。デュルケムによると、儀式には個人の欲求を満たし、社会の平衡状態を維持する機能があるというのである。知り合い社会では儀式はある共同体に属している人々の共通認識を喚起し、「我々」という意識を形成させることになり、一方、知り合い社会の親密度を増進する機能も持っている。袁松²³⁸は民間の宗教信仰の研究では、葬式の儀式は「感情発散システム」の一種であり、関連する人々が共同体を感じさせ、宗教のような神秘感を覚えさせる、と論じている。

これらの学説が唱えているように、儀式は社会的結合ないし社会関係資本の維持に機能があるとされている。しかしながら、現在中国の地域社会では、以上三つの事例でみられるように、葬式にしても結婚式にしても儀式は娯楽化、低俗化する傾向が見られる。地域

²³⁸ 袁 (2009)

社会では儀式は本来の意味と懸け離れ、村民間の面子競争の修羅場になっていると言えよう。莫大な費用をかけ、巨大な心理代価まで払い、盛大な儀式を挙げる目的は、ただ自分が他人より劣っていないことを証明するだけにあるようである。儀式は地域社会ではもはや面子競争の手段になった。賀雪峰は、「地域社会の人々は盛大なる儀式を挙げたり、豪華な宴席を設けたりすることによって、地域社会で優勢な地位を獲得しようとしている²³⁹」と地域社会の儀式の機能について指摘した。‘熱鬧’（賑やかさ）と‘排場’（体裁、見栄）は中国の人が最も重視していることである。賑やかさの程度から主人側の人脈と顔の広さが判断できる。言い換えれば、客が多ければ多いほど、主人側の社会的な地位が高く、面子もあり、社会影響力があるということになる。‘排場’（体裁、見栄）は宴席の規模と豪華さで表されているから、経済力があり、社会地位の高い家ほど宴席の規模と豪華さを重視している。このような行動は社会心理学では、行為者は奇異なことまた他人と異なることを示すことによって、自分の優位を表す心理が働いているのである。一般的に正常な社会では、儀式は長期にわたって安定している。文化的要素が含まれているので持続できるものである。儀式は誰かが勝手に発明したものではなく、伝統的な習俗から来ているものが多い。そのため、異なることを示すことで見せびらかすような行動はあまりない。

アメリカの社会学者ゴッフマンは、ドラマツルギーという演劇理論を社会学に援用して社会人の行動をこう説明した。「個人の行動は時間・場所・オーディエンスに規定されているパフォーマンスとなり、パフォーマンスをしているその個人はパフォーマーになるのである。社会的な相互行為とは、パフォーマーがオーディエンスの前で演技をすることであり、パフォーマンスとオーディエンスが相互の立場を交換しながらパフォーマンスをすることでもある。儀式に参加している人々はそれぞれの役割を遂行し、目標はそれぞれ特定の舞台で期待されている役割を上手に演じることである。役割乖離を避けるには、パフォーマーは社会規範に基づいている役割を遂行しなければならない。主人側は儀式で親戚、友人、隣人などの客を礼儀正しくもてなすことで一生懸命自分の身分に合う役割を演じている²⁴⁰」。ゴッフマンは社会における相互行為に演劇的要素を見出したのだが、現代中国地域社会における儀式は、それ自体が演劇化しているとも言えよう。儀式はそれ自体で成立しているのではなく、「見る者」と「見られる者」との関係で成り立つようになった。

²³⁹ 賀 (2011) p. 131

²⁴⁰ 戈夫曼[ゴッフマン] (2008) p. 19

ゴッフマンは以下のように指摘している。「パフォーマーは自分が相手にどのように見られているか、あるいは相手にどのような人間として見られたいのかを意識して自分の行動を調整する、言い換えれば印象操作を行っているのである。オーディエンスよりも優位なポジションを得られるために、自分を実際以上に偉くて知的な人物に見せかけようとしてパフォーマンスをする人もいれば、反対に自分が謙虚で好ましい人柄であることを伝えるために、すでに知っていることでも知らなかったと言ってみたり自分の能力を韜晦したりのパフォーマンスをする人もいる²⁴¹」。つまり、行為者は常に印象操作によって、望ましい自己アイデンティティを他者に示している。調査地では、多数の来客で賑わっていて、料理もタバコも酒も豪華で、後の世間話でも評判になれば、主人側にとって成功したパフォーマンスになる。儀式を通して自分は同じ共同体に生活している他者より優位な地位に立っていることが認められていると思われる。このようなことは、本来儀式に備わっている社会紐帯の確認、結合化という機能を外に置くため、人々はそれと逆方向に作用しかねない差異の行動をとるに至る。

結婚式での悪ふざけが前近代にすでにあったという指摘はあるが、しかしながら、今日の悪ふざけはほとんど禁忌のないいたずらになっている。結婚式や葬式などの儀式にはタブーや禁忌もあるべきである。賀雪峰が「儀式は倫理の禁忌と道德のボトムラインがなければ、いずれ持続できないものになる²⁴²」と指摘したように、このままでは、地域社会の儀式はいずれ崩壊するだろう。文化と芸術性に富んでいる儀式は同時に倫理と規範でもあり、社会秩序を維持する機能を持っている。しかしながら、調査地における冠婚葬祭の儀式は、明らかな官能的な娯楽と文化芸術性のない悪戯になり、中身のない低俗なものになってしまった。人類の本能である官能的な刺激を利用しているから、本能的な刺激が過ぎてしまえば退屈と感じるようになる。悪戯のやり方をさらに低俗方向に改めない限り、見に来る人が減り、ゴッフマンの提唱したドラマツルギー理論によれば行為の成立に重要な要素であるオーディエンスがいなくなるのである。そうなると、主人側は観衆を集めて賑わっているような雰囲気を作るためには、より官能的な刺激のある出し物を演じなければならない。その結果、徐々に倫理規則を突破していき、風船のように膨らみ、最後は必然的に爆発することになるであろう。

第2節 祝儀目的の‘整酒風’に関する実地調査

²⁴¹ 戈夫曼[ゴッフマン] (2008) p. 70

²⁴² 賀雪峰 (2010) p. 132

第1項 ‘整酒風’の事例

新築家の落成式とか結婚式などの祝い事で、主人側が宴席を設け、客として祝いに行くことは本来伝統的な仕来りで、ごく普通のことであり、各家のプライベートなことである。しかしながら、調査対象地ではある思わぬ事態が発生してしまい、最後に政府が介入する始末になった。村人の多くは心の中に「正当な理由がない整酒は親戚と友人及び周りの人にとって負担と迷惑である」という共通認識があるにもかかわらず、なかなか‘整酒風’のブレーキが掛けられない。このような義理と祝儀の状況は非常に複雑な様相を呈していて、表では人々は楽しそうに賑わっているように見えるが、調査地の村人にとって、すでに大きな経済負担と重い精神的な荷物になっている。このような‘整酒風’は地域共同体の社会システム全体に適応や調整を減じる逆機能をもたらしている。なぜこのような異化現象が起こったのだらうか。一体何が原因で、本来喜ぶべき娯楽が逆に主人と客を困惑させてしまい、本来各家の私事が結局一つの社会の難題になったのであろうか。この儀式と祝儀の異化現象から深層な地域社会の構造と社会心理を探り、現在中国の地域社会における人間関係を捉えたい。

2013年1月23日から2013年2月23日まで、筆者は三つの村を調査地として、フィールド調査した。調査方法と対象地の概況については本稿の第1章で述べた通りである。この期間は中国では最も大切な祝日である春節のため、出稼ぎの人がほとんど帰郷するので、‘整酒風’の最盛期である。結婚披露宴、誕生祝い、家の新築祝いなどをはじめ、他には奇妙な名目の宴会もほぼ毎日行われていた。このような宴席は一見普通のことであるが、背景には様々な知られざる事情が隠れている。

事例① 豪華の程度で面子を競う 2013年1月29日 火曜日 曇りのち晴れ

フィールド調査地A村に入った翌日、同じ日に何軒の家が宴会を催した。村民Pの息子の娶る吉日で、門前に華麗な舞台が設置されていて、派手な服を着た新郎新婦が上に立っていた。プロの司会者と楽器演奏団が雰囲気盛り上げ、親戚と友人が次々と爆竹を鳴らし、花火を打ち上げた。庭で専門の料理師が懸命に400人近くの来客の宴席に料理を準備していた。38卓も料理が用意されて、タバコとお酒を含めて約4万円の経費も掛かった。

宴席の主人側によると、祝儀の金額は6万元ぐらい集まったという。車は20台も並んでいて、色彩り鮮やかなりボンで飾られている。また、村民Sは子供の10歳の誕生祝いで、20卓の料理も用意されていた。親戚と友人が訪れると花火を次々に打ち上げ、訪客は赤い紙で包んだ札を祝儀として差し出した。さらに村民Z5は娘の嫁ぐ日で、28卓の料理が準備されていて、花嫁を迎えに来る車は35台もあり、中にはポルシェとベンツなど高級車も少なくなかった（参与観察より）。村民Gによると、「宴席の体裁と豪華程度はよく私たちの話題になる。例えば、宴席の料理が高級な材料で作ったか、お酒もタバコも²⁴³値段の高いブランド品であるかどうか、来客数（主人側の人脈を反映している）がどれほどいるのか、結婚式などの場合は車の台数と高級程度などが全部比べる対象になっている。評判の良い人は村で面子があり、皆に尊重されていて、人に舐められることは決してない。逆に不評であれば、村では面子がなくなり、人前では頭が上がらない」という。（聞き取り調査より）



事例② 祝儀が災難である 2013年1月31日 木曜日 晴れ

調査地B村では「歩ききれない山道、食べきれない宴席、祝い事があってもなくてもとにかく宴席を」という流行語が村民の間に広まっている。インタビューを受けたEは数万元の借金までしていわゆる義理を尽くしていた。「義理の祝儀は我が家にとってすでに災難になっている」とEは苦笑いで言った。さらに、Eは

²⁴³ 中国では普段ではよくタバコを分け合う習慣がある。お祝いの宴会では客を招待するためタバコが必須な物である。その際、ブランドのタバコ、値段の高いタバコを出すのは面子があると考えられている。

「ここ数年村では冠婚葬祭以外に様々な名目で宴会が設けられている。言うまでもないが、出席に行けばご祝儀を出さなければならない。うちの村の祝儀額の相場として、もし宴席を設ける主人側とただの知り合いだけで親戚関係がなければ100円で間に合うが、もし普通の近所関係は200円で、さらに少しでも重要な関係であれば1000元以上出すのが普通である（上限がない）。また、祝儀の金額は常に対等な価値で交換するのではなく、例えば今回ご祝儀として200元を出したら、今度自分が何かを祝うときに200元以上の金額が祝儀として返ってくる。このように祝儀の金額は徐々にエスカレートしていく。祝儀の金額が少なければ、主人側はその場で居直って、客を追い出す例もある。農業を営んでいるだけでは、このような「義理債」は返しきれない。今年養殖で稼いだお金でようやく去年の祝儀借金が返済できた。家にとって今の宴席の祝儀は本当に重荷になっていて、語弊を恐れずにいえばもはや災難になっている。」と話した。（インタビューによる）

事例③ 義理と祝儀に追い込まれる村幹部

元のA村幹部Tのインタビュー 2013年2月13日 水曜日 晴れ

私は3年前に村幹部の仕事をやめた。その原因はやはりますます盛行になっている「整酒」風潮である。年間の給料は2万元までいっていないのに、義理の祝儀は毎年3万元以上出していた。この6冊の赤紙ノート（祝儀帳簿）をまとめて概算したところ、ここ数年の祝儀は合わせて15万元も出した。この村では各家に祝儀往来の帳簿がある。村幹部を務めた以上、誰かの家のお祝いに出席しなかったら、今後もし仕事でその家と何か関連していれば、非常にやりづらくなる。そのため、普段私たちは仕事をしているとき、爆竹または花火の音がしたら、必ずといっていいほど周りの人に誰の家で宴席をやっているかを尋ねる。笑い話に聞こえるかもしれないが、本当に工作中常に爆竹の音に留意しなければならなかった。Tの2012年の祝儀リストを例に、以下に整理してみた

宴席名目	回数
娶る	11

嫁ぐ	10
葬式	7
出産	9
進学	13
抓周 ²⁴⁴ 过寿 ²⁴⁵	14
見舞い	4
家の新築	3
名目不明	15
合計	85

表3 村幹部T 2012年の祝儀リスト



(2013年2月元A村幹部Tのもらった招待状の一部 筆者撮影)

事例④ 落第の進学宴と偽りの傘寿祝い

村民F 聞き取り調査 2013年1月24日 木曜日 小雨

²⁴⁴ 満一歳の誕生日に行う行事。弓、筆、そろばん、針などさまざまな玩具を並べて子供に選ばせ、将来の職業を占う。『都道府県別冠婚葬祭大事典』によると、日本でもこのような行事が行われている。例えば、甲信・東海地方では初誕生に筆、そろばん、ものさしなどを並べて赤ちゃんに選ばせ、将来を占う行事がある。

²⁴⁵ 還暦祝い、古希祝い、傘寿祝いなど

2011年夏休みにC村の主任は息子の進学に豪華な宴会を設けた。しかしながら、裏の話ではその息子は大学に進学したのではなく、学生募集に困っている某技術中等専門学校の入学通知書を受けただけであった。村人は皆心の中で進学宴の裏事情を知っているが、相手は村主任であるため、皆それぞれの事情で行かざるを得なかった。宴席が終わった後、村主任の息子は‘大学’に‘入学’したが、半年ぐらいで戻ってきた。広東省で建築業に従事していた村民によると、主任の息子はその半年の経験は‘大学生生活’ではなく、広東省へ出稼ぎに行っていたそうだ。2012年同主任は母の傘寿（実際は77歳）を祝うために宴席を設けた。人脈と顔が広くて、権威もあるため来客が500人もあって、祝儀の総額は30万元にも達した。（事例②の村民Eは主任に願い事があるため、祝儀として一万元を出したという）その後、選挙で落ちて、主任の仕事が解任されてから県城に移住した。以来、もと主任は村人の宴席に出席したことがなく、まるで人間蒸発したようである。このような目先の実利（祝儀）を追求するだけの行為は人々の親縁関係を衰弱化させ、人々に不信感を募らせ、時には権力者が‘合法的な賄賂’を強要する手段となり、地域社会におけるネットワークと信頼を大いに壊している。

ここ2,3年、反腐敗キャンペーンの下、政府が夏休みに集中している進学宴席を厳しく取り締まったため、大学進学宴はほとんど5月に行われるようになった。当該年度の「高考」（中国の全国大学入学統一試験）はまだ実施もされていないにも関わらず、とりあえず合格したと想定して進学宴を設ける。この背景には近年中国の大学募集事情が関係している。いわゆる「一本大学」（重点大学）に入るのはなかなか容易なことではないが、ランクの底辺にある各種職業学院に入学するのはごく簡単である。いくら試験の点数が低くても、いわゆる滑り止めの大学がある。語弊を恐れずに言えば、お金さえ出せば実力がなくても入れる大学がたくさん存在しているので、大学に受からないことはほとんどない。つまり、最後に必ずといって良いほどどこかの大学の合格通知書が届く。このような事情があるのも手伝って、近年高校三年生のいる家庭では、成績の如何にかかわらず、早くも5月前後に進学宴を設ける。たとえ最後に滑り止めの大学に行かず、出稼ぎにいても進学宴はとりあえず設けておくことにしている。以上の例では、人々の間では長いスパンでの義理のやり取りではなく、短期間に自分がすでに出した祝儀を取り戻そうしている。無理かつ過剰に収支を図ろうとする行為になっていて、ここでも通常よくある正当な義理の交換を逸脱している。

事例⑤ ‘赤色爆弾’

C村U（トラック運転手）とのインタビュー 2013年1月24日 木曜日 小雨

今、私たちは招待状を「紅色炸彈」（赤色の爆弾）または「罰款通知單」（科料通知書）と冗談半分で呼んでいる。宴席に出るのは全然嬉しくないのに、ただ表の面子を維持するために行っているだけである。毎月少なくとも5、6回宴席に出ている。一番多い月は10回以上もあった。おかげで、毎年収入の半分以上は祝儀につき込んでいる。比喩的な言い方で言えば、皆この宴席を設ける「ゲーム」の主催者と加害者でありながら、同時に参加者と被害者でもある。この村では祝儀の金が足りない場合、家の食料を売ったり、豚を売ったりする家さえある。私は運送業に携わっているため、まだ普通の家庭より少し豊かだが、それでも四年前に建てた家は外壁の塗装費用がなかなか工面できず、今も煉瓦が見えるままの状態でご慢している。



(C村村民 U が語る ‘赤色爆弾’ 筆者撮影)

事例⑥ 理由なしの宴席

現役B村主任Vとの対談

2013年1月25日 金曜日 曇り

今、B村人の8割以上は義理と祝儀を大きな負担と感じている。爆竹の音が聞こえたら、少なくとも200元から400元が自分のポケットから出ていくことになる。しかし、皆この祝儀を出す時に心の中で計算し、今度自分が宴席を設ける時の倍返しを予期している。その後早く元を取り戻すため、正当な冠婚葬祭でなくても無理にでも理由を作って宴席を設ける人が少なくない。例えば、村民W1が家を建てたときに、三階建ての家の一階ごとに宴席を設けた²⁴⁶。村民W2は二年も宴席を設けなかったため、止むを得ずに、豚小屋を建てた後客を集めた。その後豚の出産でもう一回宴席を設けた。村民W3は両親の墓に墓碑を立てたことで宴席を設けて祝儀を取り戻した。元々墓碑を立てるのはただ個人の親孝行の行動だったが、それ以来宴席を設ける良い口実になった。W4は賭博幫助罪で一年3ヶ月牢屋に入れられたが、自分の釈放を祝うために宴席を設けて客を集めた。うちの村では「吃酒就吃酒，莫管什么酒，吃了赶紧走」（宴席があつたら、ただ食べるだけで良い。事由を聞くな。食べ終わったらさっさと帰ろう）という流行り文句がある。去年のある日、同じ日に8箇所の宴席に出なければならなかった。人手が足りなくて、家族3人全部出勤した。その時、お酒を飲むどころか、大抵祝儀だけを出してタバコを一本吸ってから次に行かなければ間に合わない。まったく宴席を楽しむところではなかった。

村民W5はここ数年一回も宴席を設けたことがない。一方、周り近所の宴席にほとんど欠かさず出席していたので、出した祝儀はかなりの金額になっていた。W5は自分がこのまま損していはいけないと思い、何か適切な理由でも見つけて祝儀を回収しようと考えた。しかし、とうとういくら考えても良い理由が見つからず、さんざん悩んだ挙げ句、W5は思い切って、適切な理由がないまま、とりあえず前日の夜花火を打ち上げ、翌日自分が宴席を設けるという情報を近所の人に流した。宴席当日爆竹が鳴らされたあと、多くの客が来た。予想通りかなりの祝儀を受け取ることができた。だが、宴席が終わるまで客は宴席の理由が分からなかった。これは一種の暗黙の了解であるかもしれないが、とにかく理由を聞く人もいなかった。

事例⑦ 敷居が高くなる心理 2013年1月26日 土曜日 曇りのち晴れ

調査地三つの村で宴席を設ける場合、いずれも友人と近隣に招待状を出さなくても良い。

²⁴⁶ 本来なら、家の上棟式だけに宴席を設けるが、現在祝儀目的で三階建ての家は三回も宴席を設ける。そのため、現地では二階まで完成した家の宴席は半落成式宴と呼んでいる。

ただ宴席の前日の夜に花火さえ打ち上げれば、翌日の宴席に客が自ずと来る。‘熟人社会’の地域社会では、人々は花火を見れば互いに宴席に関わる情報を交換し、誰かの家で宴席が行われることをすぐ知ることができる。「花火は信号雷管であり、それを見たら、宴席に出るか出ないかの責任は客の方になる、たとえ当日に行けなかったとしても祝儀は誰かに頼んで立て替えてもらうか、またはその後追加しても良い。もし宴席に行かず祝儀も出さなければ、今後両家の関係が微妙になり、その家の敷居が高くなる」とA村のXが言った。行かなければ関係が破壊され、敷居が高くなるという心理が整酒風潮の流行りに一役を買ったと言えよう。

事例⑧ ‘変人’ Z2 と ‘困難戸’²⁴⁷ Z3

Z2 へのインタビュー 2013年1月24日 木曜日 小雨

C村にはどんな宴席にも出ない、‘変人’だと思われる人Z2がいる。Z2はインタビューを受けるときに、微笑みながら話してくれた。「宴席に出るのは何の意味があるのか。特に正当な理由がない宴席は何の意味もないと思う。もし自分が祝儀を出さなければ、いわゆるお返しがあるわけがない。だからこのようなやり取りは結局自分たちが汗を流して稼いだ金を無駄にしているのではないか。義理とか面子なんかはどうでも良い。このような効率も生産性もないことにまったく興味がない。私のように義理の祝儀‘戦争’に参加しない村民はごく少数派で、村では変人だと思われるが、私は全然気にしない。うちの村では私と村民Z3両家だけは祝儀戦争に参加していない」。Z2によると、村民Z3は先天性の聾啞で、父が早死にし、家の経済的な状況は非常に困難で、祝儀のお金がない。たとえ祝儀をだしても宴席を設ける望みがなくて、元が取り戻せないから、祝儀の‘ゲーム’から撤退したという。

事例⑨ ‘整酒風’の根っこについて

‘整酒風’について麻雀を楽しんでいた人に聞き取り 以下は整理した内容である

2013年1月25日 金曜日 曇り

整酒の風潮はいつどこから流行り始まったのかとの質問に対して、多くの村人は上の人のしていることを下の者が見習って、いつのまにか流行るようになったと答えた。ここで

²⁴⁷中国の地域社会では様々な事情で経済的に困難な家のことを‘困難戸’と呼ぶ

の「上」は村または郷鎮の幹部のことを指している。調査地では幹部の多くは経済、権力などの面において優位に立っているため、人脈も広いし、「上下」²⁴⁸という縦の関係もある。そのため、宴席は規模をはじめ様々な意味で普通の民衆と異なっている。事例④でも少し触れたように、経済力と権力ある「能人」（調査地での言い方）は宴席の収益が最も大きい。村民が曰く「官越大、礼越多」（官位が高ければ高いほど祝儀の金額が大きくなる）。幹部たちがただ宴席を設ければ、二、三十万円を集めることができる。これより便利な「発財」（金を集める）の手段はない。知らず知らずのうちに、上の幹部の間で流行るようになった。その後このような風潮が徐々に広がり、民衆の間でも広がるようになった、と村人の多くが考えているようである。

事例⑩ 赤字の宴席

2013年1月24日 木曜日 小雨

C村の村民Y2は障害者の子供と病気がちの妻を抱えているので、出稼ぎに行けなくて、家で農業をしている。このような事情でY2の家庭の経済状況は非常に困窮している。2011年両親が相次いでなくなったため、やむを得ずに2回葬式の宴席を設けた。しかし、2回の宴席とも赤字だという。Y2は筆者にこう説明した。「家は貧乏だから、他人の家の宴席にはできるだけ行かないようにしている。たとえ宴席に出たとしても、気前よく高い祝儀を出すことができない。そういうわけで、当然ながら自分の家に宴席がある場合、来る客も祝儀も少なく、赤字になるのは当然であろう」。

調査地三つの村において、全体からみればここ数年の義理往来でほとんどの村人は損しているが、単一の宴席だけを取ってみれば、祝儀の金額は大抵の場合宴席のコストより多いので、つまりほとんどの場合は黒字である。これは宴席を設ける直接の動機である。だが、この事例でも分かるように、経済力と権力のない人はたとえ単一の宴席でも損している。上に挙げたほかの事例と比べてみれば、義理は階層に応じて流動状況が正反対の場合もあることが分かる。調査地には「人敬有的、狗咬丑的」（人は持てる人に敬意を払い、犬は醜い人に噛みつく）という言い伝えがあるように、地域社会では義理の支出は上層の人々に流れていく傾向がある。つまり、社会的な地位が高くて、経済的な条件が良いほど義理の祝儀往来では黒字になる。持たざる人は単一の宴席でも長期的な義理の付き合いで

²⁴⁸ 本来なら平等な関係であるはずだが、中国の地域社会において少なくとも表では民衆は政府の役人を「父母官」と呼んでいる。民衆の間ではいわゆる「父母官」の腐敗と汚職程度が分かっているが、時々頼み事があるので、従属しなければならない。徐々に、この従属は上下という関係になって行く。

も損している。このように義理の祝儀は持てる人を更に上に、持たざる人を更に下に導いていき、もはや社会分化の道具になっている。

事例⑩ 飛ぶように売る爆竹と花火

雑貨店の主 Y3 への聞き取り調査 2013 年 1 月 27 日 日曜日 晴れ

正直に言うと、宴席は我々に巨大な利益をもたらしてきた。村民皆がもし自分が宴席を設けなければ損すると思っているからこそ、宴席が次から次へと設けられている。宴席では爆竹と花火は欠かせない物で、おまけに親戚と友人もできるだけ立派な花火と爆竹を持っていきがるので、爆竹と花火は飛ぶように売れている。村民の間ではこんなところに限って、負けず嫌い精神が強い。その他、儀式に参加する車の台数、高級程度、料理もタバコもお酒も全部宴席の評判に関わっているので、知らずのうちに競う風潮が流行った。儲かるのは我々以外に、料理師と楽団を経営する専門業者である。言うまでもなく、損するのは彼ら自身と親戚また友人である。

筆者はこれらの社会分業化傾向と商売を批判するつもりは決してない。ただこれまで血縁、親縁と地縁を大切にしてきた伝統的な人間関係が消え、露骨な利益と金銭関係に取って代わられつつあることを懸念している。このような一種の社会病態の蔓延が社会関係資本にどれだけの悪影響を与えているかは計り知れないと思われる。

事例⑪ 宴席の専門業者

専門業者の社長 Z 2013 年 1 月 27 日 日曜日 晴れ

ここ数年宴席を設ける頻度がますます高くなり、規模も徐々に拡大している。弊社は五年前に地域社会のニーズに合わせて設立した。地域社会における宴席に関するサービス、例えば宴会用の机と椅子からお皿とお箸まで、料理の材料とコックから儀式の司会者まで、レンタカーからアトラクションの楽団まで全てを一本化して提供している。宴席の主人は来客数と予算さえ言ってくれば、具体的な仕事は全部私たちに任せてもらってよい。忙しい時期は一日中に 10 以上の会場を駆け回ったこともある。年間純利益は推測で少なくとも 30 万元以上である。（企業秘密の関係で具体的な数字は教えてくれなかった）。

調査地三つの村において宴席を設ける事由について Z に聞き取りした。以下は調査内容を整理したものである。

- ① 結婚 出産 (紅喜子) (伝統的、正当な理由である)
 - ② 葬式 (古稀以上の葬式は白喜子と呼ぶ) (伝統的、正当な理由である)
 - ③ 抓周 3歳誕生日 10歳誕生日 本人及び結婚相手の33歳、36歳の誕生日
双方両親の還暦祝い、古稀祝い、傘寿祝いなど (非伝統的、正当な理由ではない)
 - ④ 家の新築 転居 (前者は伝統的、正当な理由であるが、後者はそうでない)
 - ⑤ 進学(大学または重点高校に合格した場合) (前者は伝統的、正当な理由であるが、後者はそうでない)
 - ⑥ 故人の墓碑を樹立記念 (非伝統的、正当な理由ではない)
 - ⑦ 瓦を替える (非伝統的、正当な理由ではない)
 - ⑧ 大病の見舞い (伝統的、正当な理由である)
 - ⑨ 各種の開店式 (非伝統的、正当な理由ではない)
 - ⑩ 軍隊に入る (非伝統的、正当な理由ではない)
 - ⑪ その他(理由なしの整酒) (非伝統的、正当な理由ではない)
- * 以上の分類はZが現地における長年の仕来りによって分けている。

事例⑬ B村民F(73歳) 裸の王様心理 2013年1月25日 金曜日 曇り

今、うちの村では‘一年两个酒挣钱，一年一个酒保本，两年一个酒亏本’(年二回宴席を設ければ儲かる、一回なら元が取れる、二年一回なら損する)という流行り文句がある。私は40年前から村では‘知客’²⁴⁹を勤めてきた、昔は「人到人情到」という言い伝え通り、出席だけすれば義理は尽くしたのである。したがって、いわゆる祝儀というのは小麦粉一キロとか、卵十個とかを持っていけば十分だった。その後、徐々に祝儀は実物ではなく現金化した。それにしても2000年前後までは20元の相場(親戚は80元、100元)だったが、ここ数年急激に上がってきた。このようなことは伝統習俗だと言う人もいるが、これは伝統習俗とは違い、ただ伝統習俗の中に義理の祝儀を利用して利益を獲得しているにほかならない。村民のほとんどはこの「ゲーム」に巻き込まれ、心の中でよくないことだと思っているが、なかなか脱出できない。周囲の人は皆やっているのだから悪いことと思わなくなり、まさに赤信号皆渡れば怖くない心理である。

²⁴⁹元の意味は、修行年数の多い修行僧の中から選ばれ、外部からの来客の接待、新たに入門した修行僧の世話などを行う修行僧を指しているが、調査地では、儀式の宴席を設ける家で主人の代わりに客をもてなす人を指す。

このようなこじつけの理由で宴会を設ける行為は裸の王様同然だと思われる。つまり、主人側も来客も皆心には認めないが、誰も非を問わない。挙句の果て、裏では皆嫌がっていることを表では誰も口に出さない。これは面子上の問題もあるが、それ以外に自分の出した祝儀は近い将来取り戻せるという‘安心感’が働いているから、宴席が続けられるのではないかと考えられる。2年前の村民会議で正当な理由がない限り宴席は設けるべからずという禁令を出したが、それまでたくさんの義理を重ね、祝儀を出した人が自分は損していると感じ、元は取り戻してからでないと協力姿勢を示さない。事態が一向に改善されない。このようなことに対して、本来なら政府が対策を立ててくれるべきなのに、2006年農業税が廃止されてからというもの、一層政府からの村に対する施策がなされなくなったので、我々はまるで政府に放棄されたような感じである²⁵⁰と聞き取りの最後にFが少し不満げに言った。

第2項 事例分析

以上参与観察とインタビューで得た事例を挙げて、調査地域の関連事情を紹介してきた。フィールド調査によると、多くの村民は年間30回以上宴席に出ている計算になる。それに伴う支出は年間平均的に2万円強である。宴席に出る回数の多い場合、支出が5万円を超える人もいる。調査を受けた人の9割以上の人が経済的な圧力を感じながら、次から次へと宴席に出席せざるを得ない。調査地の村民は愚痴を漏らしながら、宴席を設けたりまたは参加したりしている。儀式的司会、コックなどのサービスを一本化した専門業者と売店が繁栄し、数年で巨大なバリューチェーンを形成してきた。

原子化しつつある地域社会では、人々はお互いに祝儀で義理を維持し、再確認をする必要があると思われるから、義理の輪が徐々に拡大していき、祝儀などの負担が重くなるのはある意味で言えば避けられないかもしれない。このように義理は魔力のあるネットに変身し、中にいる人は皆被害を受けていて、現状を打破することが極めて難しい。このネットから脱出できない以上、人々が様々な方法を考え出して収支の均衡をとらなければならなくなる。こうしたなかで、義理の貸し借りは理性を超えて肥大化したものになり、人情味がなくなってしまい、宴席名目が次から次へと作り出されてきた。したがって、以上の事例にも示したように、こじつけても宴席を儲けて自分の出した祝儀を回収しようと

²⁵⁰ 外の村民との対談では、村民の要求に答えて政府が一度「紅頭文件」（政令）を公布したが、法律の根拠がないと指摘され、そのまま政令が無効になった。

する行為に変化した。

本来なら、同じ共同体に暮らしている人は、生命周期など様々な理由で義理の「周期」がずれているはずである。例えば、2010年の時点で25歳の人と45歳の人は義理の周期がかなり異なっている。通常地域社会では25歳の人は大抵結婚したばかりで、そして1年または2年後に子供が生まれて、宴席を設けることができるが、その後の十数年間宴席を設けるチャンスは非常に少ない。この十年間では、他人の宴席に出席し、祝儀のお金は出す一方で、義理の祝儀金額において、赤字が十年間も続くかもしれない。一方、45歳の人はその後の10年間では、家の新築、子供の進学、子供の結婚、両親の古稀祝い（あるいは葬式）など宴席を設ける機会が比較的が多い。そうすると、祝儀のお金が流入してきて黒字が保たれる。このように元々生命周期に伴って、ある期間内で義理の多寡は決まっているが、現在では将来の生活への予期が短期化し、できるだけ早く宴席を設けて義理の中での損失を挽回し、赤字を黒字に転じさせようとしている。結局皆自分にとって最も利益の高い行動をとるという個人的合理性が集団的不合理を招き、最終的に囚人のジレンマというパラドックスに陥ってしまうのである。

こうしたなかで、最終的には政府が行政命令によって事態の沈静化を図った。このような政府の介入は、調査地では一部の民衆の望んでいることである。だが、本来であれば、政府は民衆間の問題を解決するなどの理由であっても私的領域に入るべからず、と筆者は考えている。なぜなら、自由な空間は幸福実現の第一条件だからである。この自由な空間内で、民衆自身が地域社会の自己管理つまり自治を保障しなければならない。さもなければ、いつまでも人々の自治力が培われず、最後に行政がすべての人を後見的監督下に置く恐れが避けられないだろう。

第3節 地域社会の日常義理 —— ‘帮工’事情

第1項 ‘帮工’の構成と組織

かつて農業を中心としてきた地域社会では、田植えや稲刈りなど一度に大量の労力が必要だった。また、農作業だけでなく、屋根の葺き替えや冠婚葬祭などの場面でも協力関係が必要である。調査地B村とC村の主な農産物は米であるため、土地は集約型であり、水

を共同利用している田圃がほとんどである。水が円滑に利用できるためには、同じ水系を利用している人々への調整が必要である。このような生活生産において、地域社会の人々は相互依存関係が強かったのである。こうした濃密な人間関係を背景とした地域社会では、人々の間に互助関係が形成し、さまざまな作業で‘幫工’（人々が互いに助け合う関係、日本の結いに似ている組織）という形で共同作業が行われてきた。これまで家の建築などの大きなプロジェクトはもちろん、祝いの儀式と宴席を順調に進めるためには、かなりの人手が必要だった。こうした中で「幫工」という非正式な組織が形成されてきた。「幫工」の多くは近くに住んでいる隣人と友人から構成されていて、規模は数人から数十人までである。長い年月同じ共同体に暮らしているため、互助関係が割と安定的で、共同体の成員にとって非常に便利なことである。徐々に‘幫工’は地域社会において定着するようになり、仕来りになった。

以上述べたように、人々が自力で完成できないことを互助の形で仕上げることは地域社会ではよく見られる協力的行為である。「遠くの親類より近くの他人」という日本のことわざの言うように、近くの隣人は長年同じところに住んでいて、多くの場合遠くの親戚より力になる。費孝通の提示した‘熟人社会’では、人々は互いに知り合っていて、長期的な生活予期がある。こうした社会環境の中で、‘幫工’は一種の義理行為であり、人間関係を作る重要な手段である。‘幫工’は儀式の中で、主人側に協力して儀式を執り行い、場合によって来客を招待し、体力的な仕事も任せられることもある。例えば、調査地三つの村では葬式は土葬であるため、葬式の‘幫工’の最も重要な仕事は柩を担いで運ぶことと墓掘り²⁵¹である。それ以外に宴席の料理材料の購入から出来上がるまでの様々な仕事、机と椅子などを隣の家から借りる、来客にお茶を入れる、皿を運ぶなどはすべて‘幫工’のやることであった。

日常の‘幫工’は人々を関連させ、互いに貸し借りを持たせている。お互いに助けあっているうちに、相手の趣味とか気性などが分かるようになり、最終的に‘幫工’の組織共同体が形成されるようになる。このような社会では社会生活の資格を獲得するには、‘幫工’という協力し合う関係に参入しなければ人間関係が難しくなるのだが、‘幫工’は長年生活生産の中で自ずと形成してきたことなので、あくまでも非正式な組織であり、強制的ではなく、法律上では束縛力がない。

²⁵¹ 1997年までW市の農村では基本的に土葬である。1997年5月1日から原則は火葬となっているが、農村では火葬したあと、土葬するという混合的な方法を取っている。

近年では地域社会における市場化程度が高まるにつれて、地域住民の生活生産活動が徐々に市場経済に移行し、ますます経済効果を重視するようになり、伝統社会における日常生活の義理は次第に希薄化してきた。これまで家を建てる場合、同じ村の人は互助関係にあり、協力した人にその日の食事を出すだけで良かったが、現在は市場原理で現金を支払うようになった。今までの地域社会の互惠関係は伝統的な義理から離脱し、合理的な市場原理を遵守するようになった。とくに21世紀に入ってから、農村社会への市場経済の浸透が深まり、調査地における‘幫工’の事情が一変した。以下はA村村民Pの息子の結婚当日の参与観察とインタビューである。

少し前までの結婚式は少なくとも30人以上の「幫工」が必要だった。例えば各種の新婚家具を運ぶ²⁵²には20人以上、料理の準備が少なくとも6人、客のもてなしと祝儀の会計などは4人以上が必要になる。だが、近年‘幫工’の人がほとんどいなくなったので、皆一層‘幫工’に頼らず、専門の業者をお願いしている。レンタルカー会社に頼めば、車を用意してくれるだけでなく、新婚家具を運ぶ仕事も全部やってくれる。宴席の料理も専門業者に電話一本入れれば、主人側の予算に応じて料理の材料準備から椅子の用意まで悉くしてくれる。現在では、村民同士、友人、親戚はただ祝儀を出して宴席に出席するだけで良いのである。(2013年1月29日 火曜日 曇りのち晴れ)

以上の現象は宴席に限らない。家を建てるにしても、農作業にして、作業内容がかなり専門化、機械化されている。お金さえ払えば鉄筋コンクリートなどの家を作る材料を運んでもらえる。また、コンバインで農作業を全部やってくれる。つまり、今日まで土地集約型の農村社会の共同作業が必要とした社会背景は、現在各方面において社会分業によって‘幫工’の重要性が低下している。更に言えば、出稼ぎ経済の下、青壮年労働力はほとんど流出しているので、‘幫工’というシステムから離脱する人が多くなり、組織維持ができなくなっている。

第2項 葬式における強請

2008年の夏、調査地のB村では葬式の「抬轿」²⁵³である小さなことが起こった。亡くなった人は10数年前に外の村に嫁いだ娘しかいない。訃報を聞いた娘は翌日出稼ぎの主

²⁵² 調査地では、結婚当日朝早く新郎が「幫工」を率いて新婦の家へ家具を運びに行き、新婦の家で朝食をとってから各種の新婚家具と用具を担いで新郎の家に帰るといふ風習がある。

²⁵³ 調査地では柩を担ぐことの婉曲的な言い方

人と一緒に広東省から帰ってきた。猛暑のため、早く処理しなければ腐敗するので、急いで各家へ「抬轿」を懇願しに行った。夏の時期に半分以上の男性が出稼ぎに出ているので、家に残っていたわずかな男性は「抬轿」に行きたがらず、「抬轿」の役割を果たす12人を集めるのが一苦勞だった。在村男性の人数が少ないという原因以外に、もっと大きな理由は聞き取りで分かった。「亡くなった人は息子がなくて、嫁いだ娘は今後実家と関係があまりないので、たとえ「抬轿」に行ってもこの義理を覚えてくれず、ただで働くだけのことになる」という。このような事態に対して、村にまだ少し声望のある長老が見るに堪えず、駆け回って動員（お願い）したところ、何とか8人を集めることができた。しかし、出棺する当日の朝、墓地までの途中で止まり、「抬轿」に来た8人が亡くなった人の婿と娘に2400元をせびった。この出来事がきっかけで、その後の葬式では出棺する当日に柩を担ぐ人は亡くなった人の子孫または親戚に金銭をせびるのが習慣になった。（2015年8月6日 木曜日 雨 B村での聞き取り調査による）

以上、「幫工」という社会システムは徐々に賃労働に取って代われ、それに伴っていた義理も崩壊しつつある。人を雇うことで「抬轿」の問題を解決したことから分かるように、地域社会の人々が徐々に互助の組織から脱退している。これまでの「幫工」は互助と協力に基づいていて、労務の交換のみならず、人々の感情の交流と理解の増進にも役に立っていた。現在では「幫工」が見えなくなり、ほとんどは臨時的な雇用のような関係になっている。価格という基準で清算してドライな人間関係になるのは非常に便利であると思われるかもしれないが、しかしながら、人間味の溢れている義理から完全に市場にシフトして行くことが地域社会にとって喜ぶべきことであろうか。

第4節 小 結

本章では、調査対象地の義理と儀式の異化現象を取り上げ、近年、特に2006年農業税が廃止された後、異化した儀式と祝儀に関わる「整酒風」の心理、「幫工」の崩壊などのメカニズムを分析してきた。

コールマンが恩義、期待、構造の信頼性と社会関係資本について以下のモデルを提示した。「AがBのために何かを行い、Aは将来Bがそれに報いてくれると信頼しているとす。これによって、Aには期待が生まれ、Bには恩義が生まれる。この恩義を言い換えれ

ば、Bにとってなされるはずの行為に対するクレジット払い伝票をAが持っている状態と考えることができる。Aが自分と関係のある何人もの個人に対して大量のクレジット払い伝票を所有しているとする、それはそのまま財的資本になぞらえることができる。これらのクレジット（信用）払い伝票、必要があればAがあてにすることのできる信用の大きさを表していると言えるだろう。もちろんそれは、信頼を置くことが賢明な判断であり、それらが回収できない不良債権でないならばの話である。（・・・中略）ある種の社会構造においては、未決済のクレジット払い伝票が大量に存在し、しかもひとつの関係で結ばれた双方の側に存在することも多い。（・・・中略）このような形態の社会関係は、二つの要素に依存している。ひとつは、社会的環境の信頼性であり、これは恩義がいずれ報われることを意味している。もう一つは、負っている恩義が実際にどの程度かである」²⁵⁴。中国の地域社会では、政府の福祉サービスなどはまだ完備されておらず、他者からの援助ニーズが不要に近いほどの豊かさまで達していないため、高いレベルの常時未決済状態の恩義を内包し、社会関係資本のストックが豊富な社会を必要としている。だが、本章では見てきた通り、信頼が失れつつある村民間では、無理しても宴会などを通じて自分の‘支出金’を受け取り、密かに‘逃亡’して他の人に損害を与えることが発生すれば（効果的な制裁がなければ）事態の悪化が予想できよう。

原子化しつつある調査地では、祝儀が目的の宴席がすでに人々の大きな負担になっている。様々な宴席名目が発明されてきて、本来互助目的の祝儀が限度を超えて肥大化したものになり、人情味がなくなってしまった。人々の将来の生活への予期が短期化し、できるだけ早く宴席を設けて義理の中での損失を挽回し、赤字を黒字に転じさせようとしている。こうしたなか、人間関係を維持し、社会関係資本を豊かにしてくれるはずの義理が、本来の目的から外れ、むしろ逆行していると思われる。さらに事態を沈静化させるために、人々が自ら組織して問題解決を図るのではなく、政府に行政命令を下すように懇願したのである。

集合体内における指令的な規範は、社会関係資本の非常に重要な形態である。社会からの支持、地位、名誉、その他の報酬によって強化されたこの種の規範は社会関係資本である。それによって人々は行動する際、集合体の利益または日本でいう世間の目をも考えなければならない。「熟人社会」という閉鎖的な社会空間では、人々は容易に日常で慣れ親

²⁵⁴ James S. Coleman. (1988). pp214-215

しんでいる人間関係の範囲から抜け出すことはできず、何か非道徳的な行為でもしたら（たとえば何かスキャンダルでも発生したら）、行為者は周り近所の非難を受け、白い目で見られる境遇になる。そして、関連する情報は一が十になり、十が百になると速いスピードで広い範囲まで伝わってしまう。言い換えれば、地域社会ではいわゆる世間体というものがあり、この世間体こそ人々を拘束している規範であった。「人要臉，樹要皮」（人は顔を生かし、木は皮を生かす）をモットーにしている地域の人々にとって、「顔」と「面子」が日常生活では最も大切なことである。この面子と世間体は上に述べたように、拘束力があり、ある意味で言えばこれまでの地域社会の人々にとって重要な社会関係資本の要素である。地域社会の地理的な境界と社会的な境界が固定されていて、重なり合っている状況の下では、互いの長期的な相互扶助、そして力を持つ世間体の拘束の下で、互いの面子を立てながら人々の「関係」が雪だるまのように大きくなり、社会関係資本も累積され、かつ再生産されてきた。しかしながら、ここ数年大量の労働力が土地と故郷を離れ、日に日に空洞化している地域社会では、人々の中の紐帯が弱まり、社会規範になるものも次第に忘れられつつある。それに伴って、社会関係資本のストックの減少が避けられないだろう。さらに、儀式は地域住民に交流の場を提供する面で大きな役割を果たしていると言われている。儀式で互いの理解を深める交流だけではなく、日常生活と生産で発生した摩擦を解決する切っ掛けになること多かった。例えば、A家とB家の間に軋轢が生じたら、普段の生活での付き合いは勿論、話さえないのがほとんどである。何か儀式が行われることによって、両家の人と一緒に手伝ったり、また同じテーブルで食事をしたりすることがある。その際、共通の友達あるいは隣人が和解するようと説得し、こうした宴席のなごやかな雰囲気の中で、両家は過去の不愉快なことを共に水に流すことができた。このように、儀式は地域社会の人々の信頼関係と社会関係資本の増進に役立っていた。しかしながら、近年調査地では儀式に備わっている社会紐帯の確認、結合化という機能が作用しなくなり、逆に作用しかねない差異化の行動をとるに至り、こうして地域社会では無意識のうちに儀式の役割に逆行しているのである。

終章：総括

本稿では、移行期における中国地域社会について、インテンシブなフィールド調査に

に基づき、内陸農村の文化と風俗の変容を社会関係資本のあり方という視点から分析してきた。本稿の時代背景を総じていえば、ここ十数年以来、中国では特に農村地域では歴史的にほとんど見られない大きな変化が起きている。その変化として挙げられるのは、第一に、中国全体の経済が急速に成長してきて、農村社会も国全体の経済発展の恩恵を受け、経済的に底上げできたことである。第二に、全体的な経済発展の裏で都市と農村の格差が拡大しつつある。出稼ぎ労働者が急速に都市部に移動し、移動先に定住する規模は今までの時代にも存在しなかった。第三に、農業税廃止に伴って、国家機関の農村社会における行政力が衰弱化していて、農村社会へのコントロールが徐々に難しくなってきた。第四に、人の動きに伴って農村社会における伝統行事と伝統文化が消えるにつれて、従来の秩序と規範などが失効しつつあり、地域社会の社会関係資本がますます薄まっているのである。

本稿は主に五つの部分に分かれている。まず序章では本稿の社会背景と関連概念について説明を行い、地域社会に関する様々な分野の先行研究に触れた上で本稿の調査概要と研究方法など基本的な部分を紹介した。第1章では、調査地 A、B、C の三つの村において現在進行しつつある協力困難、教育荒廃、宗教信仰の実態と文化行事の衰退などのそれぞれの実態を示した。調査地では社会関係資本が薄まっていて、人々が自分の社会責任を果たそうとせず、村民間に協力関係の形成は困難な状態に陥っている。地域社会では市民社会の形成が難しく、人々の間に各階層がばらばらになっているような断裂社会に突入し、社会関係資本が豊かになるのは現状からみれば極めて難しいと判断した。そして第2章では、調査地におけるラスベガス化現象――賭博の蔓延に焦点を当て、その背景にある地域社会の様々な関連事情を分析し、娯楽施設の不備と文化活動の欠乏などの原因以外に社会的な原因をも探ってみた。また、賭博が地域社会の社会関係資本に大きな影響を与えたことについての分析も行った。さらに第3章では、地域社会の義理と儀式の異化現象を調査し、異化した儀式と祝儀に関わる‘整酒風’の心理、‘帮工’の崩壊などのメカニズムを分析した。本来なら義理と儀式は人々の信頼関係を強め、社会関係資本の増進に役立つのであったが、本稿では義理と儀式が本来の目的から外れ、むしろ逆走していて、社会関係資本を豊かにするどころか、逆に破壊していることが観察された。以上の論証部分では、文化と風俗の変容を社会関係資本というアングルから考察し、そして人と人の結びつまり社会的結合がいかにか失われてきたかを実証的に論証してきた。わずかに三つの村で行った調査は中国地域社会の全体を反映することができないが、しかし本稿は華中地域の‘非原子

化村’から‘原子化村’に移行しつつある村での社会変動に関して新たな観点を提供したと思われる。

社会関係資本と市民参加の変化は何によってもたらされるのか。近代化理論が最も卑近な例である様々な通説は、産業革命とそれに伴う技術革新を始点とする軌跡について記述してきた。そこでは、人間関係の密な農村地方から、巨大で、匿名性が強く、細分化された都市への人口の大移動は、地域共同体と社会関係資本の全般的な衰退へと繋がる。また、技術革新は、たしかに、社会関係資本の変化をもたらしている推進力の一つである。二〇世紀の後半には、世紀の初めにはほとんど想像もつかなかったような数々の発明や新機軸が急速に広まった。娯楽のためのテレビもあれば、通信のための携帯電話、電子メールもあれば、情報のための新技術インターネット（スマートフォン）もある。これらの技術は、社会関係資本に対して幾多の影響をもたらした。一方において、これらの技が、たとえ広大な空間にまたがるものであっても、我々が自分たちの社会的ネットワークを維持できる能力を高めたことは疑いない。他方において、これらの技術は、市民的・社会的な生活から一部の人々の撤退を促す、という影響も持った。

個々のリーダーたちに上からつきまとい、社会関係資本に影響を及ぼしているのが、国家である。ここで国家というのは、政府の諸機関と、それら諸機関が推進する特定の政策の意味である。同じ国家といっても、自主的な団体の結成やメンバーの募集を容易にするために、それらの団体に税制上の優遇措置を講じてきた国家がある一方、自由な団体の結成を積極的に阻止してきた国家もある。また国家の中には、市民グループが公の事柄に関与しやすいような、比較的オープンで、分散化し、分権化した政治構造をとっているものがある。教育は市民参加の将来を占う重要な指標だとの認識に立って、多くの国家は、大規模な公教育を実施することによって、人的資本の形成だけでなく社会関係資本の形成を奨励してきた。また、国家の中には、労働組合や企業団体などの集団を、公共政策の立案や実施に直接に参加させることによって、それら集団の目的意識や連帯感を強めているものもある。

言うまでもないことであるが、社会人口の動的な変化も、一国の社会関係資本のストック量に影響を及ぼす。頻繁な転居や遠距離通勤など、または長期間出稼ぎで留守していることがこれに当てはまる。本来ならこれらの労働力は地域社会の中で最も活躍する成員であり、一家の大黒柱であり、地域社会の公共事業の参加者であるが、青年・壮年が大量

に出稼ぎに行ったため、地域社会への愛着心を持っていて、リーダーシップの取れる人確保できなくなる。現在の状況が続いていけば、人、資源、資金がさらに地域社会から流出していき、地域社会は一層貧弱になってしまう。そうすると、地域社会では日常生活の営みは「熟人社会」の行動ロジックと異なるものになり、第三章で見た異化現象のような‘逸脱’行為が現れることになるだろう。まだ調査の不十分さと考察の厳密性の不足があることは承知の上で、あえて述べるなら、本稿では現在中国地域社会に現れた様々変容の原因が以上挙げた要素以外にほかの要素も探ってみるべきである。

(1) 現代社会の‘市場全体主義²⁵⁵’と‘安楽への全体主義²⁵⁶’による阻害

改革開放後、国家の社会全体に対する束縛は少しずつ緩和してきた。それに伴って、‘社会’がある程度解放されてきた。しかしながら、この国家と個人の間にある中間層の存在である‘社会’がまだ健全に発達していない段階で、新たな局面に直面した。それは消費主義ないしジャン＝ピエール・ルゴフが提唱している‘市場全体主義’²⁵⁷と呼べるような経済至上主義である。現代中国では、まだ「社会」は「国家」から十分に自立していない。改革開放政策により、経済の面での「自由化」が実現し、市場経済が闊歩しつつあるに見えるかもしれないが、しかしながら、社会や文化の次元においてはいまだに国家の規制が続いている。たとえば、言論報道における如くである。こうした状況のなかで、市場主

²⁵⁵全体主義（英語 Totalitarianism）とは、個人の全ては社会全体の利益あるいは意思に従属すべきとする思想、または政治体制の一つである。この体制を採用する国家は、通常一人の個人や党派または階級によって支配され、その権威には制限が無く、公私を問わず国民生活の全ての側面に対して、可能な限り規制を加えるように働く。イタリア現代史学者エンツォ・トラヴェルソは「全体主義の概念の起源には、第一世界大戦で生まれた三つの歴史的経験、すなわち、イタリアのファシズム（一九二二～四五）、ドイツの国民社会主義（一九三三～四五）、ロシアのスターリンリズム（一九二〇年代から一九五〇年代）がある。その形成過程、イデオロギー、社会基盤の実質的な相違はともかく、以上の三つの体制は前代未聞のものであり（中略）・・・全体主義が法治国家の対極にあるという点だけは、観察者の誰もが一致していた」²⁵⁵と述べ、「全体主義——スターリンリズムやナチズム——は、『国家』と『社会』の境界を消し去ろうとする。言い換えれば、市民社会は国家の内に吸収されてしまう。国家はリヴァイアサンとビヒモス（ともにホッブスの著書のタイトルとなった神話の怪獣）の古典的二元論を廃棄した（中略）・・・つまるところ全体主義は、社会体（それなしにはいかなる自由も実現不可能な）を貫いている異種性、葛藤、多様性の場として定義された（政治的なもの）を、無化することに他ならない。全体主義がリヴァイアサンとビヒモス、つまり権力と不法性の怪物的な総合であることは、何百万という犠牲者を出す（国家の暴力）が証明している。全体主義の恐怖政治は、人々の権利を無視し踏みにじりながら、合理的な近代国家に特有の方法と秩序に基づいて使用される武力を、国家が独占することを前提にしている」と全体主義の下にある「国家」と「社会」の関係について論じた。

²⁵⁶日本思想史家・政治学者の藤田省三は全体主義について、「戦争の在り方における全体主義」と「政治支配の在り方における全体主義」と、さらに加えて「生活様式における全体主義」と三つの形態がある²⁵⁶と指摘した。藤田は「前の二者の関連は見抜き易いし、今でも相互に繋がりがあったものとして論じられてきたが、『生活様式の全体主義』は通常の社会意識の中では、『経済中心主義』の一環であって、従って平和主義的なものであり、前の二つの暴力的全体主義とは反対のものであると思われるがちである」と述べ、そして今日の社会では「安楽」が第一義的な追求目標になり、「安楽への隷属状態」が現れ、結局「安らぎを失った安楽」という未曾有の逆説が出現したと現在進行中の安楽への全体主義²⁵⁶への懸念を示した。

²⁵⁷ルゴフ(2011) p. 13

義経済のみが突然怒涛のように地域社会に入り込んできたおかげで、社会が漸進な歩みではなく、急激な金銭社会に陥り、個人的欲求の追求だけが行為の動機として選択され、個人と個人の結びつきを作ろうとする動機と意欲を大幅に減少させた。このように個々人の行動は自由化したように見えるかもしれないが、実際には、社会を構成する中身はばらばらに分裂してしまった。このような‘断裂社会’になった中国では、‘組織されている社会’が欠如し、‘社会’の自立が阻まれている。社会関係資本の衰退にはこうした背景がある。このような‘社会’のない地域社会では社会関係資本は豊かになることが考えにくいだろう。

現在ではどうやって‘市場全体主義’のもたらした影響を阻止することができ、そして互いに無関心で、個々人が孤立状態に近い人たちを解放し、地域社会の人々が共通問題に取り組むように目を向けさせることができるだろうか。言い換えればどのようにして人と人の結びつきを取り戻せるのかを考えなければならない。やはり、地域社会における社会関係資本を豊かにするには、皆んなで協力して成し遂げるような機会を設けて、人間関係の結びつきつまり社会的結合を醸成させていくことから始めるべきと思われる。なぜなら、社会的結合があって初めて社会関係資本が育まれるからである。本論では、社会関係資本の名目によって一括りに論じてきたが、実質的には社会的結合がいかに破壊されてきたかを論証してきたのである。社会的結合があって、その先に社会関係資本が醸成され、機能していくことになるが、その検討が十分に行われなかった。また、本論では社会的結合と社会関係資本との関係を厳密に区分し、その相互作用を考察してこず、社会関係資本の検討のうちに含ませて、一括りに論じてしまったきらいがある。両者の厳密な区別及び相互作用については、今後の課題としてより緻密に解明していきたい。

終わりに

長い間、私は心の中にはある叫び声が響いている。‘今の状態は本当の生活ではない、このような状況を続けて行けば、生きがいを実現できる生活にはならない’という声である。さらに、現在自分のやっていることに疑いを抱き始め、恥さえ感じたことがある。教

育の仕事に携りながら研究を行ってきたが、このような生活は自分の心の奥底に思っている生活とかなり掛け離れている。振り返って見れば、大学に進学したのを契機に故郷を後にしてから既に十数年も経った。だが、故郷への思いが絶えることはなかった。十八年も生活していた故郷は今の私にとって、重みと悲しみを感じる引き金となっている。とりわけ近年様々な現象を目の当たりにして、なんとなく故郷は徐々に遠ざかっているような感じがする。

本稿では幾つかのところで19世紀フランスの社会学者トクヴィルの著作『アメリカのデモクラシー』を引用した。この本ではトクヴィルは祖国愛について以下のように述べている。「祖国愛には人の心を生地結びつけるあの定義しがたい感情、理屈抜き、損得抜きの感情に主要な源泉をもつものがある。この本能的愛情は、古い習慣を好み、祖先を敬い、過去を懐かしむ気持ちと一体である。このような祖国愛を身に感ずる者は生家を愛するように国を慈しむ。こうした祖国愛はまたしばしば宗教的な情熱によって高められ、そうになると、祖国愛は驚くべき働きをする。祖国愛それ自体一種の宗教であり、理屈ではなく、信じ、感じ、そして行動するところにその本質がある²⁵⁸」。トクヴィルがここで言っている祖国愛はむしろ郷土愛に近い感情と思われる。本稿の執筆がきっかけで、筆者は自分の生まれ育った故郷を再認識し、移行期における中国地域社会の現状に対して心を痛めた。費孝通が「かつての農村社会は子供を外に送って教育を受けさせる。この行為は農村社会を改善するどころか、逆効果しかない²⁵⁹」と指摘したように、現在の教育は農村社会の人材が吸い上げられることを助長し、まるで鉱物の採掘と同じように郷土社会を侵食しているだけである。都市は農村から人、資源、金などを吸い上げる一方で、地域社会に反哺することがない。

筆者はたびたび脳裏に農民のいない世界はどんな世界になるだろうという疑問を浮かべる。フランスの社会学者ヘンリ・メンデラスは『農民の終結』の終わりでも読者にこのような問題を問いかけた。今日の中国はまだ農民の終結問題に直面していないから、検討に値しないと思うかもしれないが、私は農民という職業がなくなるのを心配しているのではなく、地域社会がなくなるのを憂えている。事実、イギリスでも、アメリカでも、フランスでも、地域社会は現代化の進行に伴って消失していない。地域社会は依然として人々の深いところに宿っている靈魂を安置する場所としての役割を果たし続けている。やはり、

²⁵⁸ トクヴィル (2005b) p. 119

²⁵⁹ 費 (2012) p. 51

地域社会という‘郷土’がなければ、人々にとっての都市は根のない浮き草に過ぎず、帰途のない旅であるところの論を書き上げ、その最後に筆者には思われる。

謝 辞

この研究を博士論文として形にすることが出来たのは、終始ご指導、ご助言を頂きました、一橋大学言語社会研究科教授糟谷啓介先生、東京大学総合文化研究科准教授阿古智子先生のおかげです。ここで厚く御礼を申し上げます。特に分析においても書き方においてもつたない論文を読んで頂き、ご指導していただいた糟谷先生に大変苦勞をかけてしま

いましたことに心よりお詫びを申し上げます。

また、本稿の遂行にあたり、一橋大学言語社会研究科教授鈴木将久先生、イ・ヨンスク先生、星名宏修先生、田原史起先生の研究会やワークショップ、サブ・ゼミナールや授業に参加させていただくことを通じて、大変有益且つ的確なご教示・助言を頂きました。

さらに、本論文を作成するあたり、何度も拙稿を読んでいただき、懇篤なるご指導とご高閲を承りました元一橋大学言語社会研究科秋谷治教授に心より深く感謝しております。

最後に、大学時代の恩師岩田泰大先生、内海満男先生、奥村功先生、またフィールドワークの調査地で貴重な時間を割いて調査に協力していただいた皆様、さらに小生の所属である華中師範大学外国語学部日本語科の同僚をはじめ、ここに名をあげない多くの皆様が様々な面において支えてくださったことに心から感謝し、御礼を申し上げて、謝辞と致します。

資料・参考文献

本論文の参考文献の表記方法について、本の場合は著者、出版年、文献名、出版社で論文の場合は著者、出版年、論文名、雑誌名、発表時間という順番で並べる。

柏 楊（1985）『丑陋的中国人』人民文学出版社

彼得・M. 布劳（2013）『社会生活中的交換与權力』李国武訳 商務印書館

- 蔡元培 (1963) 『蔡元培美学文選』 北京大学出版社
- 陳柏峰 (2011) 『鄉村江湖：兩湖平原“混混”研究』 中国政法大学出版社
- 董磊明 (2005) 『大力發展繁榮農村文化』 人民日報 2005 年 12 月 12 日 第二版
- 費孝通 (1998) 『鄉土中国生育制度』 北京大学出版社
- 費孝通 (2012) 『鄉土重建』 岳麓書社
- 戈春源 (2010) 『賭博史』 上海文芸出版社
- 戈夫曼 (2008) 『日常生活中的自我呈現』 馮鋼訳 北京大学出版社
- 郭于華 (2011) 『傾聽底層』 廣西師範大學出版社
- 郭于華 (2000) 『儀式与社会變遷』 中国社会科学文献出版社
- 哈维尔(ハヴェル)(2003) 『哈维尔文集』 崔衛平訳 商務印書館
- 韓立紅 (2008) 『日本文化概論』 南開大學出版社
- 賀雪峰 (2007) 『鄉村的前途』 山東人民出版社
- 賀雪峰 (2008) 「農民價值觀的變遷及對村治理的影響」 『鄉村文化与新農村建設』 社会科学文献出版社
- 賀雪峰 (2009) 『村治的逻辑—農民行動單位的視覚』 中国社会科学出版社
- 賀雪峰 (2010) 『鄉村社会關鍵詞』 山東人民出版社
- 賀雪峰 (2013) 『新鄉土中国』 北京大学出版社
- 黄光国 (2004) 『面子：中国人的權力游戏』 中国人民大学出版社
- 赖特·米尔斯 (1996) 『社会学的想像』 張君玫訳 台湾远流圖書公司
- 李小雲、趙旭東、葉敬忠 (2008) 『鄉村文化与新農村建設』 社会科学文献出版社
- 李友梅 孫立平 (2009) 『轉型社会的研究立場和方法』 社会科学文献出版社
- 梁漱溟 (1929) 『東西文化及其哲学』 上海商務印書館
- 梁治平 (1996) 『清代習慣法：社会と国家』 中国政法大学出版社
- 梁 鴻 (2015) 『中国在梁庄』 中信出版社
- 陸学芸 (2002) 『当代中国社会階層研究報告』 社会科学文献出版社
- 罗伯特·芮德菲尔德 (2013) 『農民社会与文化』 王莹訳 中国社会科学出版社
- 牛 镛 (2010) 『農村賭博猖獗的原因及对策』 新西部
- 史鳳儀 (1999) 『中国古代的家族与身份』 社会科学文献出版社
- 孫 浩 (2012) 『農村公共文化服務有效供給研究』 中国社会科学出版社
- 孫立平 (2009) 『重建社会—轉型社会的秩序再造』 社会科学文献出版社
- 田原史起 (2012) 『日本視野中的中国農村精英：關係、團結、三農政治』 山東人民出版社

- 王銘銘 (2004) 『溪村家族』 貴州人民出版社
- 吳理財 (2011) 『当代中国農民文化生活調查』 知識産権出版社
- 武小燕 (2013) 『改革開放後中国の愛国主義教育』 大学教育出版
- 徐 平 (2008) 「社会主義新農村建設と文化建設」 『鄉村文化与新農村建設』 社会科学文献出版社
- 徐 勇 (2008) 『中国農村研究』 中国社会科学出版社
- 熊培云 (2012) 『一個村庄里的中国』 新星出版社
- 熊培云 (2013) 『这个社会好吗』 群言出版社
- 熊培云 (2013) 『重新發現社会』 新星出版社
- 許紀霖 (2011) 『讀書人站起来』 中国人民大学出版社
- 許紀霖 (2014) 『中国何以文明』 中信出版社
- 于建嵘 (2011) 『底層立場』 上海三聯書店
- 張建雲 (2012) 『農村現代化与農村就地城市化研究』 中国社会科学技術出版社
- 鄭杭生 (1996) 『中国人民大学社会發展報告』 (1949-1995) 中国人民大学出版社
- 鄭也夫 (2001) 『信任論』 中国广播電視出版社
- 鐘 燕 (2012) 『花都区農村賭博犯罪調查報告』 城鄉建設・法制与社会
- 周維紅 (2008) 『農村工業化論』 中国社会科学出版社
- 資中筠 (2014) 『老生常談』 廣西師範大学出版社
- 『W 市県誌』 (1994) 湖北省 W 市地方誌編集委員会 漢語大詞典出版社

日本語文献：編著者の五十音順

- 阿古智子 (2009) 『貧者を喰らう国』 新潮社
- 天児慧 (1998) 『現代中国一移行期の政治社会』 東京大学出版会
- 石黒広昭・亀田達也 (2010) 『文化と実践』 新曜社
- 稲葉陽二 (2015) 『ソーシャル・キャピタル』 入門 中公新書

- 色川大吉（1984）『民権百年：その思想と運動』日本放送出版協会
- エンツォ・トラヴェルソ（2010）『全体主義』柱本元彦訳 平凡社新書
- 王文亮（2003）『中国農民はなぜ貧しいのか』光文社
- 汪 錚（2014）『中国の歴史認識はどう作られたのか』東洋経済新報社
- 大澤真幸（2010）『社会学辞典』弘文堂
- 大塚久雄（2000）『共同体の理論』岩波現代文庫-学術
- 奥崎裕司（1978）『中国郷紳地主の研究』汲古書院
- ギュスターヴ・ル・ボン（1993）『群衆心理』櫻井成夫訳 講談社学術文庫
- 菊谷和広（2015）『「社会」のない国、日本』講談社
- 坂本治也（2010）『ソーシャル・キャピタルと活動する市民——新時代日本の市民政治』有斐閣
- 下村湖人（1947）『次郎物語』第3部 小山書店
- ジャン＝ピエール・ルゴフ（2011）『ポスト全体主義時代の民主主義』渡名喜庸哲/中村督訳 青灯社
- 鈴木栄太郎（1990）『日本農村社会学原理』クレス出版
- 菅谷実・金山智子（2007）『ネット時代の社会関係資本形成と市民意識』慶応義塾出版社
- 首藤明和（2003）『中国の人治社会』日本経済評論社
- 園田茂人（2004）『変貌する中国の家族』監訳 岩波書店
- 田原史起（1998）『現代中国における権力と支配』アジア政経学会
- 坪郷實（2015）『ソーシャル・キャピタル』ミネルヴァ書房
- デュルケム（1985）『自殺論』宮島喬訳 中公文庫
- デュルケム（1989）『社会分業論』（上）井伊玄太郎訳 講談社学術文庫
- デュルケム（1989）『社会分業論』（下）井伊玄太郎訳 講談社学術文庫
- 富永健一（2001）『社会変動の中の福祉国家—家族の失敗と国家の新しい機能』中央公論新社
- 富永健一（1990）『日本の近代化と社会変動』講談社学術文庫
- 富永健一（1987）『社会構造と社会変動—近代化の理論』放送大学教育振興会
- トクヴィル（2005a）『アメリカのデモクラシー』第一巻（上）松本礼二訳 岩波書店
- トクヴィル（2005b）『アメリカのデモクラシー』第一巻（下）松本礼二訳 岩波書店
- トクヴィル（2005c）『アメリカのデモクラシー』第二巻（上）松本礼二訳 岩波書店
- トクヴィル（2005d）『アメリカのデモクラシー』第二巻（下）松本礼二訳 岩波書店
- トクヴィル（1998）『旧体制と大革命』小山勉訳 ちくま学芸文庫
- 中根千枝（1967）『タテ社会の人間関係』講談社現代新書

- 中藤康俊 (2012) 『中国 岐路に立つ経済大国—四半世紀の中国を見て』 大学教育出版
- ナン・リン (2008) 『ソーシャル・キャピタル—社会構造と行為の理論』 ミネルヴァ書房
- ハイエク (1992) 『隷属への道』 西山千明訳 春秋社
- ハイエク (2009) 『致命的な思い上がり』 渡辺幹雄訳 春秋社
- パッペンハイム (1960) 『近代人の疎外』 岩波新書
- ハンナ・アーレント (1974) 『全体主義の起源』 大久保和郎 大島かおり訳 みすず書房
- フーコー (1977) 『監獄の誕生』 田村叔 訳 新潮社
- プラス (1985) 『日本人の生き方』 岩波書店
- 藤田省三 (1997) 『全体主義の時代経験』 みすず書房
- 濱嶋 朗 (2005) 『社会学小辞典』 有斐閣
- ボーゲル (1968) 『日本の新中間階級—サラリーマンとその家族』 誠信書房
- ホアン・J・リンス (1995) 『全体主義体制と権威主義体制』 高橋進 監訳 法律文化社
- 保母武彦 (2013) 『日本の農山村をどう再生するか』 岩波現代文庫
- マイケル・エドワーズ (2008) 『「市民社会」とは何か』 堀内一史訳 麗澤大学出版社
- 増川宏一 (1983) 『賭博』 法政大学出版局
- 三隅一人 (2013) 『社会関係資本——理論統合の挑戦』 ミネルヴァ書房
- 見田宗介 (1970) 『現代の生きがい - 変わる日本人の人生観』 日本経済新聞社
- 見田宗介 (1996) 『現代社会の理論—情報化・消費化社会の現在と未来—』 岩波新書
- 見田宗介 (2006) 『社会学入門 - 人間と社会の未来』 岩波書店
- 諸富 徹 (2003) 『環境』 岩波書店
- 安丸良夫 (1999) 『日本の近代化と民衆思想』 平凡社
- 安丸良夫 (2007) 『文明化の経験—近代転換期の日本』 岩波書店
- 柳田国男 (1998) 『柳田国男全集』 第十三巻 ‘日本の祭り’ 筑摩書房
- ランドル・コリンズ (2013) 『脱常識の社会学』 第二版 岩波現代文庫
- ルース・ベネディクト (2005) 『菊と刀』 長谷川 松治訳 講談社学術文庫
- ロバート・D・パットナム (2006) 『孤独なボウリング』 柴内康文訳 柏書房
- ロバート・D・パットナム (2001) 『哲学する民主主義—伝統と改革の市民的構造』 河田潤一訳 NTT 出版
- ロバート・D・パットナム (2013) 『流動化する民主主義——先進 8 カ国におけるソーシャル・キャピタル』

ロナルド・ドーア (1962) 『都市の日本人』 岩波書店

論文

阿古智子 (2009) 「水利・土地利用から見た湖北省農村の社会関係資本」 『近きにありて』 汲古書院
第55号 pp. 113-120

阿古智子 (2016) 「現代中国における「公民運動」のポテンシャル」 国際問題 2016年3月 No. 649
pp. 36-48

鮑曉会 (2007) 「当代農民的賭博娛樂觀」 河北理工大学学報 2007 (2)

村上俊介 (2010) 「市民社会・社会関係資本・市民文化--近代のプロジェクト?--」 『社会関係資本研究
論集』 第1号 pp. 151-168

大守隆 (2011) 「アジアのソーシャル・キャピタルとその地域統合への含意」 『社会関係資本研究論
集』 第2号 pp. 13-25

郭于華 (2016) 「我们离威权主义模式尚有相当距离」 『中国与世界觀察』 2016年第2期

郭宏斌 (2006) 「転型期農村礼物不对等交換的社会学解讀---以L村為例」 西北師範大学修士論文

黄玉琴 (2002) 「礼物、生命儀礼和人情圈---以徐家村為例」 社会学研究 (4)

田原史起 (2009) 「道作りと社会関係資本---中国中部内陸農村の公共建設」 『近きにありて』 汲古書院
第55号 pp. 121-131

陸治業 (2011) 「城鎮化過程中農村賭博犯罪高発的調查報告」 法制与社会

李 斌 (2009) 「差序格局下农村社会資本的重构---基于新农村建設中社会資本的经验研究」 石家庄鉄道
学院学報 (社会科学版) 第3卷 第3期

李 軍 (2006) 「新農村建設中的社会資本問題刍议」 南京市行政学院学報(3) pp.84-88

李培林 (1995) 「中国郷村里的都市工業」 『社会学研究』 (1)p. 20-29

馬紅梅 (2012) 「農村社会資本理論及其理論框架」 河北經貿大学学報 第33卷 第2期

茅于軾 (2014) 「教育的目的是什么」 『中国青年』 第23期

牛 镞 (2010) 「農村賭博猖獗的原因及对策」 新西部 (下半月)

上田和勇 (2010) 「現代企業經營におけるソーシャル・キャピタルの重要性」 『社会関係資本研究論集』
第1号 p. 15

尚会鵬 (1996) 「豫東地区婚礼中的‘随礼’現象分析」 社会学研究 (6)

宋麗娜 (2011) 「人情的社会基礎研究」 華中科学技術大学 (博士論文)

王李娜 (2008) 「社会学視野的農村賭博問題研究---以皖広徳県為例」 南京師範大学 (修士論文)

吳志強 (2008) 「中国における新規大卒者の職業達成に関する地域要因の実証研究」 神戸大学大学院人
間発達環境学研究科研究紀要第1巻 第2号

- 徐学慶 (2001) 「原階段農村賭博氾濫的原因及治理对策」 河南教育学院報
- 徐贲 (2005) 「中国的‘新極權主義’及其末世景象」 当代中国研究 第4期 (總第91期)
- 楊華 (2008) 「人情的性質及其变化」 中南財經政法大学研究生學報 (1)
- 袁松 (2009) 「民間信仰的情感之維与村庄公共生活的整合」 湖北民族学院學報 (哲学社会科学版) (4)
- 趙智慧 (2011) 『从農村賭博現象看農村文化建設的缺失——以土地流轉地区為例』
中国集体經濟·新農村建設
- 張永健 (1994) 「婚姻喪礼礼俗与中国傳統農民家庭制度」 社会学研究 (1)
- 張書強 周通 (2013) 「当前農村賭博犯罪案件的狀況分析」 城鄉建設·法制与社会
- 張 成 (2016) 「移行期における中国地域社会の賭博に関する実証研究——湖北省のある村を事例に」
『21世紀東アジア社会学』 p. 195
- 張千帆 (2013) 「重讀托克维尔『旧制度与大革命』」 中華讀書報 2013年3月27日 第010版
- 鄭伝貴 (2006) 「社会資本在社会發展中的作用」 學術交流 (11) p. 127-131
- 鄭也夫 (2016) 「農村孩子為何越来越不想讀書」 『同舟共進』 第6期
- 周大鳴 (2006) 『農村勞務輸出与打工經濟：以江西省為例』 中南民族大学學報 (人文版) 第26卷1期
- 鐘漲宝 (2002) 「社会資本理論对農村社会結構變遷的解釋功能」 『華中農業大学學報』 社会科学版 (1) p. 65
- 鐘 燕 (2012) 「花都区農村賭博犯罪調查報告」 城鄉建設·法制与社会
- 鐘啓華 (2006) 「農村賭博現象看中国農村社会變遷」 「J」 法治与社会
- 朱曉莹 (2003) 「‘人情’的泛化及其負功能——对苏北一农户人情消費的个案分析」 社会 (9)

英文文獻

- Blau P.M. Exchange and power in social life ,New York :Wiley ,1964.
- Bourdieu, P. ‘The forms of capital ’ (R.Nice Trans.) ,In J.G.Richardson(Ed.) ,Handbook of the theory and research for the sociology of education (New York: Greenwood press, 1996) pp. 95-120.
- Bourdieu, Pierre, ‘The Forms of Capital ’ Halsey ,A. H., Hugh Lauder ,Phillip Brown ,and Amy S. Well (eds.) ,Education: Culture, Economy, and Society , Oxford University Press (1997) pp46-58
- Coleman, J. S. ‘Social capital in the creation of human capital, ’ American Journal of Sociology ,94, Supplement (1988), pp95-120
- E. B. Tylor, Cultural Anthropology: The science of Custom , Standford University Press, 1958, p. 18
- L. J. Hanifan, ‘The Community Center ’ (Boston: Silver Burdett, 1920) pp9-10
- L. J. Hinifan , ‘The Rural School Community Center ’ Annals of the American Academy of Political

and Social Science 67 (1916), pp130-138

Putnam R. D. Making Democracy Work : Civic Tradition in Modern Italy (Princeton ,NJ: Princeton University Press ,1993)

Stolle, Dietlind , 'The Sources of Social Capital ' in Hooghe and Stolle, 2003, pp. 29-30

新聞とニュース

<http://news.163.com/10/0910/07/6G736HTV00014AEE.html>

http://news.ifeng.com/gundong/detail_2013_05/18/25447346_0.shtml

<http://ja.wikipedia.org/wiki/端午>

付録1：问卷调查 「当今农村社会的文化、生活、娱乐、习俗的相关调查」

您好！为了解现在农村社会的文化和娱乐现状以及村民的生活习俗，探索乡村文明建设的有效途径，我展开这次问卷调查。本次调查采取不记名形式进行，所有数据只用于本次调查与研究，请您根据实际情况和真实感受填写。衷心感谢您的协助与支持！

1. 您的性别：A 男 B 女
2. 您的年龄：A 15-20 B 20-35 C 35-55 D 55 以上
3. 您的婚姻状态 A 未婚 B 已婚 C 离婚或者丧偶
4. 您现在主要从事什么工作？A 务农为主 B 打工为主 C 经商为主 D 其他
5. 您的文化程度：A 无入学经历 B 小学 C 初中 D 高中 E 中专、技校 F 大专以上
6. 您在村里担任：A 村干部 B 村干部 C 普通村民
7. 您目前的年均收入多少？
A 5千 -1 万元 B 1万-两万 C 两万-三万 D 3万-4万 E 4 万以上
8. 与同村人相比，您的收入水平是高还是低？
A 上等 B 中偏上等 C 中等 D 中偏下等 E 下等
9. 您家近几年盖房子了吗？什么时候盖的？
A 没盖 B 7年前盖的 C 5年前盖的 D 3年前盖的 E 1年前盖的
10. 个人利益和集体利益哪个更重要？
A 个人利益 B 集体利益 C 都重要
11. 是否在意邻居等数人对自家（自己）的看法？
A 重视 B 一般 C 不重视

12. 您对自己的孩子有什么期望?
- A 有权、有势、衣食无忧 B 知性、答礼、崇尚科学
C 诚实、善良、开心生活 D 简单、质朴、脚踏实地
13. 您觉得对于像您父母一样的老人来说, 什么对他们来说是最重要的?
- A 子女的陪伴, 安享晚年 B 身体的健康, 生活快乐
C 子女过的好, 生活踏实 D 继续原来的, 平安就好
14. 您对孩子的未来和教育有什么看法?
- A 要上大学, 走出村子 B 要上大学, 回到村里
C 不用上大学, 有点知识就可以 D 上学没有用, 不用上
15. 您在普通衣食住行后, 余钱一般喜欢用在哪里?
- A 存银行 B 购买奢侈品 (如小汽车) C 投资 D 满足精神文化需求 E 其他
16. 您认为一个人在外取得成功后, 应该建设自己的村子吗? (这个人假设是自己)
- A 应该 B 不需要 C 看情况
17. 您对村里面集体修路怎么看?
- A 很好, 愿意出钱出力 B 是好事, 但耗费太大 C 虽然和自己有关, 但不想投入金钱
18. 您对电视节目上宣传的好人好事有何感想?
- A 非常好, 自己也一定会这样做 B 好, 如果是自己还要看情况
C 是电视台宣传的, 都是假的 D 别人的事不用管
19. 您怎样看待当今社会上的见义勇为的行为?
- A 值得赞同 B 漠不关心 C 故意做作 D 傻冒 E 视情况而定
20. 您对村里面二五八杠等赌博现象怎么看?
- A 正常的娱乐活动, 自己会参加 B 有害的赌博行为, 抵制参加 C 有伤风俗, 影响治安
21. 您参与村里的麻将等赌博活动吗?
- A 有时间的话每天都玩儿 B 经常玩儿 C 偶尔玩儿一下 D 不玩儿
22. 您会选择哪种方式? (可多选)
- A 麻将 B 二五八杠 C 骰子 D 押宝 E 扑克 F 其他
23. 为什么会选择赌博? (可多选)
- A 消磨时间 B 娱乐放松 C 想赢钱 D 寻求刺激 E 其他
24. 一般在什么时候玩?

- A 白天 B 晚上 C 什么时间都行
25. 每次大概玩多长时间？
- A 4小时之内 B 4-6 小时 C 6-10 小时 D 10 小时以上
26. 主要和谁玩？（可多选）
- A 本村村民 B 亲戚朋友 C 赌博公司社员 D 其他
27. 主要在哪儿玩？（可多选）
- A 家里 B 杂货店 C 棋牌室 D 比较隐蔽的地方
28. 您觉得输赢主要原因是？（可多选）
- A 运气好坏 B 技术好坏 C 自己状态好坏 D 是否公平
29. 您怎么看待在牌桌上‘赌场无父子’以及‘亲兄弟，明算账’
- A 非常合理有必要 B 视情况而定 C 没有必要不赞成
30. 您所在的村子有哪些娱乐活动？
- A 唱歌（戏） B 跳舞 C 打太极拳 D 看电影 E 棋牌活动 F 几乎没有娱乐活动
31. 您是如何看待以前的传统节日活动的？
- A 很好，希望复原 B 一般，无所谓 C 落伍 D 迷信行为
32. 除了打牌，您在闲暇的时候还做什么？
- A 看电视 B 串门聊天 C 发展个人兴趣爱好 D 看书，读报 E 给孩子辅导功课 F 睡觉
33. 在您心中，您认为什么是最重要的？（可多选）
- A 金钱 B 权利 C 自由 D 理想 E 亲戚朋友 F 家庭
34. 在您心中，什么样的人值得尊重（有面子）？（可多选）
- A 地位尊贵 B 吃苦耐劳 C 助人为乐 D 勤俭节约 E 会玩儿的混得开的人
35. 您认为现在农村存在的主要问题是什么？（可多选）
- A 环境 B 领导不足 C 教育 D 道德以及风气败坏 G 文化活动不足
- 调查地点： 省 市（县） 镇 村
- 调查时间： 调查员：

付録2 アンケート調査結果統計

問い	A	B	C	D	E	F
1	60	46				
2	6	30	42	28		
3	11	91	4			
4	42	50	8	6		
5	19	63	17	7		
6	6	5	95			
7	4	6	11	19	66	
8	12	22	46	21	5	
9	3	31	40	29	3	
10	23	21	62			
11	17	46	53			
12	45	22	19	10		
13	32	41	20	13		
14	39	7	50	10		
15	51	17	12	9	17	
16	62	8	36			
17	17	28	61			
18	14	39	12	41		
19	12	4	2	32	56	
20	74	8	24			
21	21	50	11	24		
22	44	53	9	21	32	12
23	42	46	17	33	17	
24	54	20	8			
25	11	27	24	20		
26	38	14	41	8		

27	6	43	38	32		
28	37	34	7	4		
29	86	7	13			
30	2	0	0	78	26	
31	74	11	5	16		
32	39	19	3	2	4	40
33	81	74	14	2	21	103
34	72	11	19	15	67	
35	33	17	42	81	92	

付録3 インタビュー・聞き取り調査などに協力した関係者の情報

名前	地域	年齢	性別	職業	学歴	趣味
D	A村	64歳	男	元書記	中卒	特になし
D2	B村	50歳	男	元小学校 の教員	高卒	書道
E	B村	67歳	男	農業	小5年	占い
F	B村	73歳	男	知客	小卒	書道
G	A村	45歳	男	賭博場	小4年	賭博
H	A村	38歳	男	農業・左官	小卒	賭博
J	A村	45歳	女	賭博会社 経営者	小4年	賭博
K	A村	62歳	男	賭博会社 経営者	小2年	賭博
L	A村	26歳	男	大学村官	大学	読書
M	B村	39歳	女	主婦	中1年	賭博
N	B村	42歳	女	主婦	小2年	採茶劇
P	A村	63歳	男	定年退職 元教員	中専	民俗文化 賭博

Q	C村	42歳	女	農業・裁縫	小3年	賭博
R	B村	40歳	女	無職・賭博	小卒	賭博
S	A村	38歳	女	農業・裁縫	小5年	特になし
T	A村	55歳	男	元村幹部	中2年	テレビ
U	C村	53歳	男	トラック 運転手	小卒	麻雀賭博
V	B村	58歳	男	元村主任	中1年	特になし
W1	B村	51歳	男	左官	小卒	歌
W2	B村	57歳	男	農業・養殖	小5年	テレビ・賭博
W3	B村	57歳	男	農業	小3年	賭博
W4	B村	49歳	男	賭博経営	中2年	賭博
W5	B村	52歳	男	農業	小卒	特になし
X	A村	63歳	女	農業	文盲	採茶劇
Y	C村	71歳	女	農業	文盲	黄梅劇
Y2	C村	55歳	男	農業	小3年	特になし
Y3	C村	61歳	男	雑貨店 店主	小卒	賭博
Y4	C村	45歳	男	塗装	小卒	賭博
Z	その他	50歳	男	婚慶会 社の社長	中卒	賭博特に 麻雀
Z2	C村	62歳	男	農業	小卒	特になし
Z3	C村	49歳	男	農業	文盲	テレビ
Z4	B村	52歳	男	プロ賭博	小4年	各種賭博
Z5	A村	48歳	男	裁縫	小卒	特になし